

第3章 借用語の動詞の接頭辞付加

接頭辞付加は言語内変化として、新たな語彙単位の形成の過程を反映する。借用語は言語の語彙体系の中で比較的新しい語彙単位であり、言語外変化としての社会変化を反映することもある。借用語の動詞への接頭辞付加は、これらの側面を同時に観察できる言語のプロセスである。

本章では、語形成論とアスペクト論から借用語の動詞の接頭辞付加を論じる。借用語の動詞の数的動向や、動詞接頭辞付加のメカニズムである類推といった借用語の動詞の接頭辞付加全般に関わる語形成の問題に触れる。アスペクト論からは、第2章で論じたアスペクト対立の相対性を元に借用語の PFV 化を再解釈し、言語文化論の批判に一石を投ずる。そして接頭辞 *no-* を例に借用語の動詞のアスペクト対立を分析し、他の接頭辞と比較することで、接頭辞 *no-* の特徴を明らかにする。

3.1. ラトヴィア語における借用語の動詞

Laua は語彙論の中で、借用語を民族的借用語 (*nacionālie aizguvumi*) と国際的借用語 (*internacionālie aizguvumi* または *internacionālismi*) に分けている。前者はある言語、もしくは2,3の言語が借用している語であり、ラトヴィア語と歴史的に関係の深いフィン・ウゴル諸語 (主にリープ語)、スラヴ諸語 (主にロシア語)、ゲルマン諸語 (主にドイツ語)、その他のバルト諸語 (主にリトアニア語) からの借用語である。それに対して後者は、ラテン語やギリシャ語を主な起源とし、複数の言語が借用する語である (Laua 1981, 104-106)。

本論文では、後者の国際的借用語を主に考察の対象とする。これらの借用語は、民族的借用語に比べて新しい語彙であり、今日も活発に借用されていることから、動的なプロセスとしての動詞接頭辞付加を観察するのにより適しているからである。

国際的借用語は「発音・書記法・意味の点で対応し、少なくとも3つの異なる語派の言語で用いられる語」とされる (『言語学用語辞典』2007, 162)。動詞では、ラトヴィア語の動詞は例外なく不定形語尾 *-t* (再帰動詞であれば *-ties*) を持ち、文法的に必要な形態処理を受けるため、借用元の言語との発音と書記法の完全な対応はそもそも不可能である。意味においても完全な対応が見られないことがある。語派をまたがった複数の言語でも用いられていると考えられる動詞を主に対象にしたが、本論文筆者は実際に調査はしていない。

その中には国際的借用語とは明らかに認められない借用語の動詞がある。これらの中には口語で用いられ、ドイツ語やロシア語から借用された動詞 (ドイツ語: *liferēt* 「配達する」、*andelēt* 「売買する」、*funktierēt* 「考える」など、ロシア語: *kaifot* 「快感を得る」、*prihvatizēt* 「民営化の一環で横領する」など) がある。『借用語の動詞リスト』³⁶にはこのような動詞が約20存在する。

³⁶ 『借用語の動詞リスト』に掲載した動詞の収集方法は、本論文 0.6.3. で詳しく述べた。

借用元の言語には英語、ドイツ語、フランス語などの西ヨーロッパの言語や、それらの言語を通じて借用されたラテン語やギリシャ語などの古典語がある。以下『借用語辞典』を参考に示す。

英語：

startēt「スタートする、出場する」<start、finišēt「フィニッシュする」<finish、sponsorēt「助成する」<sponsor、streikot「ストライキする」<strike など

ドイツ語：

glancēt「光沢を出す」<glanzen、štancēt「型で作る」<stanzen、fraktēt「(貨物輸送用に船を)借りる」<frachten など

フランス語：

eksploatēt「搾取する、稼働させる」<exploiter、koķētēt「おべっか使いをする」<coqueter、demonēt「解体する」<démonter など

他の言語を仲介にして借用された動詞 (šantažēt「脅す」<ロシア語 šantažirovat' <フランス語 chantage) や、借用元の言語の特定が難しい動詞 (bloķēt「ブロックする」<英語 block、ドイツ語 blockieren) があるが、接頭辞付加の関連において借用元の言語と仲介語は考慮に入れない。

借用語の動詞の形態について説明をする。借用語の動詞の不定形は「ほぼすべて」-ēt で終わる (『標準語文法』1959, 337)。実際に『借用語の動詞リスト』の動詞 1230 のうち 1114 の動詞が-ēt (再帰動詞は-ēties) で終わり (90.6%)、116 の動詞が-ot (再帰動詞は-oties) で終わる (9.4%)。どちらの不定形語尾を持つ動詞も第2変化タイプ³⁷に属する。

借用語の動詞は文体的に様々である。一般に国際的借用語は文体的に中立だが、専門用語的な性格を持ち、学術的な文体で最も多く用いられるとされる (Laua 1981, 118)。しかし借用語の動詞は、国際的借用語であるかないかに関わらず口語でも用いられる。特に、ドイツ語やロシア語から借用された国際的借用語とはみなせない動詞³⁸や、kafijot「コーヒー (kafija) を飲む」や čekot「チェック (čeks) する」のように不定形が-ot で終わる動詞の多くは口語に特徴的である。借用語の動詞には、同じ意味のラトヴィア語本来の語の方が一般的に用いられる動詞もある (zvanīt「電話する」に対する借用語 telefonēt など)。

一般に、語彙は時代や社会を反映するものであり、借用語も品詞を問わず社会変化を反

³⁷ 第2変化の特徴は、直説法において1人称単数の現在と過去が同形 (es fotografēju「私は写真を撮る」、es fotografēju「私は写真を撮った」)、2人称単数と3人称の現在が同形 (tu fotografē「君は写真を撮る」、viņš fotografē「彼は写真を撮る」) である。

³⁸ ロシア語起源の動詞は、動詞の不定形が-ēt や-ot では終わらず、ロシア語の動詞の不定形をそのままラトヴィア語に用いることがある (kačāt「揺らす」<kačāt'、zubrīt「暗記する」<zubrit'、kruķīt「回す」<krutit'）。これらの動詞も第2変化の動詞に属し、接頭辞が付加される (nokačāt「ダウンロードする」、uzkačāt「筋肉を鍛える」、iezubrīt「丸暗記する」など)。しかしこれらの基動詞、および接頭辞動詞の用例は『新聞図書館』では極めて少ないため、本論文で使用する『借用語の動詞リスト』には含んでいない。

映することがある。借用語の動詞の中にも、ソ連崩壊後の社会・政治構造の変化を反映した動詞（privatizēt「私有化する」）や、科学技術の発展を反映した動詞（klonēt「クローンとして増やす」）が挙げられる。特に近年はパソコンの普及により、パソコン操作に関する動詞や、チャットやブログといったインターネット上の活動を表す動詞が目立つ。

基動詞の示す動作が社会にとって話題となったり、身近になるに従い、基動詞と接頭辞動詞の件数の増加が一般に観察される。『新聞図書館』の年ごとの記事の検索機能を利用すると、科学技術の発達やパソコンとインターネットに関係する多くの動詞の件数は、1996年から2011年までの16年間で増加していることがわかる。参考までにクローン羊の誕生が発表された1997年、その前年の1996年と2011年の年間の件数、また1996年から2011年までの16年間の件数の合計を表3-1にした（網掛け部分は基動詞）。

表 3-1：基動詞と接頭辞動詞の登場の例

最終確認日：2012年8月2日

	1996年	1997年	2011年	16年間
klonēt「(クローンで) 作る」	0	72	63	2564
noklonēt「(クローンで) 作る」	0	0	2	12
saklonēt「(クローンで) 沢山、一緒に作る」	0	0	0	11
uzklonēt「(クローンで) 作る」	0	0	0	4
pārklonēties「(クローンで) 変わる」	0	0	0	1
datorizēt「コンピュータ化する」	45	104	301	6072
pārdatorizēt「再コンピュータ化する」	0	0	0	4
instalēt「インストールをする」	4	18	107	2059
uzinstalēt「(上に) インストールする」	0	0	12	108
pārintalēt「再インストールする」	0	1	9	71
ieinstalēt「(中に) インストールする」	0	0	2	49
atinstalēt「アンインストールする」	0	0	1	9
noinstalēt「アンインストールする」	0	0	0	5
pieinstalēt「インストールで加える」	0	0	0	5
sainstalēt「(多量に) インストールする」	0	0	0	4
apinstalēt「(多量に) インストールする」	0	0	0	1
izinstalēt「アンインストールする」	0	0	0	1
programmēt「プログラミングをする」	39	88	524	8169
ieprogrammēt「プログラミングをする、覚悟する」	26	50	150	3198
pāpprogrammēt「再プログラミングする」	2	2	44	557
sapogrammēt「(沢山) プログラミングす	0	3	6	101

る」「プログラミングして作る」				
uzprogrammēt 「プログラミングする」	0	0	2	26
noprogrammēt 「プログラミングする」	0	0	0	4
pieprogrammēt 「追加する、適応させる」	0	0	0	2
atprogrammēt 「洗脳を解く」	0	0	0	1
skenēt 「スキャンする」	2	7	160	2009
ieskenēt 「スキャナーで取り込む」	0	1	90	564
noskenēt 「スキャンする」	0	1	24	234
pārskenēt 「再スキャンする」	0	0	0	14
izskenēt 「透視する」	0	0	1	10
saskenēt 「たくさん、まとめてスキャンする」	0	0	1	4
blogot 「ブログをする」	0	0	71	582?
ieblogot 「(ブログに) 書き込む」	0	0	0	1
čatot 「チャットをする」	0	0	34	1046
pačatot 「ちょっとチャットをする」	0	0	2	67
sačatot, sačatoties 「チャットで交流する」 「チャットで得る」	0	0	1	11
atčatot 「チャットで返信を書く」	0	0	0	1
iečatot 「チャットで取り込む」	0	0	0	1
tvītot / tvīterot / tvīterot 「ツイートする」	0	0	51/16/2	80/54/8
ietvītot / ietvīterot 「ツイートする、書き込む」	0	0	7/0/	10/1
notvītot 「(一回) ツイートをする」	0	0	0	1
patvītot 「少しツイートをする」	0	0	1	1
pārtvītot 「リツイートをする」	0	0	0	2
gūglēt / guglēt 「Google で検索する」	0	0	1/3	11/3
iegūglēt / ieguglēt 「Google で検索する」	0	0	7/4	20/7
pagūglēt / paguglēt 「Google で検索してみる」	0	0	3/1	5/1
skaipot 「スカイプをする」	0	0	3	17
saskaipoties 「スカイプで交流する」	0	0	0	1
uzskaipot 「スカイプ上で話しかける」	0	0	0	1
paskaipot 「少しスカイプをする」	0	0	1	1
laikot 「(フェイスブック上で) Like を押す」	0	0	1	1
ielaikot 「(フェイスブック上で) Like を押す」	0	0	1	1
feisbukot 「フェイスブックを使う」	0	0	0	0
iefeisbukot 「フェイスブックに書き込む」	0	0	0	1

linkedīnot 「リンクトインを使う」	0	0	0	0
ielinkedīnot 「リンクトインに書き込む」	0	0	0	2

パソコンに関連する概念が身近なものとなり、転義として用いられるようになった動詞もある。例えば基動詞 *programmēt* 「プログラミングをする」から派生した *ieprogrammēt* は「覚悟させる」の意味で、人間の行動や気分に関しても用いられるようになってきている。

基動詞 *kopēt* 「コピーする」は、マウスによるコピー・アンド・ペーストやドラッグ・アンド・ドロップ、CD を焼く、ディスクへの書き込みなどの動作を示すようになり、コピー機や「書き写す」といった従来の動作では考えにくかった空間性と結びつき、対応の空間的意味の接頭辞が付加されている³⁹。

例文 3-1 (RB. 13.10.2006)

Tagad visi sabīdē ar digitālajiem aparātiem, „iepumpē” datorā,
 今 皆 たくさん写真を撮る-現3 で デジタルの 機器-複 取り込む-現3 パソコン-位
iekopē diskā (..).
 中にコピーする-現3 ディスク-位

現代は皆がデジタル機器で写真をたくさん撮ったり、パソコンに“取り込んだり”、ディスクの中にコピーする。

例文 3-2 (DB. 29.06.2005)

Vēlāk uzrakstīto tekstu no interneta lapas var *izkopēt* un
 後で 書く-受過 テキスト-対 から インターネット-属 ページ できる-現3 コピーで抜き出す そして
viegli izmantot tālāk.
 簡単に 利用する その先に

書いたテキストは後でインターネットのページからコピーでき、その後簡単に使うことができる。

例文 3-3 (G.)

Sakopēju vienuviet šajās dienās sabīdēto un
 一緒にコピーする-現1 単 一つの場所に この 日-複位 たくさん写真に撮る-受過-対 そして
safilmēto.
 たくさん映像に撮る-受過-対

この数日写真や動画で撮り集めたものを私はひとつの場所に (まとめて) コピーした。

こうした新しい語である借用語の動詞に対して、既存の語形成の手段である接頭辞は基動詞の示す概念に空間的、アスペクト的な意味修正を加え、形式的には有限な (11 の接頭辞)、意味的には接頭辞と基動詞の語彙の意味が許容する範囲で、さらに新たな語彙単位を作り出す。接頭辞付加は新しい語をラトヴィア語の語彙体系の中に取り込んでいく過程であり、接頭辞はそのための手段である。

³⁹ パソコンの普及以前には、接頭辞動詞 *iekopēt* 「(中に) コピーする」は「カセットへのコピー」といった用例もあり、『新聞図書館』でコピーの手段別の用例を分けることは難しいため、パソコンに関係した動作を示す基動詞 *kopēt* 「コピーする」とその接頭辞動詞の件数の推移は表 3-1 では挙げていない。

3.2. 借用語の動詞の接頭辞付加の動向

本節では2012年2月13日までの記事を対象とした『新聞図書館』を利用し、『借用語の動詞リスト』における基動詞への接頭辞付加の数的動向を概略する。

収集した1230の動詞と11の動詞接頭辞の組み合わせにより、理論的には13530の接頭辞動詞が存在し得る。『新聞図書館』で収集された接頭辞動詞の件数は0から最大で約5万件 (noformēt「形成する、記入する」と幅は大きい。しかし『新聞図書館』で1件でも用例が収集された⁴⁰接頭辞動詞は2642あり、理論的に可能な接頭辞動詞全体の19.5%⁴¹にあたる。一方、件数が0であった接頭辞動詞は10888あり、全体の80.5%にあたる(表3-2)。

表3-2:『新聞図書館』における借用語の接頭辞動詞の割合

最終確認日:2012年8月2日

理論的に可能な接頭辞動詞の総数	13530	100 (%)
件数が1以上の接頭辞動詞	2642	19.5
件数が0の接頭辞動詞	10888	80.5

『新聞図書館』において、最低1つの接頭辞が付加される基動詞は1230の基動詞中783(63.7%)あり、どの接頭辞も付加されていない基動詞は1230の基動詞中447(36.3%)ある。これにより、借用語の基動詞の半分以上に何らかの接頭辞が付加されることになる(表3-3)。

表3-3:最低1つの接頭辞が付加される基動詞の割合

最終確認日:2012年8月2日

基動詞の総数	1230	100 (%)
接頭辞動詞が1以上の基動詞	783	63.7
接頭辞動詞が0の基動詞	447	36.3

各接頭辞が1230の基動詞のうちいくつかの基動詞に付加されたかを示す付加率も調査した(表3-4とグラフ3-1)。他の接頭辞と比較して群を抜いている生産的な接頭辞はno-(40.0%)であり、sa-(25.8%)、ie-(25.0%)、iz-(23.3%)、pār-(23.3%)、pa-(20.6%)がこれに続いている。すべての接頭辞が同様にPFV化に関わっているわけではないが、Staltmaneが生産的なPFV化の接頭辞(形式的接頭辞)として挙げていたsa-、no-、iz-、pa-(Staltmane 1958d, 58)には、借用語の動詞に対しても比較的高い付加率が確認できる。

⁴⁰ 本節では、接頭辞付加が可能で接頭辞動詞が実際の使用があったこと自体に注目している。そのため『新聞図書館』においてある接頭辞動詞の使用が1件しか確認されず、別の接頭辞動詞が10000件確認されても、ここでは個々の接頭辞動詞の使用の件数には注目していない。

⁴¹ 本節で示す百分率の数字はすべて、小数点第二位を四捨五入している。

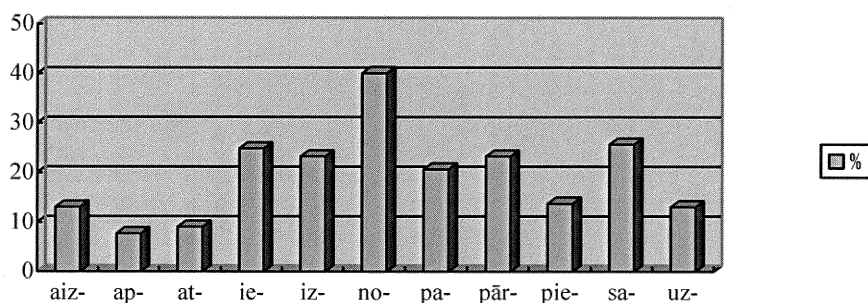
表 3-4 : 1230 の基動詞への接頭辞ごとの付加率

最終確認日 : 2012 年 8 月 2 日

接頭辞	付加された基動詞数	100 (%)
aiz-	161	13.1
ap-	96	7.8
at-	112	9.1
ie-	307	25.0
iz-	286	23.3
no-	492	40.0
pa-	253	20.6
pār-	287	23.3
pie-	170	13.8
sa-	317	25.8
uz-	161	13.1

グラフ 3-1 : 1230 の基動詞への接頭辞ごとの付加率

最終確認日 : 2012 年 8 月 2 日



3.5.2.で見ると、接頭辞 no-は余剰な PFV 化の接頭辞として言語文化論で最も批判される。本章の 3.6. と 3.7. では接頭辞 no-と no-動詞の分析をし、3.8.3.では付加率の高い他の接頭辞 (sa-と iz-) と比較した接頭辞 no-と no-動詞の特徴を考察する。

付加率の高い接頭辞には ie-と pār-もある。接頭辞 ie-は「中」という空間的意味の他、「少し」という意味のアスペクトを示し、形式的意味の接頭辞として機能することは多くない。接頭辞 pār-は「動作のやり直し」や再帰要素と結びついて過度の動作を示し、形式的意味の接頭辞としてアスペクト対立に関与することは少ない。よってこの2つの接頭辞は no-とは比較しない。

3.3. 接頭辞動詞の派生における類推

借用語の動詞の接頭辞付加は、生産的で且つ創造的な語形成のプロセスである。借用語の動詞は、どのようなメカニズムで接頭辞付加を受けるのだろうか。

例文 3-4 (DR. 10.08.2002)

Nopietni domā un paša vārdiem sakot, aizanalizējas.
真剣に 考える-現3 そして 自分-属 言葉-複具 言う-副 分析にふける-現3

[現代人は] 真剣に物事を考え、僕の言葉で言うと、分析にふけてしまう。

例文 3-4 の話者は「僕の言葉で言うと (paša vārdiem sakot)」と断りを入れていた上で、接頭辞動詞 *aizanalizēties* 「分析にふける」を使っている。基動詞 *analizēt* 「分析する」から派生したこの接頭辞動詞は、辞書はもちろんのこと、検索エンジン Google で検索をしても見つからない (最終確認日: 2012 年 8 月 2 日)。この動詞は紛れもなく、話者が作った新たな派生語である。

言語使用者が新たな派生語を作り、読み手が初めて見た語の意味を理解できるのはなぜか。語の作り手も、その語の意味の受容者である読み手も、共通の言語的知識によってコミュニケーションを成立させているわけだが、そこには意味類推の原則が働いている。

その語の使用頻度に関わらず、「様々なクラスの (常用的な、非常用的な) 新たな語彙の研究では、語形成のメカニズムにおける非常に高い類推の役割が示される」と Zemskaja が指摘するように (Zemskaja 2009, 204)、類推は欠落する文法的なパラダイムを埋める以外にも、新たな語の派生において重要な役割を果たしている。

ある言語における語彙の大部分は、具体的な語形成のモデルに関連付けられる。上の例文 3-4 において、派生語の作り手と読み手の間で共通知識となっているのは、「動作の没頭」という高い集中性を示す「接頭辞 *aiz-* + 再帰要素」という語形成のモデルの存在である。ラトヴィア語本来の動詞では、*aizrunāties* 「話し込む」(*runāt* 「話す」)、*aizsapņoties* 「夢にふける」(*sapņot* 「夢見る」)、*aizdomāties* 「考え込む」(*domāt* 「考える」) などの同じ語形成モデルの動詞がある。借用語の動詞においても、*aizanalizēties* と同じ語形成モデルに属する動詞として、*aizkritizēties* (*kritizēt* 「批判する」)、*aizdiskutēties* (*diskutēt* 「討論する」)、*aizdežurēties* (*dežurēt* 「当直する」)、*aizdriblēties* (*driblēt* 「ドリブルする」) などが『新聞図書館』で見られる。

『新聞図書館』で 1 件しか用例がない接頭辞動詞には、例文 3-5 の *saskaipoties* 「スカイプで連絡を取り合う」もある。この動詞の直後の説明ではスカイプが何であるのかを知らない読者への配慮としてスカイプの説明がなされているが、動詞の構造 (接尾辞 *-o-*、接頭辞 *sa-* と再帰要素) の説明はない。スカイプの説明しかなされていないのは、接尾辞 *-o-* が名詞から動詞を生産的に派生させ、接頭辞 *sa-* と再帰要素が相互動作を示すことが、説明する必要のない共通知識だからであると考えられる。同テキスト中で用いられ、同じ語形成モデル (接頭辞 *sa-* + 再帰要素で「相互動作」) を持つ他の動詞 *sazināties* 「連絡を取る」(基動詞

zināt「知っている」)、sazvanīties「電話し合う」(基動詞 zvanīt「電話する」)と sarakstīties「書き合う、文通する」(基動詞 rakstīt「書く」)もまた、saskaipoties の理解(同じ語形成モデル、特に sazvanīties と sarakstīties については基動詞部分が連絡手段となる動作)を促進している。

例文 3-5 (DR. 06.03.2007)

Tomēr internets arī palīdz sazināties ar draugiem un radiem, kuri ir
やはり インターネット も 助ける-現3 連絡を取り合う と 友人-複 そして 親戚-複 関代 be-現3
joti tālu. Citkārt varbūt nesazvanītos, nesarakstītos, bet internets to visu
とても 遠い 昔はよく 多分 否-電話をし合う-願 否-書き合う-願 しかし インターネット それ すべて-対
atvieglo. Tas ir arī lētāk. Bieži vien ar draugiem saskaipojos (saziņas
簡単にする-現3 それ be-現3 も 安い-比 よく 助 と 友人-複 スカイクをし合う-現1単 通信-属
programma Skype – red.), paplāpāju.
プログラム 編集部 少しおしゃべりする-現

それでもインターネットは、遠くの友人達や親戚達と連絡を取り合うのにも役立っている。昔なら電話や、手紙でも連絡を取り合わないなんてこともあったけど、インターネットならすべて簡単にできる。それに安い。よく友人とスカイクで連絡を取り合っ(編集部注記：スカイクとは通信プログラムのことである)、おしゃべりをしているよ。

接頭辞付加された借用語の動詞が、ラトヴィア語本来の接頭辞動詞に関係づけられていることは、「ラトヴィアの農民の言葉で言えば (latviešu zemnieka valodā runājot)」に導かれるメタ言語的な表現⁴²においても確認できる。次の例文 3-6 では、lobēt「ロビー行為をする」に接頭辞 pie-を付加した pielobēt「ロビーで操る」が、ラトヴィア語本来の動詞 kukuļot「収賄をする」に接頭辞 pie-を付加した piekukuļot「賄賂で操る」で言い換えられている⁴³。

例文 3-6 (DB. 7.05.2002)

Savu interešu aizsardzību gūs tikai tas, kurš, angliski izsakoties, prātīs
自分の 利益-複属 保護-対 得る-未3 だけ 者 関代 英語で 表現する-副 できる-未3
pielobēt, bet latviešu zemnieka valodā runājot – piekukuļot
ロビー活動で操る しかし ラトヴィア人-複属 農民-属 言語-位 話す-副 賄賂で操る
Briseles ierēdņus uz labākiem nosacījumiem.
ブリュッセル-属 官僚-複対 上に 良い-比 条件-複

自らの利益の保護を受けるのは、ブリュッセルの官僚たちをよりよい条件で、英語で言うと、ロビーで操る能力がある者、ラトヴィア人の農民の言葉で言えば、賄賂で操る能力がある者だけである。

⁴² 本論文では、テキストや発話において、ある語や表現の置き換えや説明となる別の語や表現をメタ言語的な表現とする。このメタ言語的な表現には、カッコやダッシュなどの記号や、vai「または」や jeb「すなわち」といった接続詞、citiem vārdiem sakot「言い換えると」や tas ir「つまり」といった言い換えや説明を導く表現がある。借用語の接頭辞動詞に伴うメタ言語的な表現は、借用語の接頭辞動詞の意味分析に役立つ。

⁴³ ある接頭辞を持つ動詞を同じ接頭辞を持つ違う動詞で説明することは、辞書記述において見られる。それが顕著なのは、2006年発刊の『ラトヴィア語スラング辞典 (Latviešu valodas slenga vārdnīca)』である。この辞典では、スラングの接頭辞動詞は同じ接頭辞を持つ標準語の動詞で説明されていることが多い。

基動詞 *lobēt* 「ロビーする」と *kukuļot* 「収賄する」は、政治的圧力をかけたり、他者に金銭を渡すなど、何らかの利益のために行う行為である点が共通している。接頭辞 *pie-* の空間的意味は「接近」であるが、補語となる事物を比喩的に「自身に近づける」という解釈から、これらの接頭辞動詞は「ロビーで人を操る」「収賄で人を操る」という意味になる。

例文 3-7 では、空間的意味の接頭辞 *ie-* 「中」が付加された動詞 *iepostēt* 「中に投稿する」(基動詞 *postēt* 「投稿する」) が、助詞 *nu* (英語の *well* に相当) を挟んで、ラトヴィア語本来の動詞と同じ空間的意味の接頭辞を持つ動詞 *ielikt* 「中に置く」(基動詞 *likt* 「置く」) で言い換えられている。

例文 3-7 (LA. 30.06.2011)

Nu, "Tviteris" ir tāds amerikāņu serviss, kur katrs var iepostēt,
助 ツイッター be-現3 その アメリカ人-複属 サービス 関代 各人 できる-現3 投稿する

nu, ielikt ziņojumu, ko viņš dara vai darīs.
助 中に置く 知らせ-対 何を 彼 する-現3 または する-未3

まあ、「ツイッター」というのはアメリカのサービスで、今していることやこれからすることを誰でもポスト、その、お知らせを載せることができます。

次の例文 3-8 では、「導入」という語彙的意味を持つ接頭辞 *ie-* が付加された *ievadīt* 「導入する、前座をする」(基動詞 *vadīt* 「導く、進行する」) の言い換えとして、接頭辞動詞 *iebreikot* 「ブレイクダンスで前座をする」(基動詞 *breikot* 「ブレイクダンスをする」) が「彼らの演奏」を補語にして用いられている。

例文 3-8 (ZZ. 05.09.2003)

(..) turnejas pirmajā dienā (..) viņu uzstāšanos laipni piekritusi ievadīt
ツアー-属 最初の 日-位 彼ら-属 演奏-対 快く 承諾する-能過 前座をする

(tas ir, iebreikot) «Tonusa» «F.L.A.S.H. Dance» grupa (..).
それ be-現 ブレイクダンスで前座をする Tonus-属 グループ

ツアー一日目に彼らの演奏の前座(つまり、ブレイクダンスで前座)を快く引き受けたのは、Tonuss の F.L.A.S.H. Dance のグループだった。

例文 3-8 と同様に例文 3-9 でも、接頭辞 *pie-* 「伴」が付加された *piedziedāt* 「バックで歌う」と *pierepot* 「バックでラップを歌う」(基動詞 *dziedāt* 「歌う」と *repot* 「ラップをする」) から派生した名詞 *piedziedājums* 「歌のリフレイン」と *pierepojums* 「ラップのリフレイン」が用いられ、前者を後者が言い換えている。

例文 3-9 (VAVZ. 20.02.2004)

(..) varēja (..) piebalsot Zakam piedziedājumos (vai varbūt pareizāk būtu jāsaka
できる-過3 伴唱する Zaks-与 歌のリフレイン-複位 または 多分 正しく-比 be-願 言う-義
- pierepojumos?).
ラップのリフレイン-複位

Zaks に歌のリフレイン(というかラップのリフレイン?)で伴唱できた。

ラトヴィア語本来の接頭辞動詞による借用語の接頭辞動詞の言い換え（例文 3-6 と例文 3-7）には、なじみの薄い借用語の接頭辞動詞を、ラトヴィア語本来の接頭辞動詞で言い換える説明的性格が強い。逆に、ラトヴィア語本来の接頭辞動詞を伴い、カッコに入れられた借用語の接頭辞動詞（例文 3-8 と例文 3-9）には、直前のラトヴィア語本来の接頭辞動詞に“頼る”形で、話者が動作の新しい名づけを試みる側面が認められる⁴⁴。実際に、例文 3-8 と例文 3-9 の接頭辞動詞 *iebreikot* と接頭辞動詞から派生した名詞 *pierepojums* は、どちらも『新聞図書館』では唯一の用例である。

例文 3-10 では、借用語の動詞 *piketēt* 「ピケをする」と *klenderēt* 「歩く」に接頭辞 *iz-* 再帰要素が付加され、「満足をもたらす高い集中性の動作」を示す接頭辞動詞 *izpiketēties* 「思う存分ピケをする」と *izklenderēties* 「思う存分練り歩く」が用いられている。さらにこの語形成モデルを引き継ぐ形で、政治家 3 人の固有名詞に付加され、*izždanokoties* 「思う存分 *Ždanoka* を支持する」、*izjurkānoties* 「思う存分 *Jurkāns* を支持する」、*izrubikoties* 「思う存分 *Rubiks* を支持する」というその場限りで用いられる臨時語⁴⁵ (*okazionālismi*, *occasionalisms*) の動詞が用いられている。これら臨時語もまた、接頭辞 *iz-* 再帰要素の語形成モデルを持つ直前の 2 つの動詞に関連付けられ、類推によってできた接頭辞動詞である。

例文 3-10 (JA. 28.08.2000)

Izpiketējās, *izklenderējās* *aizlīmētām* *mutēm,* *izždanokojās,*
 思う存分ピケをする-過3 思う存分歩く-過3 貼って塞ぐ-受過 口-複具 思う存分 *Ždanoka* を支持する-過3
izjurkānojās, *izrubikojās* (...).
 思う存分 *Jurkāns* を支持する-過3 思う存分 *Rubiks* を支持する-過3
思う存分ピケをして、口をテープで塞いで練り歩き、思う存分 *Ždanoka*、*Jurkāns*、*Rubiks* を支持した。

Zemskaja は語形成の行為的な性格がよく見られる現象について、「同じ構造を持つ派生語の中に入り込む臨時語は、語形成モデルの慣性により生まれている」としている (*Zemskaja* 2009, 170)。この「語形成モデルの慣性」こそが、他の既存の接頭辞動詞に“つられる形で”新たな接頭辞動詞が生まれる、もしくは話者が生み出すメカニズムとなっている。

例文 3-11 では接頭辞動詞 *izčīkstēt* 「ブツブツ言う」（基動詞 *čīkstēt* 「ブツブツ言う」）と借用語の接頭辞動詞 *izdiktēt* 「命令する」（基動詞 *diktēt* 「命令する」）が用いられている。

⁴⁴ 借用語とラトヴィア語本来の語による言い換えや、順番の違いによるこの現象の側面の違いは、本論文 5.2.4.1.でも触れる。

⁴⁵ 臨時語は「新語で、具体的なテキストや具体的な発話において文体的機能のために主に派生され、既存の語形成の規範に違反することが多い。臨時語は普通一人の作者にのみ用いられ、言語の語彙体系の構成部分にはならない」とされる（『言語学用語辞典』2007, 267-268）。

似た概念には潜在語 (*potencialismi*, *potencial neologisms*) があり、「最近派生した語で言語の語彙体系の構成部分にはまだなっていないが、(中略)なる可能性があるもの、または語としては実現されていないもののその可能性が言語に存在しているもの、つまり言語の生産的な語形成モデルの型に沿って派生できる語」とされる（『言語学用語辞典』2007, 306）。この説明によれば、臨時語と潜在語の区別は、既存の語形成のモデルが生産的であるかないかであるが、その特定は容易ではない。

しかし *izždanokoties* 「*Ždanoka* を思う存分支持する」のように人名に接尾辞 *-o-* を付加して動詞を作ることとは一般的ではないため、臨時語と言ってもよいだろう。

例文 3-11 (LR.13.05.2010)

Viņš savā veidā šo to var izčīkstēt, izdiktēt vecākiem.
 彼 自分の 方法-位 これ-対 それ-対 できる-現3 ブツブツ言う 命令する 親-複与
 彼は自分なりに親にあれこれをブツブツ言い、命令することができる。

基動詞は共に発話に関する動詞で、接頭辞 iz-は空間的意味「外」を元に、発話に関する基動詞を他動詞化する。基動詞 čīkstēt は自動詞であるが、diktēt は自動詞でもあり他動詞でもあるため、izdiktēt には本来接頭辞は必要がないとも言える。この接頭辞動詞は『新聞図書館』や検索エンジン Google にはなく（最終確認日：2012年8月2日）、ラジオ番組でのみ見つかった動詞で、直前の izčīkstēt の語形成のモデルの類推により派生したと思われる。

3.4. 接頭辞クリップ — 共通の意味で動詞をつなぐ接頭辞

例文 3-6 から例文 3-9 に見られるような接頭辞動詞に関するメタ言語的な表現以外にも、接頭辞動詞の意味を特定する指標となるのが、複数の動詞に同一の意味をもたらす接頭辞が連続、または近い距離で用いられる場合である。本論文ではこの現象を“接頭辞クリップ”と呼ぶ。接頭辞クリップはラトヴィア語本来の動詞だけでなく、借用語の接頭辞動詞にも観察され、借用語の接頭辞動詞の意味の特定や分析に役立つ。

本節では、借用語とラトヴィア語本来の接頭辞動詞の用例でこの現象を定義する。

3.4.1. 接頭辞クリップ

ロシア語の語形成論において Zemskaja は、語形成の観点から一次的な語（動詞なら基動詞）と二次的な語（動詞なら接辞付加された動詞）、または共通する構造（基動詞部分、または接辞部分）を持つ二次的な語同士が同じテキスト中に現れる現象を「語の語形成の構造や語形成の意味の顕在化」の例として扱っている。その中で、同じ接頭辞を持つ語がテキストで連続する場合、「接頭辞はクリップ (skrepa) のようにテキストのまとまりを強調し、音的組成 (zvukovaja organizacija) を強調する一つの意味を表現」し、「接頭辞の意味の共通性と、基動詞と接頭辞動詞のカテゴリックな意味を強調する」(Zemskaja 2009, 168) とし、“クリップ”という表現を一度用いている。Blinova はこの表現を用いていないが、テキストにおいて顕在化するモチベーションの観点で関係している複数の語の使用としてこの現象を分析している (Blinova 2010)。

このような顕在化は、結束性 (kogežija) と強調の手段とされる (Zemskaja 2009, 167)。Blinova は結束性という言葉を用いていないものの、接頭辞の連続使用を含む顕在化の現象に「連結 (skrepy)」や「テキスト構成 (tekstoformirujuščaja)」の機能を指摘しており、事実上結束性の機能を見出している (Blinova 2010, 122, 124)。

本論文では Zemskaja の指摘を元に、複数の接頭辞動詞が同一の接頭辞を持ち、接頭辞に

よる基動詞への同様の意味修正が認められる現象を接頭辞クリップと呼ぶ。この接頭辞クリップは、接頭辞動詞間、基動詞間、また基動詞と接頭辞間に意味的関連性があり、接頭辞付加が語形成モデルを元にした意味類推に基づいていることを示す現象⁴⁶である。

ラトヴィア語では Urbanoviča が文学作品を素材に、テキストの和音とリズムの重要性に関連して、同じ意味の接頭辞を持った動詞の使用に触れている (Urbanoviča 2009, 130)。確かに、ラトヴィアの伝統的な民謡「ダイナス (Dainas)」においても接頭辞クリップの現象は観察される。例文 3-12 の aizrunāt 「口で勝つ」と aizdziedāt 「歌で勝つ」では接頭辞 aiz- が「凌駕」という共通の語彙的意味を持ち、共に発話に関する語彙的意味を持つ基動詞 runāt 「話す」と dziedāt 「歌う」に付加されている。

例文 3-12 (DS.)

Kas var mani aizrunāt, kas var mani aizdziedāt?
 誰が できる-現3 私-対 口で勝つ 誰が できる-現3 私-対 歌で勝つ
 誰が私に口で勝てるだろうか、誰が私に歌で勝てるだろうか?

詩的言語を体現する文学作品以外の新聞やラジオなどでも、この接頭辞クリップは確認される。以下の例文 3-13 と例文 3-14 では、接頭辞 iz-+再帰要素で「満足をもたらす高い集中性の動作」を示す動詞が連続して用いられている。

例文 3-13 (KR. 30.10.2008)

Vairs tikai puse mēneša atlikusi, lai mēs paspētu tā kārtīgi izdziedāties,
 もはや だけ 半分 月 残る-能過 ために 私達 時間がある-願 助 しっかりと 思う存分歌う
 izdejojoties, izskrietoties, izrakstoties, izdzejojoties par Latviju.
 思う存分踊る 思う存分走る 思う存分書く 思う存分詩を詠む ために ラトヴィア

[11月18日の独立記念日について] 我々がラトヴィアのために思う存分歌い、踊り、走り、書き、詩を詠むまで、あと半月しか残っていない。

例文 3-14 (M. 27.06.2009)

Lai latvju tauta (..) varētu kārtīgi izsvinēties, izdejojoties, izdziedāties,
 ために ラトヴィア人-複属 民族 できる-願 しっかりと 思う存分祝う 思う存分踊る 思う存分歌う
 izēsties, izdzerties (..).
 思う存分食べる 思う存分飲む

ラトヴィア民族がよくお祝いをし、踊り、歌い、食べ、飲めますように。

次の例文 3-15 では、形式的には例文 3-13 と例文 3-14 と同じく接頭辞 iz-+再帰要素が 3 つの動詞にまたがっている。しかし上の 2 つの例文に見られる語形成モデルと同様の動詞は izdziedāties 「しっかりと歌う」(基動詞 dziedāt) のみである。izmācīties 「しっかりと勉強する」では接頭辞 iz-が単独で動作の徹底性を表し、再帰要素は動詞 mācīt 「教える」に再帰の意味

⁴⁶ この現象は単に「接頭辞の反復」とも呼ばれる (Krongauz 1998, 40-44, Zemskaja 2009, 169)。しかしこの表現では、テキストにおいて接頭辞が持つ結束性の機能は不明なままである。

(mācīties 「学ぶ (=自分に教える)」)を与えている。izklaidēties 「遊ぶ」は名詞 izklaide 「娯楽」から派生した動詞 izklaidēt 「楽しませる」の再帰動詞である。基動詞 klaidēt 「楽しませる」だけで使われることは少なく、接頭辞 iz-は基動詞と結びつき語彙化している。これらの接頭辞動詞では、接頭辞（ここではさらに再帰要素）の基動詞への意味修正が各動詞で異なり、接頭辞クリップとは言えない。

例文 3-15 (AP. 25.02.2006)

Atceros, es paspēju izmācīties, izdziedāties un vēl izklaidēties.
 覚える-現1単 私 時間がある-過1単 よく勉強する 思う存分歌う そして また 遊ぶ
 私はよく勉強をし、しっかり歌い、さらに遊ぶ時間もあつたことを覚えている。

例文 3-16 では、接頭辞 pa-が「少し、試み」という意味で基動詞の domāt 「考える」、skatīties 「見る」、runāt 「話す」を結びつけている。

例文 3-16 (LR. 18.08.2010)

Kāda bija atbilde? „Padomās, paskatīties, parunās”.
 どんな be-過 答え PA-考える-未3 PA-見る-未3 PA-話す-未3
 [役人の] 応対はどんなだっただろうか? “考えて、様子を見て、話してみます”。

例文 3-16 と同じく例文 3-17 では、「少し」というアスペクトの意味を持つ接頭辞 pa-が2つの基動詞 sēdēt 「座っている」と filozofēt 「哲学をする」に付加されている。基動詞 dzert 「飲む」に付加される接頭辞 pa-は「たくさん、十分に」という反対の意味になるため、ここでは「少し」を意味する接頭辞 ie-が付加され、共通の意味が保たれている。

例文 3-17 (LA. 29.09.2010)

Viņiem svarīgi, lai attiecības būtu personiskas, un tādas vislabāk
 彼ら-与 大切だ ために 人間関係-複 be-願 個人的な そして そのようなもの-対 良い-最
 nodibināt, kopā pasēžot, iedzerot, pafilozofējot.
 築く 共に 少し座っている-副 少し飲む-副 哲学をする-副
 彼らにとって大切なのは、人間関係が個人的であることで、それは、共に座り、酒を交わし、哲学をする
ことで築くのがよい。

例文 3-17 では、接頭辞はすべての動詞に同一でないものの、「少し」という意味が3つの接頭辞動詞に共通している。この例文は、接頭辞が同一かどうかに関わらず、同じ統語的位置にある動詞の意味に結束性があることを示す例である。

同様に例文 3-18 では、「少し」の動作を共に示す接頭辞 uz-⁴⁷が付加された動詞 uzveikot 「ウェイクボードをちよつくらする」とその言い換えの接頭辞 pa-が付加された動詞 pabraukt ar vējdēli 「ウィンドボードに少し乗る」というメタ言語的な表現がある。ここでは

⁴⁷ 接頭辞 uz-は接頭辞 pa-と同様に「少し」の動作を示すが、接頭辞 pa-よりも口語的である。

「少し」の意味が異なる接頭辞によって言い換える際にも保たれている。移動を示す動詞 *braukt* 「乗り物で行く」は接頭辞の空間的意味を引き出すため、*uzbraukt* 「乗り物で上る」では *uzveikot* の言い換えにはならない。

例文 3-18 (RB. 22.07.2005)

(..) *pa ceļam apstājušies Ozolnieku ezerīnā "uzveikot" (pabraukt ar vējdelī) (..).*
 途中で 止まる-能過 Ozolnieki-属 湖-位-指 ウェイクボードをちよつくらする 少し乗る に
 ウィンドボード

“ウェイクボードをちよつくらする” (ウィンドボードに少し乗る) ため、途中で Ozolnieki 湖 (指小形) に立ち寄った。

しかし本論文では、あくまで形式的 (同一の接頭辞)・意味的な結束性を接頭辞クリップの基準とするため、例文 3-17 で接頭辞クリップの関係にあるのは 3 つの動詞ではなく、2 つの *pa*-動詞と考え、例文 3-18 は接頭辞クリップの例とはみなさないこととする。

3.4.2. 接頭辞動詞間・基動詞間・基動詞と接頭辞間の語彙的関連性

同一の接頭辞が基動詞にもたらす共通の意味により、接頭辞クリップの関係にある接頭辞動詞間だけでなく、基動詞間にも一定の語彙的関連性が認められる。例文 3-19 から例文 3-24 で見るのは、基動詞 *dziedāt* 「歌う」と借用語の基動詞 *repot* 「ラップをする」の接頭辞動詞の接頭辞クリップの例である。基動詞の語彙的意味は“歌う”や発話に関わる点で共通し、付加される接頭辞も 2 つの基動詞に同様の意味修正を行う。共通の意味の接頭辞によりクリップされた基動詞には、同じように発話や音声を示す *kliegt* 「叫ぶ」や *blaut* 「どなる」、*vīterot* 「奏でる」がある。

接頭辞 *ap-* 「礼賛、批判」

例文 3-19 (VAVZ. 06.12.2003)

(..) *ieroču un vardarbības apdziedāšana (aprepošana).*
 武器-複属 そして 暴力-属 歌で礼賛 ラップで礼賛

武器と暴力を歌で礼賛 (ラップで礼賛)。

接頭辞 *ie-* 「記録、収録、録音」

例文 3-20 (D. 21.01.2003)

(..) *kāds garāmejot ienācis studijā un piepalīdzējis, kaut ko iedziedot, ieblaujot vai ierepojot (..).*
 誰か 通りすがりに 入って来る-能過 スタジオ-位 そして 助ける-能過 何か-対
 歌って吹き込む-副 どなって吹き込む-副 または ラップで吹き込む-副

誰かが通りすがりにスタジオに来て、何かを歌ったり、どなったり、ラップで吹き込んで、手伝ってくれた。

接頭辞 no- 「一回きりの動作」「通しの動作」

例文 3-21 (SD. 20.10.2008)

(..) katrs Siguldas kora dalībnieks var nodziedāt solo savā stilā.
 各 Sigulda-属 合唱団-属 参加者 できる-現3 NO-歌う ソロ-対 自分の スタイル-位
 Viens var norepot, otrs – novīterot lirisku mīlas balādi,
 一人 できる-現3 NO-ラップをする もう一人 NO-奏でる 抒情的な 愛-属 バラード-対
 trešais – nokliegt smago roku (..).
 3人目 NO-叫ぶ 重い ロック-対

Sigulda の合唱団員はそれぞれ自分のスタイルでソロを歌える。ある者はラップが歌え、ある者は抒情的な愛のバラードが奏でられ、ある者はハードロックを叫ぶことができる。

接頭辞 pie- 「伴」

例文 3-22 (KR. 30.05.2012)

(..) smaida meitene, kura varot citiem piedziedāt, piedejot un pierepot.
 微笑む-現3 少女 関代 できる-伝 他人-複与 伴唱する 伴って踊る そして 伴ってラップをする
 他の人のバックで歌い、踊り、ラップをすることができるという少女は微笑む。

接頭辞 sa- 「調和」

例文 3-23 (LA. 16.05.2008)

Vīņa balss (..) sadzied jeb "sarepo" ar hiphopa dīvu Misiju Eliotu.
 彼-属 声 歌として合う-現3 つまり ラップとして合う-現3 と ヒップホップ-属 女王 Missy-対
 Eliot-対

彼の声は歌うと、つまりラップをすると、ヒップホップの女王 Missy Eliot とマッチする。

接頭辞 sa- + 再帰要素 「相互動作」

例文 3-24 (D. 01.02.2002)

Jay-Z organiskā sadziedāšanās, sarepošanās jeb vienkārši
 有機的な 歌い合い ラップの掛け合い つまり 単に
 komunicēšanās ar (..) pavadītājsastāvu (..) ir pietiekami aizkustinoša.
 コミュニケーションを取ること と 伴奏グループ be-現3 十分に 感動的な

Jay-Z による伴奏グループとの有機的な歌い合い、ラップの掛け合い、つまりコミュニケーションは、十分感動的だ。

『新聞図書館』に見られるこれら 6 つの共起する接頭辞動詞以外にも、repot の他の接頭辞動詞は、基動詞 dziedāt 「歌う」の一連の接頭辞動詞と同じ意味修正を受けている。例えば izrepot 「ラップで表現する」、parepot 「少しラップをする」、uzrepot 「少しラップをする」、izrepoties 「思う存分ラップをする」は、izdziedāt 「歌で表現する」、padziedāt 「少し歌う」、uzdziedāt 「少し歌う」、izdziedāties 「思う存分歌う」といった dziedāt の接頭辞動詞と同じ意味修正を受けている。2 つの基動詞の意味には共通性があり、接頭辞が 2 つの基動詞に同様の意味修正を加え、そのような接頭辞動詞が同じテキスト中で使用される距離が近ければ近いほど、語同士の結束性は高まる。

例文 3-13 と例文 3-14 でみた接頭辞動詞の基動詞 (dziedāt 「歌う」、ēst 「食べる」、svinēt 「祝う」、rakstīt 「書く」) を個別に見ると語彙的関連性は見られない。しかし、文中で同じ統語的位置にあること、そして接頭辞 (と再帰要素) により同等に意味修正を受けるこれらの基動詞は“独立記念日に向けて行う一連の活動”という点で共通していると言える。

多義性を持つ接頭辞は基動詞の語彙的意味によって具体的な意味を発揮する。例えば接頭辞 ie-には、その空間的意味「中」から抽象化した様々な意味があるが、それぞれの意味が発揮されるのは特定の語彙的意味を持つ基動詞と結びつき、基動詞と接頭辞間にも語彙的関連性が認められる時である。以下に挙げる例文 3-35 までの例文では、接頭辞 ie-による接頭辞クリップが、ラトヴィア語本来の動詞と借用語の動詞を“共に束ねている”。

空間的意味の「中」から形式的意味へ変化したと考えられる接頭辞 ie-を持つ動詞には、「保存」「教授」の語彙的意味を持つ動詞がある。例文 3-25 では PFV の動詞がモーダル動詞 vēlēties 「望む」と結びつき具体的な動作を示している。同じ新聞記事中で用いられている 2 つの基動詞を例文 3-26 として参考までに示す。

接頭辞 ie- 「中」 → 形式的意味として基動詞を PFV 化

基動詞「保存」 balzamēt 「防腐処理する」 konservēt 「缶詰にする、保存する」

例文 3-25 (D. 05.04.2007)

Sievietes vēlas savas sagrautās cerības vismaz iebalzamēt, iekonservēt (..).

女性複 望む-現3 自分の 壊す-受過 希望-複対 少なくとも 防腐処理する 缶詰にする

女性というものは、叶わなかった自分の希望をせめて防腐処理し、缶詰にすることを望む。

例文 3-26 (D. 05.04.2007)

Vai vienīgais paņēmiens, kā pārspēt kapus un nāvi, ir balzamēt, konservēt

か 唯一の 方法 いかにか 克服する 墓-複対 そして 死-対 be-現3 防腐処理する 缶詰にする

skaidrākos aizvadītās dzīves mirkļus?

美しい-比 見送る-受過 人生-属 瞬間-複対

墓場や死を乗り越える唯一の方法は、過ぎ去った人生の美しい瞬間瞬間を防腐処理し、缶詰にすることだろうか？

接頭辞 ie- 「中」 → 形式的意味として基動詞を PFV 化

基動詞「教授」 mācīt 「教える」 dresēt 「調教する」

例文 3-27 (DB. 28.02.2003)

(..) mums ir nevis tik daudz iemācīts, iedresēts, kā jādara, bet

私達-与 be-現3 ではなく それほど 多くのこと 教える-受過 調教する-受過 いかにか する-義 しかし

viss vairāk balstās uz entuziasmu un labo gribu.

すべて より 根ざす-現3 へ 熱心さ そして よい 願望

私達には、何をすべきかたくさん教え込まれ、仕込まれているというよりも、熱心さとやる気がすべての元にある。

空間的意味「中」の接頭辞 ie-は、「投稿」「記録」「算入」といった語彙的意味の基動詞と

結びついている。

接頭辞 ie-「中」→「投稿」

基動詞「インターネット上の活動」 tvītot「ツイートする」 feisbukot「フェイスブックをする」

例文 3-28 (D. 10.03.2011)

Tagad ir jēga arī ietvītot vai iefeisbukot, pieliec arī kādu
 今 be-現3 意味 も ツイートする または フェイスブックをする つける-現3 も 何かの
 komentāru, (..) lai noteikti pamēģina ceptuves radziņus vai siera kūku.
 コメント-対 ために 是非 試す-現3 工房-属 クロワッサン-複対 または チーズ-属 ケーキ-対
 今はツイートをしたり、フェイスブックに書き込みをする意義がある。例えば工房のクロワッサンやチー
 ズケーキを絶対試すべき、みたいなコメントを書いてごらん。

接頭辞 ie-「中」→「記録」

基動詞「記録」 rakstīt「書く」 filmēt「フィルムに撮る」

例文 3-29 (NRA. 21.10.2010)

Un tagad plānoju to studijā ierakstīt un iefilmēt.
 そして今 計画する-現1単 それ-対 スタジオ-位 録音する そして 録画する
 そして今私はそれをスタジオで録音、録画しようと計画している。

接頭辞 ie-「中」→「記録」

基動詞「演奏」 spēlēt「弾く」 dziedāt「歌う」 kliegt「叫ぶ」 repot「ラップをする」

例文 3-30 (D. 31.05.2002)

(..) Lavolds (..) pats iespēlē vairumu ģitāru un taustiņinstrumentu,
 自分で 弾いて録音する-現3 沢山-対 ギター そして 打楽器
iedzied lēnos viltīgos gabalus, iekliedz vai ierepo skarbos.
 歌って録音する-現3 遅い 意地悪な 曲-複対 叫んで録音する-現3 または ラップで録音する-現3 激しい
 Lavold は自分でギターや打楽器を弾き、ゆっくりで意地悪な曲を歌い、ハードな曲を叫んだり、ラップを
して録音する。

接頭辞「中」→「算入」

基動詞「計算」 summēt「合計する」 skaitīt「数える」

例文 3-31 (JA. 11.01.2001)

(..) mūsu rīcībā ir korekti aprēķināti produkcijas vienības pašizmaksas un citi
 私達-属 利用-位 be-現3 正確に 計算する-受過 生産-属 単位-属 原価-属 そして他の
 kalkulācijas dati par Latviju un ES (pašizmaksā iesummējot mainīgās un
 算出-属 データ-複 ついて ラトヴィア そして EU 原価-位 合計する-副 変わる そして
 fiksētās izmaksas, ieskaitot paša darba novērtējumu).
 固定する-受過 支出-複対 含む-副 自身の 活動-属 評価-対
 我々の元には、正確に計算された、ラトヴィアと EU についての生産単位の原価とその他の算出データが
 ある（原価には変動費と固定費が合計され、自己活動評価もカウントされている）。

空間的意味の「中」が様々な程度で抽象化したその他の語彙的な意味では、以下の接頭

辞クリップを含む例文が挙げられる。

接頭辞 ie-「中」→「作用・説得」

基動詞「発話」 stāstīt「語る」 reklamēt「宣伝する」

例文 3-32 (VZ. 15.08.1998)

(..) viņi ir pārliecināti, ka tautai var iestāstīt un iereklamēt visu.
 彼ら be-現3 確信した 従 国民-与 できる-現3 説き伏せる そして 宣伝して刷り込む すべて-対

彼ら [政治家たち] はどんなことでも国民を説き伏せ、宣伝を刷り込めると確信している。

接頭辞 ie-「中」→「作用」

基動詞 suģestēt「暗示をかける」 projektēt「投影する」

例文 3-33 (MV. 05.06.1999)

Cilvēki (..) konstatē, (..) ka visas drūmas domas (..) viņā bijušas it kā ieprojektētas,
 人-複 確かめる-現3 従 すべての 暗い 考え-複 彼-位 be-能過 まるで 中に投影する-受過
 iesuģestētas no pasaules, (..) tās no apziņas ir nokļuvušas zemapziņā.
 暗示をかける-受過 から 世界 それら から 意識 be-現3 なる-能過 潜在意識-位

すべての暗い考えは、彼の中にあたかも投影され、暗示で刷り込まれていて、それらは意識から潜在意識になっていたことに、人々は気づいた。

接頭辞 ie-「中」→「導入」

基動詞「活動」 dziedāt「歌う」 dejot「踊る」 sportot「スポーツをする」

例文 3-34 (NRA. 21.01.2009)

Jubilejas gada sākums iezīmējies ar sengaidītu notikumu – jaunās sporta
 記念-属 年-属 始め 記念される-能過 で 待望の 出来事 新しい スポーツ-属
 zāles atvēršanu. (..) 16. janvārī sporta zāli gan iedziedāja, gan iedejoja,
 ホール-属 開館 1月-位 スポーツ-属 ホール-対 も 歌で開く-過3 も 踊りで開く-過3
 gan iesportoja.
 も スポーツで開く-過3

記念年の始まりは待ちに待った出来事、つまり新体育館の開館で始まった。1月16日歌と踊りとスポーツを前座にして新体育館のオープニングセレモニーが行われた。

接頭辞が再帰要素とセットで付加された動詞間の接頭辞クリップの例も挙げる。

接頭辞 ie-+再帰要素 「開始」

基動詞「(不満を示す) 発話」 kunkstēt「呻く」 protestēt「抗議する」

例文 3-35 (LA. 03.06.2006)

(..) nav dzirdams nedz vaids, nedz iekunkstēšanās un ieprotestēšanās
 否-be-現3 聞く-受現 否 唸り声 否 呻し始めること そして 抗議し始めること
 pret jeleko televīzijā rādīto.
 対して こと-対 テレビ-位 見せられるもの

テレビが放映することに対し、唸り声も、呻いたり、抗議をしようとする声も聞こえない。

接頭辞クリップは、複数の動詞にまたがる接頭辞の意味、そしてその意味に束ねられる動詞間（接頭辞動詞間・基動詞間）の一定の語彙的関連性を観察できる現象である。基動詞と接頭辞、また基動詞と接頭辞の語彙的関連性に焦点を当てることで、借用語の動詞にアスペクト対立をなす接頭辞動詞の特定や、接頭辞動詞間の意味比較（本論文 3.8.3.2.）をする際にも役立つ。接頭辞クリップは、テキストや発話などの具体的文脈において語と語の語形成関係が顕在化する現象の一つであり、本論文の第5章でも立ち返る問題である。

3.5. 借用語の動詞の PFV 化

借用語の動詞の PFV 化に関する先行研究は、スラヴ諸語においてはアスペクト論や語形成論の立場からなされてきた。それに対し、ラトヴィア語では言語文化論における批判以外はほぼ皆無であった。本節では、スラヴ諸語とラトヴィア語におけるこの問題の先行研究をまとめ、第2章で論じたアスペクト対立の考察をもとに、ラトヴィア語の言語文化論で批判される PFV 化の再解釈を行う。

3.5.1. スラヴ諸語における先行研究

スラヴ諸語における借用語の動詞への接頭辞付加は、PFV 化の接頭辞付加を中心に、アスペクト論と語形成論で記述されてきた。アスペクトが文法カテゴリーであるスラヴ諸語では、動詞が完了体・不完了体の対立を成し、動詞接頭辞はその対立の表現手段の一つである。借用語の動詞は、その言語の語彙・文法体系の中で新しく、形態的にはアスペクト対立を成していない。しかし、接頭辞（または接尾辞）の付加により形態的にアスペクト対立を表現することで、両体性を排除して文法体系に組み込まれていくのか、それとも形態的なアスペクト対立を示さずに両体性を残し、文法体系に組み込まれないままなのか为中心的な関心である。この関心はスラヴ諸語の先行研究の大半に共通している（ロシア語：Avilova 1968、Mučnik 1966, 1971, 137-156、L'Hermitte 1968, 80-82、Čertkova & Čang 1998、ポーランド語：Kudlińska 1988、ブルガリア語：Ivanova 1964、セルボ・クロアチア語：Lazic 1976、また対照研究ではロシア語とスロヴァキア語：Isačenko 1960, 146-148、ロシア語とチェコ語：Lebed' 1983、ロシア語とセルボ・クロアチア語：Magner 1963、ポーランド語とセルボ・クロアチア語：Mitrinović 1990 など）。

これらの先行研究のほとんどは、語形成論や意味論ではなくアスペクト論を切り口とし、接頭辞付加は語彙的な現象というよりも、形式的に動詞を PFV 化する文法的な現象として扱われる。どの接頭辞がどの基動詞に付加されると PFV 化されるかといった問題は語形成論の関心となり、アスペクト論ではあまり扱われない。Piernikarski はポーランド語のアスペクト論の中で借用語の動詞を PFV 化する接頭辞を、接頭辞の語彙的意味を考慮に入れて記述しているが（Piernikarski 1969）、概して、語形成論の立場からの接頭辞付加の先行研究

(セルボ・クロアチア語 : Lazic 1976, チェコ語 : Svobodová 2007 など) はアスペクト論の立場からのそれよりも少ない。

アスペクトが文法カテゴリーであるスラヴ諸語の中でも、PFV 化の接頭辞付加による借用語の動詞の両体性の排除の傾向は各言語によって異なる様相を見せる。PFV 化の接頭辞付加が最も生産的に行われるのはスロヴァキア語などの西スラヴ語、行われたいのはブルガリア語などの南スラヴ語、その中間にロシア語などの東スラヴ語があるとされる (Ivanova 1964, 246-247)。

この傾向と関連していると思われるが、南スラヴ語に属するセルボ・クロアチア語とブルガリア語において、PFV 化の接頭辞を余剰とする言語文化論的な評価がラトヴィア語と同様に見られる。セルボ・クロアチア語では、完了の意味を示す接頭辞が付加された借用語の動詞 *zamaskirati* 「マスクをする」、*zakamufilirati* 「カムフラージュする」、*skoncentrisati* 「集中させる」が、第二次世界大戦後政治的、文化的に大きな影響力を及ぼし始めたロシア語の影響で生まれた翻訳借用であるという指摘が言語文化論でなされ、「言語の純正さを気にするような作家でも使う」とされている (Stevanović 1951-1952, 303)。ブルガリア語における借用語の動詞の PFV 化でも「余剰」といった評価が見られ、PFV 化の傾向はロシア語の影響によるものとされている (Ivanova 1964)。

3.5.2. ラトヴィア語の言語文化論の批判

ラトヴィア語における借用語の動詞の PFV 化は、もっぱら言語文化論で記述されてきた。

最初に PFV 化の接頭辞の付加を「余剰な明確性 (*lieka precizitāte*)」と指摘したのは Augstkalne である。彼女は「最近ラトヴィア語では動作の PFV 性や短時間性を特に強調する傾向がみられる」としている (Augstkalne 1968, 71)。用例には借用語の no-動詞 *noformulēt* 「形式化する」、*nokonstatēt* 「確認する」とラトヴィア語本来の動詞に接頭辞 no-を付加した no-動詞 *nopamatot* 「根拠づける」を挙げ、これらの基動詞がすでに PFV のアスペクトを示す動詞であり、これらの動詞に付加される接頭辞 no-を余剰としている。彼女は用例を示しておらず、極めて簡単に現象を指摘するにとどまっている。

Riekstiņa は動詞接頭辞の誤用として、余剰な接頭辞が付加された動詞と、ある接頭辞動詞が本来期待される場面で使用される別の接頭辞動詞を批判している。また「接頭辞が新しい意味を動詞に与えない場合、接頭辞は余剰である」とし、*nospēlēt* 「プレイする」や *nomeliorēt* 「灌漑化する」といった no-動詞を批判している (*Riekstiņa* 1974, 23-24)。

Augstkalne と *Riekstiņa* よりも具体的にこの現象を指摘したのは *Ozola* である。アスペクト対立を持たないラトヴィア語本来の動詞や借用語の動詞で、PFV 性が認められる場合に接頭辞 no-を付加し、意味的・文体的差異⁴⁸を生じさせずに動詞に PFV 性を与えたとし、PFV

⁴⁸ 3.5.3.でも検討するが、テキストの校閲において接頭辞 no-が消されることがある。基動詞に対して no-動詞が標準的でないこと、また使用場面に制限があることから、実際には文体的差異はあると考えられる。

化の接頭辞 no-の付加を誤用としている (Ozola 1984, 126)。例文 3-36 では、no-動詞に対して基動詞の使用 (jāfinišē 「フィニッシュしなければならない (義務法)」) を推奨している。

例文 3-36 (Ozola 1984, 127)

(..) superrezultāts nav vajadzīgs, jānofinišē tikai mazliet ātrāk, nekā to
 すごい結果 否-be-現 必要な NO-終える-義 だけ 少し 速く-比 より それ-対
 spēj pretinieks.
 できる-現3 敵

すごい結果が必要なのではなく、敵よりも少しだけ速くフィニッシュをすればよいのだ。

Ozola は接頭辞付加による PFV 化の傾向の背景として、ロシア語の影響を挙げており、ロシア語で PFV 性の表現手段の一つである接頭辞をラトヴィア語でも使用する傾向を指摘している。そして接頭辞付加で動詞を PFV 化する代わりに、ロシア語にはない複合時制で動詞の PFV 性を示すことを推奨している⁴⁹ (Ozola 1984, 127-128)。

Kalna も同様に、定期行物や文学作品、話し言葉に見られる規範からの逸脱として no-動詞を批判し、ロシア語の接頭辞を翻訳借用した借用語の接頭辞動詞を別の接頭辞動詞で置き換えることを推奨している。例えばロシア語の接頭辞 ot-とラトヴィア語の接頭辞 at-はいくつかの意味で対応するが、ロシア語の完了体の接頭辞動詞 otremontirovat' 「修理する」(不完了体の基動詞 remontirovat') からの影響で派生したラトヴィア語の接頭辞動詞 atremontēt 「修理する」(IPFV の基動詞 remontēt) を批判し、別の接頭辞動詞 (saremontēt や izremontēt) を推奨している (Kalna 1988, 124-127)。

Freimane や、新聞記事やラジオなど公の場所で言語文化論を論じることが多い Kušķis も PFV 化をする接頭辞 no-の余剰性を主に批判している (Freimane 1993, 157, Kušķis 2006, 61-63, Kušķis 2009, 185-191)。批判理由の説明は、前述の Augstkalne の指摘と変わらない。

部分的に PFV 化の接頭辞を認めているのは Šmidebergs である。「接頭辞があるなら、それは何かを意味している」という原則に立つ彼は辞書論の研究者として、接頭辞動詞や動詞の PFV 性をいかに体系的に辞書記述に反映させるかを論考し、言語文化論で批判される PFV の接頭辞動詞の使用を部分的に認めている (Šmidebergs 2008, 110)。

彼の考察の最も重要な点は、それまでの言語文化論の批判の根拠となっていた基動詞のアスペクトに対する研究者の見解の違いを指摘したことである。例えば基動詞 citēt 「引用する」の no-動詞 nocitēt を巡って、基動詞に PFV 性を認める立場 (Ozola 1984, 27) と、人前で行う行為であることから継続的な動作であり IPFV 性を認める立場 (Freimane 1993, 157) があるとしている。それでも Šmidebergs はよく批判される大部分の接頭辞動詞に対し、「疑う余地なく余剰」という否定的評価を残している (Šmidebergs 2008, 105-106)。

⁴⁹ Ozola は複合時制によりアスペクトの対立を表示できるとしているが (Ozola 1984, 128)、no-動詞の代わりとなる複合時制の基動詞による推奨例は一つも出していない。2.7.で見たように、テンスの対立の中にもアスペクトの対立が保持されることもあることから、テンスとアスペクトは相互補完の関係にあるのか、「テンスの完了」であるパーフェクトと「アスペクトの完了」である PFV をまったく同じものとして扱ってよいのか、さらなる研究が必要である。

しかし Šmidebergs は PFV 化の傾向の背景として、ロシア語のアスペクト対立のモデルの存在、20 世紀後半の借用語の動詞の使用頻度の増加、どんな言語にも見られる体系化への欲求のほか、「速まる生活のテンポをコミュニケーションに反映させ、より短く、点状に切り分けた動作の流れを表現する欲求」(Šmidebergs 2008, 110) など、言語内の要因だけでなく、言語外の社会的な要因も PFV 化の傾向の背景として挙げている。「点状に切り分けた」という表現は、アスペクト論で一般に PFV が点的に動作を捉えたとされることを念頭に置いたものであろう。彼の指摘は、PFV・IPFV の意味対立の特徴といったアスペクト論に拠らずに“ロシア語の影響=避けるべきもの”が批判の一つの根拠として成り立ってしまう言語文化論にはなかった興味深い意見である。

ここで言語文化論の議論とその問題点を整理する。言語文化論では、すべての PFV 化された接頭辞が余剰と批判されるわけではない。しかし、アスペクトの意味対立の分析といった、アスペクト論に基づいた根本的な考察はなされていない。また接頭辞が意味的に余剰かどうかという批判には程度の差が見られる⁵⁰。本来 PFV 化の接頭辞付加には、程度の差こそあれ様々な接頭辞が形式的意味・空間的意味の接頭辞として基動詞に付加されアスペクト対立に関与する。しかし実際に批判をされるのは、もっぱら接頭辞 no-である。言語文化論の批判を受けていない PFV 化された動詞には、動詞 izanalizēt (基動詞 analizēt 「分析する」) などの、接頭辞と基動詞に語彙的関連性がある接頭辞動詞⁵¹や接頭辞が空間的な意味を持つ接頭辞動詞である。

空間的な意味修正を受けた接頭辞動詞には、iekopēt 「(中に) コピー (・アンド・ペースト) する」、izkopēt 「コピーして切り出す」、pārkopēt 「...から...にコピー (・アンド・ペースト) する」など複数の空間的意味の接頭辞が付加され、空間性にバリエーションがあるもの、また iekapsulēt 「カプセルに入れる」(接頭辞 ie- 「中」) や aizdambēt 「ダムで堰きとめる」(接頭辞 aiz- 「遮」) のように接頭辞が空間的意味を持ち、基動詞の示す動作の空間的意味と一致することから、形式的意味の接頭辞としても解釈できる接頭辞動詞がある。これらの動詞は言語文化論では批判の対象となっていない。

言語文化論で指摘される現象には必ず推奨例が挙げられることは 0.2.2. で述べたが、PFV 化された接頭辞動詞に対する推奨例は以下のようにまとめられる。

PFV の接頭辞動詞 (ほとんどが no-動詞)	→	無接頭辞動詞	大多数
		複合時制の無接頭辞動詞	具体例なし
		他の接頭辞動詞	少数

⁵⁰ Freimane は、nocitēt 「引用する」、nodemonstrēt 「見せる」、noformulēt 「(課題を) 公式化する」、nopicēt 「(論文を) 投稿する」など接頭辞 no- が持つ「人前で行う動作」の語彙的意味が基動詞の語彙的意味にも前提とされる場合においては条件的に許容できるとしている (Freimane 1993, 157)。

⁵¹ 接頭辞 iz- は izpētīt / pētīt 「研究する」、izsekot / sekot 「追跡する」のように、「知的活動」に関わる基動詞を PFV 化することが多い。

PFV 化の接頭辞付加が言語文化論において批判されるのは、ラトヴィア語だけに特有の現象ではない。20 世紀後半にロシア語の影響を共に受け、言語学における言語文化論の位置づけが類似しているリトアニア語でも、借用語を含めた動詞へ付加される接頭辞に“余剰な”、または“正しくない”接頭辞として批判される接頭辞がある⁵²。

3.5.3. “現れては消える”接頭辞 no- — テキストの校閲

マスメディアの言語は言語の変化や揺れを反映するとはいえ、規範意識は存在する。書かれた言葉においては、テキストの書き手自身、または第三者による校閲が行われるほか、話された言葉においては、主に話者である本人により言い直しがなされる。そして言語文化論で批判される PFV 化の接頭辞 no- は、テキストの校閲により削除されることがある。

インタビューにおいて、口頭で使用された no-動詞は電子媒体の記事にそのまま反映された(例文 3-37)。しかし紙媒体の記事(例文 3-38)では記者以外の第三者の校閲を受け、接頭辞 no-が削除されている⁵³。

例文 3-37 (VB. 31.03.2011 電子媒体)

Visvairāk mani nošokēja tas, ka zinātnieki pat teorētiski nevarēja
 最も-最 私-対 NO-ショックの状態にする-過3 それ 従 学者-複 さえ 理論的に 否-できる-過3
 paredzēt tik spēcīgu zemestrīci un tās izraisīto cunami vilni.
 予期する それほど 強い 地震-対 そして それ-属 引き起こす-受過 津波 波-対

私が最もショックだったのは、学者達が、あれだけ巨大な地震とそれが引き起こした津波を理論的にも想定できなかったことだった。

例文 3-38 (VB. 31.03.2011 紙媒体)

Visvairāk mani šokēja tas, ka zinātnieki pat teorētiski nevarēja
 最も-最 私-対 ショックの状態にする-過3 それ 従 学者-複 さえ 理論的に 否-できる-過3
 paredzēt tik spēcīgu zemestrīci un tās izraisīto cunami vilni.
 予期する それほど 強い 地震-対 そして それ-属 引き起こす-受過 津波 波-対

私が最もショックだったのは、学者達が、あれだけ巨大な地震とそれが引き起こした津波を理論的にも想定できなかったことだった。

⁵² リトアニア語国家委員会 (Valstybinė lietuvių kalbos komisija) のホームページ上では、批判される接頭辞動詞と推奨される動詞(基動詞、もしくは別の接頭辞動詞)が挙げられている (<http://www.vlkk.lt/lit/lt/klaidos/zodziu>, <http://www.vlkk.lt/lit/klaidos/zodyno4.html>)。

リトアニア語での接頭辞動詞の批判とその推奨例(別の接頭辞動詞や基動詞、分析的表現)は、ラトヴィア語と似ている。例えば、基動詞が借用語の接頭辞動詞には、別の接頭辞動詞か基動詞が推奨される。例えば atkoreguoti「修正する」、atremontuoti「修理する」、atrestauruoti「修復する」のような動詞には、(pa)koreguoti、suremontuoti、restauruotiなどが推奨される。動作が到達する意味、またその否定で不十分の達成度を示すロシア語の接頭辞 do-や nedo-の借用とされる接頭辞 da-、neda-が付加された動詞が誤用とされ、接頭辞動詞 dadirbti「働きる」(基動詞 dirbti「働く」)は baigti dirbti「働き終える」、dar padirbti「あと少し働く」、išdirbti「働きる」により置き換えられている。

⁵³ インタビューは本論文筆者がラトヴィアで2011年3月26日に受けたものである。本論文筆者は2011年4月4日にインタビュー者だった新聞記者に、接頭辞 no-が校閲で消された経緯をEメールで問い合わせた。

例文 3-39 のように、発話の中で話者自身が no-動詞を言いかけ、基動詞で言い直す例も見られる。話者は PFV の意味を示すために no-動詞 *noaktualizēties* 「顕在化する」の何らかの語形を使おうとしたと考えられるが、言いきらずに基動詞の語形 *aktualizējušās* (能動過去分詞) と言い直している。no-動詞の語形が単純時制の過去形であったのか、または言い直し後の基動詞の語形から推測するに能動過去分詞 (複合時制の現在形) であったのかは定かではない。しかし最終的に基動詞が用いられたのは、規範意識が働いたためと考えられる。

例文 3-39 (LR. 03.05.2010)

(..) *iespējams, ka viņas šobrīd sa- noaktuali- aktualizējušās, jā?*
 可能性がある 従 それ-複 現在 顕在化する-能過 はい

おそらくそれら [夢を見ることの価値] は現在 #、顕 #、顕在化してきていますよね。

ある新聞記事では、一人の記者が複数の映画館で上映される様々な映画の紹介をしている。この記事では同一の映画の紹介が二度行われている。ある映画館で上映される映画のあらすじ (6 文計 118 語からなるテキスト) では、基動詞 *hipnotizēt* 「催眠術にかける」の no-動詞が用いられている (例文 3-40)。別の映画館で上映される同じ映画のあらすじ (2 文計 36 語からなるテキスト) では基動詞が用いられている (例文 3-41)。2 つの例文は「催眠術にかける」という動詞を除いて全く同一である。

例文 3-40 (D. 01.03.2001 スペル訂正)

Pārsteigts par Hela aprobežotību, viņš to nohipnotizē un iedvēš
 驚かせる-受過 ついて Hela-属 偏狭さ 彼 それ-対 NO-催眠術にかける-現 3 そして 植え込む-現 3
viņam spēju saskatīt iekšējo skaistumu pat fiziski visnepievilcīgākajā sievietē.
 彼-与 能力-対 見出す 内部の 美-対 さえ 物理的に 否-魅力的な-最 女性-位

ハルの偏狭さに驚いた彼 [超能力者] は、ハルを催眠術にかけ、外見があまり魅力的でない女性の中にも、内面の美を見抜く能力を植え込んだ。

例文 3-41 (D. 01.03.2001 スペル訂正)

Pārsteigts par Hela aprobežotību, viņš to hipnotizē un iedvēš
 驚かせる-受過 ついて Hela-属 偏狭さ 彼 それ-対 催眠術にかける-現 3 そして 植え込む-現 3
viņam spēju saskatīt iekšējo skaistumu pat fiziski visnepievilcīgākajā sievietē.
 彼-与 能力-対 見出す 内部の 美-対 さえ 物理的に 否-魅力的な-最 女性-位

ハルの偏狭さに驚いた彼 [超能力者] は、ハルを催眠術にかけ、外見があまり魅力的でない女性の中にも、内面の美を見抜く能力を植え込んだ。

映画のあらすじや脚本のト書きは、発話時点には関係しない単純時制現在で示され、出来事は映画の展開に沿って順次的に描写される。ここでは接頭辞の有無、つまり動詞が PFV か IPFV かはテキストの意味に大きく影響せず、基動詞を使っても、形態的に明らかな PFV の no-動詞を使っても、映画のあらすじを歪めるほどの差異にはならない。テキストの統一感の点では、2 回の映画紹介ともどちらかの動詞を用いて統一するべきかもしれない。しか

し接頭辞の有無による差異は、映画のあらすじという順次性のタクシスを示すテキストレベルの aspekto の表現により中和され、ここでの PFV 化の接頭辞 no-は“あってもなくてもよい”接頭辞にすら思える。

一方で次の例はどうだろうか。同一人物の発言を取り上げた複数の新聞では、ある新聞で no-動詞が用いられ (例文 3-42)、他の新聞で基動詞が用いられている (例文 3-43)。これは、他の公務を優先したために出席するべき党大会に参加をせず、欠席の電報を送り忘れていたことで批判を浴びた際の大統領の発言である。自身の性格ゆえに、欠席の旨を電報で送ったことを確認しなかったことを弁明している。

例文 3-42 (BNS. 02.03.1998, LK. 03.03.1998, NRA. 03.03.1998)

«Atgriezies atpakaļ konstatēju, ka es esmu liels palaidnieks bijis un es
 戻る-能過 元 確認する-過1単 従 私 be-現1単 大きな 不届き者 be-能過 そして 私
 neesmu šo nokontrolējis un nogarantējis telegrammas aizsūtīšanu»
 否-be-現1単 これ-対 NO-コントロールする-能過 そして NO-保証する-能過 電報-属 送信-対
 teica G. Ulmanis un piebilda, ka (...).
 言う-過3 そして 付け加える-過3 従

「戻ってきてから、私は大変な不届き者であり、これをコントロールせず、電報の送信を確実に行わなかったことを確認した」と G・ウルマニスと言って、(...) と付け加えた。

例文 3-43 (VZ.03.03.1998)

«Atgriezies konstatēju, ka es esmu liels palaidnieks bijis un es
 戻る-能過 確認する-過1単 従 私 be-現1単 大きな 不届き者 be-能過 そして 私
 neesmu šo kontrolējis un garantējis telegrammas aizsūtīšanu»
 否-be-現1単 これ-対 コントロールする-能過 そして 保証する-能過 電報-属 送信-対
 teica Ulmanis un piebilda, ka (...).
 言う-過3 そして 付け加える-過3 従

「戻ってきてから、私は大変な不届き者であり、これをコントロールせず、電報の送信を確実に行わなかったことを確認した」とウルマニスは言って、(...) と付け加えた。

no-動詞の *nokontrolēt* 「コントロールする」と *nogarantēt* 「保証する」を含む例文 3-42 の記事は通信社 BNS が発信したものであり、翌日その他 2 社が記事を転用している。一方、基動詞が使われている例文 3-43 の記事も BNS からの記事を翌日に転用しているが、ここでは接頭辞 no-がない。オリジナルの発言で使われたのが no-動詞か基動詞かを確かめることはできない。なぜ接頭辞 no-が消えたのか。それを知っているのは BNS の記事を転用した例文 3-43 の記事の担当者のみである。

読者は普通、校閲の過程を知らないため、校閲後のテキストをありのままに受け止めるものである。よって PFV の動詞の文を見て「もし動詞が IPFV だったら」と仮定しない限り、また逆に、IPFV の動詞の文を見て「もし動詞が PFV だったら」と仮定しない限り、アスペクト対立によるこの意味上の差異が顕在化する可能性は低い。逆に言えば、この 2 つの文の差異は、並べて比較をして初めて顕在化する可能性がある。

アスペクトの対立については、どちらの動詞も能動現在分詞であり、文中で用いられて

いる be 動詞 (esmu とその否定 neesmu) と共に複合時制を示している。複合時制は参照時点 (現在形の場合は大統領の発話時点と一致) の前に行われた動作の結果が参照時点でアクチュアルであることを示す。

さらにここでは否定の要素が絡んでくる。PFV 動詞の否定が、動作自体は行ったが結果を伴わなかったという“動作の部分否定”になるのに対し、IPFV の動詞の否定は、結果はおろか動作自体が行われなかったという“動作の全否定”になる。つまり、PFV の no-動詞の例文 3-42 では、自身の性格のコントロールや確認が十分に行われなかった、つまりコントロールや確認をしようとしたができなかったという解釈ができるのに対して、接頭辞 no-がない例文 3-43 では、電報の送信を確実にするための動作を行わなかったと解釈される。また PFV の例文 3-42 は“今回に限って”、IPFV の例文 3-43 は“これまでそもそも”動作を行ってこなかった、というように「具体・一般」の対立の観点からの解釈もできよう。

本論文筆者は、ラトヴィア語のインフォーマント 15 名⁵⁴に 2 つの文を見せ、例文 3-43 で接頭辞 no-が削除されていること、言語文化論で余剰な PFV 性が批判されていることを指摘した上で、自由にコメントをしていただいた。

接頭辞の必要性を支持する肯定的な評価をしたのはわずか 2 名であった。no-動詞では話者が動作を試みたができなかったこと、基動詞ではその試みがなかったと 2 名とも解釈したことから、no-動詞にモーダル的な意味があることがわかる。

接頭辞の有無に中立的な評価をしたのは 4 名で、それぞれ no-動詞に“できる”というモーダル的な意味 (2 名) と、具体・一般の対立 (2 名) を指摘した。

基動詞にすでに PFV の意味があることから接頭辞が余剰であり、接頭辞がなくても文の意味は変わらないという否定的な評価をしたのは 9 名であった。一方で、そのうちの 1 名は、基動詞の場合いつも電報の送信の指示や確認を行っているとして解釈できるとし、「具体・一般」の対立を挙げた。また 3 名は口語であれば許容されたとした。そのうちの 1 名は、接頭辞 no-が動詞を目立たせるという文体的な機能を指摘した。

インフォーマントの意見からは、接頭辞の有無による文の差異の解釈や、接頭辞 no-の必要性がすべての言語話者に共有されているわけではないことがわかる。しかし接頭辞の有無による差異が顕在化したことで、アスペクト論の立場から言語文化論の批判に一石を投じることができる可能性が高くなった。

3.5.4. アスペクト論の観点から — 基動詞の相対的 PFV 化

言葉の乱れや規範からの逸脱として言語文化論で批判されてきた PFV 化は、本来アスペクト論の観点からも論じられるべきであった。しかしラトヴィア語のアスペクト研究自体が盛んでなかったため、これまでに以下の 2 名の研究者が簡単に触れているだけである。

⁵⁴ 2012 年 3 月から 7 月にかけて、インターネット上でインフォーマントに意見を伺った。世代と性別の内訳は、20 代男性 3 名、20 代女性 5 名、30 代女性 2 名、40 代男性 1 名、40 代女性 2 名、50 代女性 2 名。

ドイツに亡命して研究活動を行っていた Hauzenberga-Šturma は、ラトヴィア語のアスペクトの概略において、言語文化論で批判される借用語の動詞の PFV 化に簡単に触れている。彼女は、借用語の基動詞がアスペクト的に中立であること、また no-動詞の許容度が若者ほど大きくなるという世代間の差異があることを指摘した (Hauzenberga-Šturma 1979, 291)。

Kalnača は文脈におけるアスペクト対立を論じる際に借用語の動詞の PFV 化に触れ、アスペクトに中立な動詞にとって「文脈によって示されるアスペクト対立は十分とされず」、PFV 性や短期性を強調するために PFV 化が行われると簡潔に述べている (Kalnača 1998, 250-251)。

接頭辞付加が基動詞の PFV 性を「強調」するという言語文化論の論拠は、基動詞の語彙的意味にすでに PFV 性が認められることを意味している。形態的にも接頭辞が付加されていることから、接頭辞動詞が PFV の動詞であることは明らかである。ここで問題となるのは、基動詞のアスペクトが、IPFV・PFV のうちどちらか、どちらでもあるのか、もしくはどちらでもない、つまり無アスペクトなのかということである。

言語使用の実態としては、形態的に明らかな PFV の動詞として接頭辞動詞が用いられている。一方で、基動詞のアスペクトの帰属を巡っては不明確な点が多い。これはロシア語における借用語の接頭辞付加と PFV 化の解釈でもしばしば指摘される (Magner 1963, 624, Timberlake 2004, 408)。

接頭辞動詞 PFV ⇔ 基動詞 PFV? IPFV? 無アスペクト?

基動詞の語彙的意味に PFV 性を認めるためには、PFV・IPFV の対立の一つである「非進行・進行」の対立に基づき、基動詞が進行を表現できないことが条件となる。逆に基動詞の PFV 化を根拠づけるには、基動詞に IPFV 性を認めなければいけない。

言語文化論の批判する借用語の動詞の PFV 化の解釈では、基動詞のアスペクト帰属が PFV であることを前提としている。しかし第 2 章で見たように「非進行・進行」の対立が中和されやすいこと、「具体・一般」の対立自体が話者や文脈に拠る部分が多く、どの対立も中和されることが多いことから、意味的なアスペクト対立は相対的なものである。

基動詞が IPFV の特徴である進行中の動作を示すことができれば、基動詞は IPFV の動詞となり、接頭辞動詞は対応する PFV の動詞となる。しかし 2.6.3. で見たように、アスペクトペアを形成するラトヴィア語本来の動詞においても *apsēsties / sēsties* 「座り込む」、*piecelties / celties* 「立ち上がる」、*iedot / dot* 「与える」、*paņemt / ņemt* 「取る」、*paveikt / veikt* 「行う」、*pateikt / teikt* 「言う」⁵⁵のように、そもそもの語彙的意味が進行に捉えにくい動詞がある。このような動詞が示す動作は習慣的な動作であったり、話者が動作の展開の中に自分を置いたり、動作をスローモーションで引き延ばすような、話者の視点を考慮に入れない限り、進行中の動作と捉えることができない。また“捉える”こと自体、話者の認知的行為である。

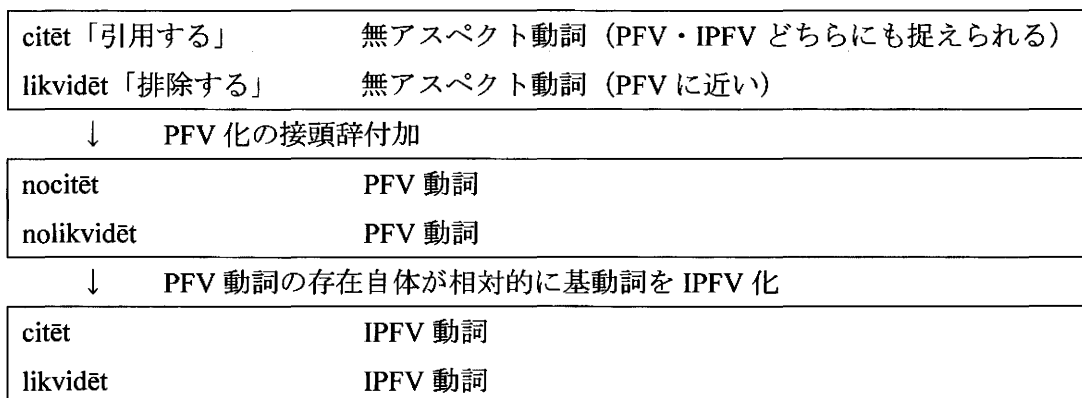
⁵⁵ 進行中の動作や習慣的な動作の「言う」には、別の動詞 *sacīt* 「言う」を用いる。

また PFV・IPFV のどちらに属さなくても（つまり、どちらも表現できることからどちらに属していても）、その語彙的意味が PFV により近い、もしくは IPFV により近いとされる動詞もある。しかし文脈を考慮に入れたとき、語彙的意味が PFV に近い動詞でも動詞がプロセス化されうることが、第 2 章の例文 2-56 の動詞 *aiziet* 「引退する」で見た。

よって、アスペクト対立が本来相対的な概念であることを考慮し、PFV 化の動詞接頭辞付加をすでに進行中の現象として捉えれば、基動詞の対立アスペクトの帰属はさほど重要ではないと考えられ、以下の解釈で借用語の動詞の PFV 化を説明できるだろう。

借用語の動詞はその語彙的意味により、相対的に PFV、IPFV のどちらかに近いか、もしくはどちらにも解釈できる動詞がある。しかし文脈の考慮・不考慮に関わらず、語彙的意味に PFV 性が認められること自体は、その動詞を相対的に PFV 化する障害にはならない。そして接頭辞付加で明確に PFV 化をすること自体が、“事実上”、そして“事後的に”無接頭辞の基動詞を IPFV 化する。つまり、基動詞への接頭辞付加で派生した PFV の接頭辞動詞は、その存在自体により基動詞を相対的に IPFV 化する。以下に基動詞 *citēt* 「引用する」と *likvidēt* 「排除する」、その no-動詞を例に示す。

図 3-1：借用語の基動詞の相対的 PFV 化と相対的 IPFV 化



この解釈をもとに 3.7. では、第 2 章で見たような PFV・IPFV の意味対立や対立の特徴を実際の言語使用において確認する。次節の 3.6. では、接頭辞 no- の意味を整理する。

3.6. 接頭辞 no-

本節では、言語文化論で批判されることが多い接頭辞 no- の空間的意味、時間的意味、その他の語彙的意味を概略する。概略には先行研究における接頭辞 no- の意味記述（『標準語文法』1959, 355-357, 『標準語辞典』, Soida 2009）と、形式的意味の接頭辞 no- の記述（Staltmane 1958d, 69-75）を主に参照した。

3.6.1. 接頭辞 no-の空間的意味

空間的意味には「下」と「離」がある（『標準語文法』1959、Staltmane 1958、Soida 2009, 239-240）。「下」には *noenkurot* 「錨を下ろす」や *nonivelēt* 「レベルを下げる」、*「離」*には *nooperēt* 「手術で摘出する」や *nogrupēt* 「グループから引き離す」などがある。

例文 3-44 では、空間的意味の「離」を持つ接頭辞 no-の接頭辞クリップが観察される。*noņemt* 「取り除く」（基動詞 *ņemt* 「取る」）と *noslīpēt* 「擦って取る」（基動詞 *slīpēt* 「擦る」）と同様に、借用語の動詞 *nociklēt* 「鉋で削り取る」（基動詞 *ciklēt* 「（鉋で）削る」）の接頭辞 no-は、空間的意味の「離」を意味している。

例文 3-44 (PL. 29.09.2008)

Dažreiz gribas bufetes veco lakojumu noņemt. (..) Veco laku var
 時々 したい気分である-現3 棚-属 古い ニスの層-対 取り除く 古い ニス-対 できる-現3
arī noslīpēt ar smilšpapīru vai nociklēt.
 も 擦って取る で サンドペーパー または 鉋で削り取る
 棚の古いニスを取り除きたい時がある。古いニスはサンドペーパーで擦って取るか、鉋で削り取ってもよい。

3.6.2. アスペクト的意味

アスペクト的意味には、PFV の対立アスペクトと、一定時間、または長い時間続く動作を示す持続アスペクト (perdurative) がある。

再帰要素と結びついて、動作の高い集中性を示すアスペクト（基動詞 *projektēt* 「計画する」から派生した *noprojektēties* 「（悪い結果を招くほど）計画を練りすぎる」）もあるが、対立アスペクトとは関係がないため、ここでは取り扱わない。

3.6.2.1. PFV の対立アスペクト

PFV の意味は、動作の完全性、徹底性、短期性、突然性といった意味を含み（『標準語辞典』）、多くの no-動詞がこのアスペクト的意味を持っている。この意味を持つ接頭辞が形式的意味の接頭辞として機能する。

『新聞図書館』で収集された no-動詞は、表 3-5 で見るように、自動詞・他動詞共に幅広い語彙的意味の動詞に付加されている。動作と客体の関係や思考などの語彙的意味に大別した。

表 3-5 : no-動詞の語彙的意味の分類

客体の形成や獲得		
<i>noorganizēt</i> 「組織する」	<i>nomenedžēt</i> 「マネジメントする」	<i>noformēt</i> 「形成する」
<i>nokomplektēt</i> 「組み立てる」	<i>noproducēt</i> 「生産する」	など

客体の状態の変化
nokonkretizēt「具体化する」 noprivatizēt「私有化する」 notonēt「トーンを与える」 nošokēt「ショックを与える」 nopozicionēt「位置づける」 など
思考・感情
nosimulēt「シミュレーションする」 norespektēt「尊敬する」 nointerpretēt「解釈する」 noanalizēt「分析する」 など
発話・視覚
nokomandēt「命令する」 nošantažēt「脅す」 nokomentēt「解説をする」 nofigurēt「姿を見せる」 など
主体の状態
nodominēt「優勢である」 norezonēt「共鳴する」 novibrēt「震える」 など
活動
nostudēt「勉強する」 nofilmēt「(映像として)撮影する」 noplanēt「滑空する」 nodežurēt「勤務する」 nodreifēt「漂う」 nosportot「スポーツをする」 nošpikot「カンニングをする」 nomuzicēt「音楽をする」 など

自動詞、他動詞でも目的語を取らない場合、no-動詞は具体的な動作や、ひとまとまりの動作を示す。

例文 3-45 (JA. 13.02.2004)

Lai atkarotu sievietes simpātijas, viņš pat noriskē un nodzied
ために 取り戻す-願 女性-属 好感-複対 彼 さえ NO-リスクを冒す-現3 そして NO-歌う-現3
viņai pie loga serenādi.
彼女-与 元で 窓 セレナーデ-対

〔映画のあらすじ〕女性の気を取り戻すため、彼はリスクも冒し、窓辺で彼女にセレナーデを歌う。

典型的な「来た、…した、去った」の順次性のタクシスの構文を持つ例文 3-46 では、ひとまとまりの動作として、no-動詞 nošpikot「カンニングする」が用いられている。

例文 3-46 (LA. 22.12.2004)

Mūsu studenti labprātāk atnāk, nošpiko un ātri aiziet.
私達-属 学生-複 喜んで-比 来る-現3 NO-カンニングをする-現3 そして 速く 去る-現3
我々の学生は喜んでやってきて、カンニングをして、すぐに去ってしまう。

主体の状態を示す動詞では基動詞が状態を示しているのに対して、no-動詞はその状態への移行を示す。例文 3-47 では基動詞 dominēt が「優勢である」という状態を示すのに対して、no-動詞は「優勢になる(優勢でない状態から優勢な状態への移行)」がより明確になる。例文 3-48 と例文 3-49 の基動詞 rezonēt「共鳴する」とその no-動詞も同様の説明ができる。

例文 3-47 (N. 08.08.2006)

Parasti uz katrām vēlēšanām politiskie lozungi top no jauna (..), bet,
 普通 へ 毎 選挙 政治的な スローガン-複 形成される-現3 新たに しかし
 kad neveicas, tad saka : " Nodominēja protesta balsojums ".
 時 否-成功する-現3 すると 言う-現3 NO-優勢である-過3 反対-属 投票

毎回の選挙にむけて、政治的スローガンは“需要”に応じて新たに作られるものだ。しかしうまくいかないと、“反対票が優勢になった”と人々は言う。

例文 3-48 (MV. 07.12.2007)

(..) daudz kas no aprakstītā rezonēja ar manām izjūtām.
 たくさん こと から 描写されたもの 共鳴する-過3 と 私の 感覚-複

描写されている多くのことが私の感覚と共鳴していた。

例文 3-49 (MV. 07.12.2007)

Manī šī ziņa norezonēja.
 私-位 この 知らせ NO-共鳴する-過3

この知らせは私の中で共鳴した。

「主体の状態変化」と同様に、視覚に関わる動作を示す基動詞では no-動詞が「見えない状態」から「見える状態」への移行を含意する。例文 3-50 の話題はホッケーチームのメンバー交代である。メンバーから抜けた選手、入った選手と列挙される中で、途中から入った選手が figurēt「姿を見せている、いる」の no-動詞で列挙されている。

例文 3-50 (SA. 08.03.2005)

Jau nosauci : mīnus Jansons un Zonbergs, plus Janišus un Hlebovickis,
 すでに 挙げる-過2 単 マイナス そして プラス そして
 pa vidam vēl nofigurēja arī Ļaksa. Tas neizsita no ritma?
 に 中央 まだ NO-姿を見せる-過3 も それ 否-押し出す-過3 から リズム

[ホッケーチームのメンバー交代について] 君が言ったことだけど、Jansons と Zonbergs が抜けて、Janišus と Hlebovickis が入って、さらに途中で Ļaksa も 出てきた。それでリズムは崩れなかった？

no-動詞が発話動詞の場合は一回の発話行為を示す。

例文 3-51 (NRA. 27.08.2004)

Tija (..) nošantažēja : jūs man ļoti patīkat, un, ja dziedāsi
 NO-脅す-過3 あなた 私-与 とても 気に入らせる-現2 複 そして もし 歌う-未2 複
 latviski, es jūs noteikti paņēmu!
 ラトヴィア語で 私 あなた-対 必ず 採用する-未1 単

Tija はこう脅した—「あなたのことがとても気に入っているの。もしラトヴィア語で歌えば、絶対にあなたを採用するわ！」

例文 3-52 (RB. 03.10.2003)

«Tā, visi veči – ātri mammu uz rokām!» nokomandē Zigis.
 助 皆 奴-複 速く ママ-対 上に 手-複 NO-命令する-現3
 「ほら、お前らみんな、母さんを早く運べ！」と Zigis は命令をする。

上で挙げた PFV の動詞としての no-動詞の中には、基動詞の語彙的意味と一致する接頭辞の語彙的意味を挙げることができる動詞がある (表 3-6)。

表 3-6 : 接頭辞 no-と基動詞の語彙的意味が一致する no-動詞

「人前」
nocītēt 「引用する」 nodemonstrēt 「見せる」 nodeklamēt 「暗誦する」 noprezentēt 「提示する」 noekšponēt 「展示する」 など
「消」「隠」
noretušēt 「(消して) 修正する」 nomaskēt 「隠す」
「損害」
nobombardēt 「爆撃する」 notorpedēt 「魚雷で打つ」 nokritizēt 「批判する」 noskalpēt 「批判する」

「人前」(Freimane 1993, 157, Šmidebergs 2008, 105) という接頭辞 no-の語彙的意味は、lasīt lekciju 「講義をする (読む)」の基動詞 lasīt 「読む」に対し nolasīt lekciju という対応の PFV の動詞を派生させる。

nozust 「(...から) 消える」、noslēpt 「(...から) 隠す」といった接頭辞 no-の空間的意味「離」が残るラトヴィア語の no-動詞のように、基動詞の語彙的意味が「消」や「隠」を前提とする場合もある (Staltmane 1958d, 69)。

また接頭辞 no-には「損害」の意味もある (Staltmane 1958d, 69)。

接頭辞と基動詞の語彙的意味が一致する場合も (表 3-6)、しない場合 (表 3-5) も、接頭辞 no-は広い語彙的意味の基動詞に付加され、多くの場合基動詞を PFV 化している。

3.6.2.2. 持続アスペクト

自動詞には、動作が及ぶ時間的・空間的広がりや対格補語で示す持続アスペクト (perdurative) の動詞がある。基動詞は継続する動作や状態を示し、持続アスペクトはその動作や状態が一定の時間や空間、または長い時間や広い空間に及ぶことを示す。

例文 3-53 (LA. 05.03.2004)

(..) stacija ar jūras straumēm desmit mēnešos bija nodreifejusi 2750 kilometrus.
 ステーションで 海-属 流れ-複 10 月-複位 be-過3 NO-漂流する-受過 キロメートル-複対
 漂流ステーションは海流の力により、10ヶ月で2750キロも漂流した。

例文 3-54 (D. 01.02.2007)

Pateicoties (..) daiļslidošanas čempionāta tiešraidēm, turpat nedēļu noveģētēju
 おかげで フィギュアスケート-属 選手権-属 生放送-複 ほぼ 週-対 NO-無為に過ごす-過 1 単
 pie televizora, ne acu nepamirkšķinādama.
 元で テレビ 否 目-複属 否-瞬きをする-半

フィギュアスケートの選手権の生放送のおかげで、瞬きひとつせず、私はテレビの前ではほぼ 1週間も無駄な時間を過ごした。

例文 3-55 では、持続アスペクトを示す no-動詞 noeksistēt「(一定期間)存在する」と nostrādāt「(一定期間)働く」の接頭辞クリップが観察できる。

例文 3-55 (SA. 21.06.2005)

Pats jau atzini, ka LBS Valdē savu laiku noeksistēji, nevis nostrādāji.
 自身 助 認める-過 2 単 従 理事-位 自分の 時間-対 NO-存在する-過 2 単 ではなく NO-働く-過 2 単
 ただ然るべき期間 LBS [ラトヴィアバスケットボール協会] の理事で働いていたのではなく、居ただけと
 いうことを君は自分で認めているんだろう。

3.7. 借用語の動詞における PFV・IPFV の意味的対立

3.5.4.で行った借用語の動詞の PFV 化の解釈を元に、本節では借用語の動詞の PFV・IPFV の意味対立を行う。本節では、2.5.で論じたアスペクト対立に基づき、「非進行・進行」や「具体・一般」の対立、時間補語やタクシスといった統語的問題、またモーダルの意味の問題を扱う。

言語文化論では、批判される PFV の接頭辞動詞を基動詞に置き換えることが一般的であり、アスペクト対立の相対性は無視されてきた。本節では、問題となっている接頭辞動詞と基動詞が似た文脈、または同じ記事中で共に用いられている用例を中心に扱う。これらの例文における no-動詞の使用は、同じ文脈や似た文脈に存在する基動詞と比較をすることができる。

「非進行・進行」

この対立が顕在化するの、「IPFV の動詞の反復+結果を表す接続詞と PFV の動詞」という典型的な構文である。例文 3-56 と例文 3-57 では基動詞が反復され、接続詞 kamēr「する間」の節で no-動詞が用いられている。

例文 3-56 (LA. 27.12.2003)

(..) šoferītis ieiet noformēt dokumentus (..) Formē, formē, kamēr noformē.
 運転手-指 入る-現 3 NO-記入する 書類-複対 記入する-現 3 記入する-現 3 する間 NO-記入する-現 3
 運転手さんは書類の記入のために中へ入る。書類を記入し終わるまでずっと記入している。

例文 3-57 (D. 19.06.2010)

(..) aizbildinoties ar naudas trūkumu, šo muzeju likvidēs, to teātri aizslēgs,
 弁解する-副 で 金-属 不足 この 美術館-対 閉鎖する-未3 その 劇場-対 閉館する-未3
 vēl kaut ko likvidēs. Kamēr būs viss nolikvidēts.
 また 何か-対 閉鎖する-未3 する間 be-未3 すべて NO-閉鎖する-受過
 金不足を口実にして、この美術館も閉鎖、あの劇場も閉館、他の何かもまた閉鎖されるだろう。何もかも閉鎖されるまでね。

例文 3-57 の基動詞 likvidēt 「閉鎖する、整理する」や接頭辞動詞 aizslēgt 「閉じる」(対応の IPFV の分析的表現は slēgt ciet) だけを見ると、動詞が示す個々の施設の閉鎖の動作は進行中の動作を示していない。しかし基動詞の反復により個々の施設の閉鎖が全体として IPFV 化されると同時に、接続詞 kamēr 「する間」と no-動詞が用いられることで、基動詞が示す動作全体はプロセスとなる。

PFV の動詞と共に用いられる IPFV の動詞の反復は最も明確に「非進行・進行」を示すが、以下の例文 3-58 と例文 3-59 のように、IPFV の動詞が反復されなくても、PFV の動詞と IPFV の動詞が近い文脈で用いられていると、「非進行・進行」の意味対立が明確に表れる。

例文 3-58 (OZ. 14.05.2008)

Situācija veidojas tāda, ka pakāpeniski likvidē piena ražotājus un
 状況 形成される-現3 そのような 従 段階的に 整理する-現3 牛乳-属 生産者-複対 そして
nolikvidēs lopkopību kā tādu.
 NO-整理する-未3 家畜業-対 そのもの-対
 牛乳の生産者達は整理されつつあり、家畜業そのものが整理されてしまう状況になってきている。

例文 3-59 (DZ. 13.12.2008)

Laukos viss tika nolikvidēts. Tagad arī pēdējie gateri likvidējas.
 地方-複位 すべて 受-過3 NO-整理する-受過 今 も 最後の 木材加工機-複 整理される-現3
 地方ではすべてが整理されてしまった。今は最後の木材加工業者も整理されている状態だ。

IPFV の動詞に対して、PFV の動詞は動作が完全に行われることを示す。

デモ参加者が凱旋門をリボンで覆うというニュースでは、例文 3-60 と例文 3-61 で基動詞 drapēt 「覆う」がその事実を伝えている。例文 3-62 では警察の介入により、完全に凱旋門を覆うことができなかったことが no-動詞の否定形で示されている。

例文 3-60 (BNS. 06.09.1996)

Fermeri drapē Triumfa arku melnu.
 農家-複 覆う-現3 勝利-属 門-対 黒く
 [記事タイトル] 農民ら、凱旋門を黒く覆う⁵⁶。

⁵⁶ ラトヴィア語の新聞記事のタイトルでは、過去に起こった出来事でも現在時制で示すことが多い。

例文 3-61 (BNS. 06.09.1996)

Francijā fermeri piektdien drapēja Triuma arku ar melnām plastikāta lentēm (..).
 フランス-位 農家-複 金曜日に 覆う-過3 勝利-属 門-対 で 黒い プラスチック-属 リボン-複
 フランスでは農民達が金曜日に凱旋門を黒いラベルリボンで覆った。

例文 3-62 (BNS. 06.09.1996)

(..) bet policija iejaucās, un laucinieki Triumfa arku nepaguva nodrapēt pilnībā.
 しかし 警察 介入する-過3 そして 農民-複 勝利-属 門-対 否-できる-過3 NO-覆う 完全に
 しかし警察が介入し、農民達は凱旋門を完全に布で覆うことはできなかった。

国会答弁の速記録の例文 3-63 では、visi「皆」を主語にした基動詞 deklarēties「確定申告をする」の直後に、「ラトヴィアに住む皆全員 (pilnībā visi, kas Latvijā dzīvo)」を主語とした no-動詞が強調して反復されている⁵⁷。

例文 3-63 (LV. 24.05.2011)

Ja mēs gribam, lai tiešām notiek deklarēšanās Latvijā, (..) liksim,
 もし 私達 したい-現1複 ために 本当に 行われる-現3 確定申告 ラトヴィア-位 課す-未1複
 lai visi deklarējas! Lai nodeklarējas pilnībā visi, kas Latvijā dzīvo!
 ために 皆 申告する-現3 ために NO-申告する-現3 完全に 皆 関代 ラトヴィア-位 住む-現3
 もし我々がラトヴィアで確定申告を本当にしたいのなら、皆が確定申告をすればいいんだ！ラトヴィアに住む皆全員が、確定申告をすればいいんだ！

3人による会話の例文 3-64 では、A と B が基動詞 popularizēt「普及させる」を使っているのに対し、C は A に対して動作が完了していることを no-動詞で示し、尚且つそれが結果として残っていることを複合時制で示している。

例文 3-64 (LR. 25.10.2010)

A: Tad es to nedrīkstu popularizēt?
 では 私 それ-対 否-してもよい-現1単 普及する

B: Tu lai popularizē!
 君 願 普及する-現2単

C: Tu jau esi nopopularizējis.
 君 すでに be-現2単 NO-普及する-能過

A: じゃあ俺は [狩猟を] 普及してはいけないうってこと？

B: 君が普及しなよ！

C: 君はもう普及したんだよ。

PFV と IPFV がそれぞれ、話者が自らを動作の外と中に置いて動作を見る (外・中からの

⁵⁷ どちらの動詞も「皆」を主語としているが、no-動詞の主語がより具体的に説明されていることから、この例文は次に論じる「具体・一般」の意味的対立でも説明できるだろう。

視点) という認知的な差異の点では、以下の例文 3-65 が興味深い。これは前後に走っていた 2 つのバスが接触した事故における、後方のバスの乗客の証言である。バスの中から目撃した前方のバスの急ブレーキの瞬間は PFV の no-動詞 nobremzēt 「ブレーキをかける」で示されている。一方、IPFV の基動詞を用いることで自分の乗っていたバスのブレーキを中からの視点で示している。

例文 3-65 (KR. 30.01.2007)

Mūsu šoferītis paņēma nedaudz pa labi, lai aizietu gar labo pusi, taču pēkšņi
私達-属 運転手-指 寄る-過3 少し 右に ために 行く-願 沿って 右側 しかし 突然
mikroautobuss strauji nobremzēja. Mūsējais arī bremzēja, taču
ミニバス 急に NO-ブレーキをかける-過3 我々の(バス)も ブレーキをかける-過3 しかし
attālums strauji saruka, mēs uzslīdējām priekšējam virsū, un autobusus
距離 急に 縮まる-過3 我々 ぶつかる-過1 複 前方に 上に そして バス-複対
iemeta vienu vienā, otru otrā grāvī.
放りこむ-過3 一方-対 一方-位 他方-対 他方-位 溝-位

右側の車線で走るため、私達の運転手さんは少し右へ寄った。すると突然 [前を走っていた] ミニバスが急にブレーキをかけた。私達のバスもブレーキをかけたが、車間距離は一気に縮まり、車の前部分がぶつかった。2つのバスはそれぞれの道路の溝へと放り出された。

ある状況は PFV・IPFV の 2 つの視点で見ることができる。同じ記事における基動詞 skalpēt 「批判する (原義: 頭皮を剥ぐ)」と no-動詞では、no-動詞が動作の強度を示す副詞 kārtīgi 「徹底的に」と共起している。例文 3-66 では、コーチが批判されている過程を見たことが述べられ、基動詞が用いられている。それに対して例文 3-67 ではコーチらが批判されたことが no-動詞で示されている。どちらの例文でも、試合の敗北についてコーチ陣が批判されている状況が IPFV と PFV の動詞で示されている。

例文 3-66 (NRA. 05.05.2003)

Esam redzējuši, kā čempionāta laikā tiek skalpēti treneri.
be-現1 複 見る-能過 いかに 選手権-属 時-位 受-現3 批判する-受過 コーチ-複
我々 [選手たち] は、選手権の間コーチたちもつるし上げられているのを見た。

例文 3-67 (NRA. 05.05.2003)

(..) arī treneri par sestdienas zaudējumu Šveicei tika kārtīgi noskalpēti.
も コーチ-複 対して 土曜日-属 敗北 スイス-与 受-過3 十分に NO-批判する-受過
土曜日のスイス戦の敗北で、コーチたちも徹底的につるし上げられた。

ホッケー場の建設コンペに申し込んだ建設会社に建設の資格があると認められた状況においても、PFV と IPFV による描写がなされている。基動詞 kvalificēties 「通過する」が用いられている例文 3-68 では、建設会社がコンペを“通過途中”の段階にあるのではなく、通過する資格を持っていることが述べられている。それに対して例文 3-69 では no-動詞により、コンペを通過したことが示されている。

例文 3-68 (NRA. 13.05.2002)

(..) šajos materiālos bija skaidri redzams, ka visi trīs pretendenti kvalificējas
 これらの 資料-複位 be-過3 明らかに 明らかな 従 すべて 3 候補者-複 通過する-現3
 3つの候補の会社とも通過することは、これらの資料で明らかだった。

例文 3-69 (NRA. 13.05.2002)

Trīs kompānijas pieteicās, un visas trīs nokvalificējās, un tika atstātas
 3 会社-複 申し込む-過3 そして すべて 3 通過する-過3 そして 受-過3 残す-受過
 tā sauktajā īsajā sarakstā.
 そのように 呼ぶ-受過 短い リスト-位
 3社が応募し、3社とも通過し、いわゆるショートリストに残された。

例文 3-70 のように前置詞 līdz 「まで」という動作の目標点が見られている場合でも、no-動詞は完全に行われる動作を示している。

例文 3-70 (ZL. 02.10.2010)

(..) kāds no šī amata kandidātiem ir „nogāzējis” tautu līdz kliņķim,
 誰か から この ポスト-属 候補者-複 be-現3 NO-ガス攻撃をする-能過 国民-対 まで 取っ手
 bet viņš joprojām grib „gāzēt”(..).
 しかし 彼 未だに したい-現3 ガス攻撃をする
 この役職の候補者のうちのある一人は国民を徹底して “ガス攻撃”をしたが、彼は未だに “ガス攻撃”をしたがっている。

例文 3-71 では、目標点を含意する動詞 novest 「(...まで) 持って行く、導く」のメタ言語的な表現として、no-動詞の notonēt (基動詞 tonēt 「色づける」) が用いられている。

例文 3-71 (AP. 14.08.2004)

Ozola spēks ir krāsas un krāsu pustoņus novest – notonēt – līdz
 Ozols-属 力 be-現3 色-複対 そして 色-複属 微妙なトーン-複対 持って行く NO-色づける まで
 pašiem nervu galiem.
 自体 神経-複属 先-複
 Ozols [芸術家] の力は、色と色の微妙なトーンを神経の先まで持っていき色づけることだ。

例文 3-72 から例文 3-74 では、「できること (IPFV) はすべてする (PFV)」という意味が共通している。ここでの PFV の動詞は具体的な完了の動作を示している。

例文 3-72 (F. 03.05.2003)

(..) laikam jau viss, ko varēja privatizēt, ir noprivatizēts.
 おそらく すでに すべて 関代 できる-過3 私有化する be-現3 NO-私有化する-受過
私有化できたものは、多分すべて私有化されている。

例文 3-73 (LA. 29.07.1999)

(..) pēc gada būs noprivatizēts viss, kas privatizējams.
 後で 年 be-未3 NO-私有化する-受過 すべて 関代 私有化する-受現
 1年後には、私有化できるものはすべて私有化されるだろう。

例文 3-74 (LA. 05.05.2005)

Drošbnieki savu darbu darīja cītīgi, noblokējot visu, kas blokējams (..).
 警護員-複 自分の 仕事-対 する-過3 懸命に NO-ブロックする-副 すべて-対 関代 ブロックする-受現
 警護員達は、ブロックできるものはすべてブロックして、自らの仕事を懸命に行っていた。

「具体・一般」

2.5.2.で見たように、「具体・一般」の対立は事象自体の具体性・一般性の対立というよりも話者による事象の具体化・一般化であり、絶対的な解釈が難しい。以下では、基動詞とno-動詞が近い文脈や同じ記事中で用いられている用例を中心に扱うほか、no-動詞のみの用例を個別的に扱う。

「具体・一般」の対立が明確に表れるのは、近い文脈において PFV と IPFV の動詞が用いられている場合である。例文 3-75 では「様々な試合」の主催が IPFV の基動詞 organizēt 「主催する」で示され、2つの PFV の no-動詞の補語は具体的な名称の試合になっている。

例文 3-75 (OZ. 28.12.2004)

(..) sportisti ne tikai veiksmīgi startēja (..) sacensībās, bet arī paši organizēja
 選手-複 否 だけ 成功理に 出場する-過3 試合-複位 しかしも 自分で 企画する-過3
 dažādas sacensības. Kluba sportisti noorganizēja "Daugavas kausu", (..) "Reljefs" un
 様々な 試合-複対 クラブ-属 選手-複 NO-主催する-過3 Daugava-属 杯-対 リリーフ そして
 "Rudens reljefs", orientēšanās sacensības Ogres sporta svētkos, palīdzēja
 秋-属 リリーフ オリエンテーリング-属 試合-複対 Ogre-属 スポーツ-属 祭典-複位 助ける-過3
noorganizēt "Gulbenes kausu" NBS sporta spēlēs.
 NO-主催する Gulbene-属 杯-対 スポーツ-属 試合-複位
 選手らは試合で活躍しただけでなく、自分たちが様々な試合を主催した。クラブの選手たちは「ダウガワ
 カップ」「リリーフ」「オータム・リリーフ」、Ogre スポーツの祭典でオリエンテーリングの試合を主催し、
 NBSのスポーツ試合でも「グルベネカップ」の主催を賛助した。

例文 3-76 では、ラトヴィア人俳優が普段ロシアのマスコミの前でポーズを取ることに
 ついては基動詞 pozēt 「ポーズを取る」が用いられているが、ラトヴィアのマスコミが彼にポ
 ーズを取るようお願いをした場面では、具体的一回の動作としてno-動詞が用いられている。

例文 3-76 (VZŽ. 25.07.2008)

Lūgts nopozēt, Kalniņš nīgri atrūca, ka viņam nepatīkot fotografēties.
 頼む-受過 NO-ポーズを取る 不機嫌に ボソッと答える-過3 従 彼-与 否-好き-現3-伝 写真を撮られる
 Taču koķetēt un pozēt krievu preseī Kalniņam nebija nekādu iebildumu.
 しかし 媚びる そして ポーズを取る ロシア人-複属 マスコミ-与 Kalniņš-与 否-be-過3 いかなる 異論-複属
ポーズを決めるよう頼まれた Kalniņš は、写真を撮られるのが嫌いとは不機嫌に答えた。しかしロシアのマス

コミに媚びた態度を取り ポーズを決める ことには、Kalniņš は何ら異論はなかった。

例文 3-77 では「具体・一般」の意味対立が「すべての道」と「道」において見出される。語順の観点から、基動詞 greiderēt 「グレーダー掛けをする」を含む節は、誰が道の整備を行うかが焦点となっており、道の整備を担当する者が述べられている。その彼がすべての道を整備したことが no-動詞で示されている。

例文 3-77 (DR. 12.04.2002)

Ceļus greiderē Jānis Puriņš, visus jau vienreiz nogreiderējis (..).
 道路-複対 グレーダー掛けをする-現3 すべて-複対 もう 一度に NO-グレーダー掛けをする-能過
 道路の グレーダー掛け は Janis Puriņš が行い、彼がすでにすべての道路を一度に グレーダー掛け をしている。

以下の例文 3-78 から例文 3-80 では no-動詞が一回の具体的な動作を示している。また、基動詞は no-動詞が示した新情報を受けて旧情報となり、動作の説明がなされたり、動作の状況に焦点が置かれている。例文 3-78 では no-動詞の直後の基動詞 kompensēt 「補償する」が、動作の説明（インフレを補正すること＝実際の給料を低くしない）として用いられている。例文 3-79 と例文 3-80 では、no-動詞が示す動作を行った「その後で (pēc tam)」no-動詞が示す動作と同じ動作における状況の説明が話題となっている。例文 3-79 の基動詞では、2 度目に確定申告をする人がどんな人か、例文 3-80 の基動詞では、どういった道を舗装していくかに焦点が置かれている。

例文 3-78 (NRA. 08.09.2008)

Ilgstoši teicu – valdības uzdevums ir nokompensēt inflācijas starpību. Jo
 継続的に 言う-過 政府-属 課題 be-現3 NO-補償する インフレ-属 差-対 なぜなら
kompensēt inflāciju faktiski nozīmē nepamazināt reālo algu.
 補償する インフレ-対 事実上 意味する-現 否-低くする 実際の 給料-対
 ずっと言ってきたことだが、政府の課題はインフレの差を 補正 することである。なぜならインフレを 補償 することは事実上、実際の給料を低くしないことを意味しているからだ。

例文 3-79 (DB. 09.06.2005)

Viņaprāt, labāk būtu vienreiz nodeklarēt visiem, bet pēc tam deklarēt personām,
 彼の意見では よい-比 be-願 一度 NO-申告する 皆-与 しかし その後 申告する 人-複与
 kuru ienākumi pārsniedz noteikto sliekšni.
 関代 収入-複 超える-現3 一定の 数居-対
 彼によれば、一度皆が 確定申告 をし、その後で収入が一定以上の人が 確定申告 をする方がよいという。

例文 3-80 (KR. 14.06.2011)

Visus 100 kilometrus pagasta ceļu varēsīm nogreiderēt vienu reizi,
 すべて キロ-複対 県-属 道-複属 できる-未1複 NO-グレーダー掛けをする 1 回-対
 pēc tam greiderēsīm ceļus ar lielāku transporta intensitāti.
 その後 グレーダー掛けをする-未1複 道-複対 を持つ 大きい-比 交通-属 集中度

我々は 100 キロの及ぶ県道は一度でグレーダー掛けをできるだろう。その後で、交通量のより多い道をグレーダー掛けをしよう。

この例文 3-80 のように「具体・一般」の意味対立では、PFV の動詞が具体的数量を伴う場合が多い。次の例文 3-81 でも「道路区間」に対して、具体的な「50m」分の区間が PFV の動詞の補語となっている。

例文 3-81 (AZ. 16.08.2010)

„(..) tos bija nepieciešams asfaltēt” atzīst J. Dambis. Lai varētu noasfaltēt
 それら-対 be-過 3 不可欠な 舗装する 認める-現 3 ために できる-願 NO-舗装する
 arī šos 50 metrus, pagasta pārvalde lūgusi(..) nodaļai rast šādu iespēju.
 も この メートル-複対 県-属 当局 頼む-能過 部-与 見つける このような 機会-対
 それ [道路区間] はアスファルトで埋める必要があったと J. Dambis は言う。この 50 メートルもアスファルトで埋めるために、県の自治体は作業部にこのような可能性を見つけるよう頼んだ。

PFV・IPFV のいずれも具体的な数量の補語を伴うことがある。この場合、PFV と IPFV の差異は、話者が動作を外からまたは中から見るかというアスペクト的視点の差異に帰結される。例文 3-82 と例文 3-83 はそれぞれ現在、過去と時制が異なるものの、どちらも習慣的な動作を示している。

例文 3-82 (MV. 14.01.2005)

Ir dienas, kad es masēju piecpadsmi cilvēkus.
 be-現 3 日-複 時 私 揉む-現 1 単 15 人-複対
 15 人をマッサージする日もある。

例文 3-83 (NRA. 10.04.2010)

Vēl padomju laikos (..) es strādāju par masieri, un dienas laikā parasti
 まだ ソ連の 時-複位 私 働く-過 1 単 として マッサージ師 そして 日-属 時-位 普通
nomasēju kādus 40-45 cilvēkus.
 NO-揉む-過 1 単 大体 人-複対
 まだソ連時代だった頃、私はマッサージ師として働き、一日に大抵 40 - 45 人くらいをマッサージした。

PFV の動詞は個別的動作を示す。例文 3-84 と例文 3-85 の基動詞 štancēt 「(型にはめて)作る」は、何かを型から生産する意味で用いられることが多いが、「型を元に大量に作る」という転義で用いられる。ここでは「写真」を客体とした転義で用いられている。例文 3-84 では基動詞が恒常的能力を示す動詞 mācēt 「…できる」と結びつき、一般的な動作を示しているのに対して、例文 3-85 の no-動詞は個別的動作を示し、尚且つ「出来事を収めて、それで終わり (un viss)」というダッシュを用いたメタ言語的な表現で no-動詞が示す動作の短時間性が示されている。

例文 3-84 (ZZ. 17. 03.2001)

Pirms gadiem likās, ka visu esmu apguvis : „štancēt” bildes
 前に 年-複 見える-過3 従 すべて-対 be-現1単 習得する-能過 量産する 写真-複対
 māku, un neko vairāk nevajag.
 できる-現1単 そして 何も-対 それ以上 否-必要である-現3

写真は簡単に“ポンと作れる”ので、私は何もかも習得した、それ以上は何もいらないと数年前は思えた。

例文 3-85 (ZZ. 17. 03.2001)

Viņi nesajūt fotogrāfijas garšu, bet gan aukstasinīgi „noštancē” –
 彼ら 否-感じる-現3 写真-属 味-対 しかし 助 冷淡に NO-量産する-現3
 fiksē notikumu, un viss.
 固定する-現3 出来事-対 そして すべて

彼らは写真のセンスを感じず、冷淡に“ポンと作る”、つまり出来事を収めて、それで終わり。

例文 3-86 の最初の動詞 nostāties「姿勢を取る」は「姿勢を取っている」ではなく、姿勢を取っていない状態から取っている状態への移行を示す。そして話者は自分が本の中で取った姿勢を no-動詞 nostilizēt「様式化する」で個々に列挙している。

例文 3-86 (AP. 17.11.2005)

Grāmatā nostājos tādās pozās, kādās dzīvē nekad nenostāšos. Man
 本-位 姿勢を取る-現1単 そのような ポーズ-複位 関代 人生-位 決して 否-姿勢を取る-未 私-与
 patīk jokat par visdažādākajām cilvēka izpausmēm. Nostilizēju
 好きだ-現3 ふざける について 様々な-最 人-属 表情-複 NO-様式化する-現1単
 iedomības pozu, nostilizēju trulumu, nostilizēju pervesijas,
 意地悪さ-属 ポーズ-対 NO-様式化する-現1単 鈍さ-対 NO-様式化する-現1単 退廃-複対
 nostilizēju suicidālismu, nostilizēju stulbu nevainību.
 NO-様式化する-現1単 自己破滅-対 NO-様式化する-現1単 頭の悪い 純潔さ-対

本の中では、これからの人生でも絶対取らないようなポーズを取っている。俺は実に色んな人の表情を冗談にするのが好きだ。意地悪なポーズも様式化、ポーっとした感じも様式化、退廃さも様式化、自滅も様式化、バカな純潔さも様式化した。

時間補語の格

2.5.3. で見た動詞と共起する時間補語の格の違いは、以下の例文 3-87 と例文 3-88 で見られる。基動詞 driblet「ドリブルする」も no-動詞も共に回数を示す語を伴っている。no-動詞の例文 3-87 は時間位格 minūte「1 分間で」という制限時間的な時間幅におけるドリブルの回数を示す。基動詞の例文 3-88 では、ボールを逃がさない時間という付帯状況を示す節で用いられている時間対格 deviņas stundas un sešas minūtes「9 時間 6 分の間」によって、ドリブルの持続時間におけるドリブルの回数が示されている。

例文 3-87 (LA.13.09.2010)

Labākais futbola bumbas driblētājs izrādījās Zuntners, kas minūtē
 良い-比 サッカー-属 ボール-属 ドリブラー であることがわかる-過3 関代 分-位
 kājbumbu nodribēja 165 reizes (..).
 サッカーボール-対 NO-ドリブルする-過3 回-複対

サッカーボールのベストドリブラーとなったのは Zuntners で、1 分間にサッカーボールを 165 回ドリブル した。

例文 3-88 (D. 20.03.2004)

Milena driblēja bumbu 44 187 reizes, neļaujot tai nokrist deviņas stundas
 ドリブルする-過3 ボール-対 回-複対 否-させる-副 それ-与 落ちる 9 時間-複対
 un sešas minūtes.
 そして 6 分-複対

[サッカーで] Milena はボールを 9 時間 6 分もの間落とすことなく、44187 回ドリブルした。

タクシス

IPFV の動詞、または PFV の動詞を列挙する際、必ずしも動作の同時性や順次性のタクシスは問題にはならない。しかし言語文化論では「文やテキストにおけるアスペクトの形式は互いに一致 (koordinēt) させなければいけない」とし、文の同種成分の動詞の対立アスペクトの不一致が好ましくないとされる。その例として、対立アスペクトが一致していない 2 つの動詞 stāstīt「語る (IPFV)」と parādīt「見せる (PFV)」を挙げている (Freimane 1993, 229)。

例文 3-89 (Freimane 1993, 229)

Viņi stāstīja un parādīja diapozitīvus par šo interesanto braucienu.
 彼ら 語る-過3 そして 見せる-過3 スライド-複対 ついて この 面白い 旅行
 彼らはこの面白い旅行について語り、スライドを見せた。

これに対し、アスペクト対立で対応する pastāstīt「語る (PFV)」か rādīt「見せる (IPFV)」を用い、それぞれ PFV か IPFV で一致させることを推奨している。

Viņi pastāstīja un parādīja diapozitīvus... (PFV で統一)

Viņi stāstīja un rādīja diapozitīvus... (IPFV で統一)

旅行について語ることにスライドを見せることが同時に起こったのか、それとも順番に起こったのかは、文脈なしに判断はできない。PFV の動詞の列挙により、同時に起こる 2 つの動作を一まとまりに捉えることも、IPFV の動詞の列挙により、同時には起きない 2 つの動作をそれぞれプロセス的に捉えることも可能である。

逆説的ではあるが、言語文化論で推奨される文の同種成分の対立アスペクトの統一が、文中の他の動詞、特にアスペクト対立を持つ動詞との関係において、言語文化論で批判される PFV の動詞の使用を根拠づけることになる。

例文 3-90 と例文 3-91 では、kultivēt「耕運機で耕す」、federēt「スプリング掛けをする」、ecēt「ハロー掛けをする」という借用語の基動詞とその no-動詞が用いられ、各例文中の他のラトヴィア語本来の動詞の対立アスペクトに一致している。

例文 3-90 では上記の 3 つの基動詞が darīt「する」、art「耕す」、vagot「プラウ掛けをする」、sēt「種まきをする」、plaut「刈る」といった一連の IPFV の基動詞と共に用いられている。

例文 3-90 (OZ.22.08.2002)

Kolhozā darīju visus zemnieka darbus – ar zirgiem : aru,
 コルホーズ-位 する-過1単 すべて 農民-属 仕事-複対 で 馬-複 耕す-過1単
 ecēju, federēju (literārajā valodā – kultivēju),
 ハロー掛けをする-過1単 スプリング掛けをする-過1単 標準的な 言語-位 耕運機で耕す-過1単
 vagoju, sēju, plāvu.
 プラウ掛けをする-過1単 蒔く-過1単 刈る-過1単

コルホーズで私はすべての農作業を馬の力で行った。畑を耕し、ハロー掛け、スプリング掛け（標準語では“耕運機で耕す”）、プラウ掛け、種まき、刈り取りをしたものだった。

逆に例文 3-91 では、例文 3-90 に出てくる IPFV の基動詞に対応する PFV の接頭辞動詞 uzart「耕す」、iesēt「種まきをする」や nošļūkt「レーキで均す」、pievelt「ローラーで均す」といった PFV の接頭辞動詞と共に用いられ、3 つの no-動詞は文中の他の動詞とのアスペクトの統一に寄与している。

例文 3-91 (BD.14.02.2007)

Laukus rudenī uzara, pavasarī nošļūca, nokultivēja (toreiz teica
 土地-複対 秋-位 耕す-過3 春-位 レーキで均す-過3 耕運機で耕す-過3 当時 言う-過3
 „nofederēja”), noecēja, pievēla, iesēja, izmantojot
 NO-スプリング掛けをする-過3 NO-ハロー掛けをする-過3 ローラーで均す-過3 蒔く-過3 利用する-副
 tikai un vienīgi zirgvilkmes agregātus.
 だけ そして 唯一 馬力-属 農具-複対

馬に引かせる農具だけを使い、秋には畑を耕し、春にはレーキで均し、耕運機で耕し（当時はスプリング掛けと言った）、ハロー掛けをし、ローラーで均し、種まきをした。

文体的差異がある 2 つの類義語 kultivēt「耕運機で耕す」と federēt「スプリングがけをする（より職業的）」は、例文 3-90 でも例文 3-91 でもカッコを伴うメタ言語的な表現で説明され、接頭辞の有無により対立アスペクトも一致している。

次の例文 3-92 のように、同種成分が副分詞の場合でも対立アスペクトの一致は見られる。

例文 3-92 (LR. 14.01.2010)

Iedarbojoties vispār uz organismu kopumā, jā, nonormalizējot aknu stāvokli
 作用させる-副 概して へ 体 全体に はい NO-正常化する-副 肝臓-複属 状態-対
 un nokoncentrējot iedzimto enerģiju, var uzlabot acu stāvokli.
 そして NO-集中させる-副 生得的な エネルギー-対 できる-現3 よくする 目-複属 状態-対

体全体に作用を及ぼすことで、つまり肝臓の状態を正常にして、本来あるエネルギーを集中させると、目の状態が改善できます。

モーダルの意味

PFV の動詞がモーダルの意味を含む語と結びつくと、動作の見込み性というモーダルの意味が強くなる。

例文 3-93 では *bastot* 「サボる」が習慣的行為を示し、*nobastot* はモーダル動詞 *varēt* 「できる」と結びついている。もしここで *nobastot* の代わりに IPFV の基動詞が用いられていれば「そもそもサボることができなかった」のに対し、PFV の *no*-動詞では「サボろうと思ってもサボれなかった」のように動作に対する意志性が強くなる。

例文 3-93 (S. 11.2008)

Patiesību sakot, pirmos pāris gadus es pa druskai *bastoju*⁵⁸ gan. (..) Lūzums
 真実-対 言う-副 最初の 2,3 年-複対 私 少し サボる-過1単 助 転機
 notika pirmajā treniņnometnē. Pirmkārt, tur nevarēja *nobastot*.
 起こる-過3 最初の 合宿-位 まず そこで 否-できる-過 NO-サボる

実を言うと、最初の 2,3 年は少しサボっていた。転機が訪れたのは最初の合宿だった。まずそこではサボることができなかった。

例文 3-94 では恒常的能力を示す *mācēt* 「できる」と結びついた基動詞は一般的な動作を示すが、PFV の動詞は「然るべき時に」と特定された「サボる」行為として用いられている。

例文 3-94 (S. 11.2008)

(..) es domāju, ka sportistam ir jānāk *bastot*. Bet īstajā brīdī *nobastot*
 私 思う-現 従 選手-与 be-現3 できる-義 サボる しかし 然るべき 時位 NO-サボる
 ir tavs nodrošinātājs.
 be-現3 君の 守るもの

スポーツ選手はサボる能力があるべきだと思う。しかし然るべき時にサボれることが選手を守ることになる。

例文 3-95 では、基動詞 *nacionalizēt* 「国有化する」がソ連の官僚がやってきた目的として用いられている。しかしその建物内にある 3 つのフラットを国有化できなかったことがモーダル動詞 *dabūt* 「する機会を得る」の否定形と共に *no*-動詞で示されている。

例文 3-95 (RB. 19.11.2002)

(..) ieradās jaunceptie ierēdņi ar mērļenti. Māju *nacionalizēt*. Mērīja no
 現れる-過3 新米の 官僚-複 を持って メジャー 家-対 国有化する 測る-過3 から
 augšas un mērīja no apakšas, bet simt septiņdesmit kvadrātmētru nesanāk
 上 そして 測る-過3 から 下 しかし 100 70 平方メートル 否-満たない
 – aizbrauca nikni, lamādamies. Kā tas var būt, ka trīs dzīvokļi, bet
 去る-過3 機嫌悪く 文句を言う-副 いかにか それ できる-現3 be 従 3 フラット-複 しかし
nonacionalizēt nedabū!
 NO-国有化する 否-できる-現3

メジャーを持って新米の官僚たちがやってきた。建物を国有化するために。上からも下からも測るが、170

⁵⁸ 雑誌のインタビュー原文でこの語が終始斜体で示されているのは、俗語だからである。

平方メートルには満たない。文句を言いながら怒って帰って行った。[建物には] 3つのフラットもあるのに国有化できないなんて！

モーダルの意味と関連して、命令や願望を示す節の中で PFV の動詞と否定の要素が結びつくと、PFV の動詞では危惧の念が強調される。この例文 3-96 を例文 3-97 と比較する。

例文 3-96 (LR. 08.12.2010)

Tāpat smiltsērķškos ir diezgan ievērojams daudzums E vitamīnu, kurš
同様に クロウメドキ-複位 be-現3 かなり 注目すべき 量 ビタミン-複 関代
nepieciešams, lai nepiesātinātās taukskābes nenooksidētos.
必要な ために 否-飽和する-受過 脂肪酸-複 否-酸化する-願
同様にクロウメドキにも、不飽和脂肪酸が酸化してしまわないために必要な、かなりの量のビタミン E
がある。

例文 3-97 (LK. 21.08.2003)

Lai taukvielas neoksidētos, ir jāpievieno uzlabotāji.
ために 脂質-複 否-酸化する-願 be-現3 加える-義 防腐剤-複
脂質が酸化しないためには、防腐剤を添加しなければいけない。

禁止の行為は IPFV の動詞と結びつく。以下の 2 つの例文ではどちらにも no-動詞が用いられているが、例文 3-98 では基動詞 privatizēt「私有化する」が禁止の意味と結びつき、例文 3-99 では基動詞 regulēt「規制する」が vajadzēt「必要である」の否定形と結びついている。

例文 3-98 (NRA. 10.12.2005)

Sākumā nedrīkstēja komunālo dzīvokli privatizēt, tad atļāva, un daži
初めに 否-してもよい-過3 公営の 住居-対 私有化する そして 許可をする-過3 そして 数人の
kaimiņi paspēja noprivatizēt, bet drīz vien teica, ka te cels
隣人-複 時間がある-過3 NO-私有化する しかし やがて だけ 言う-過3 従 ここに 建てる-未3
bibliotēku, un atkal aizliedza privatizēt.
図書館-対 そして 再び 禁止する-過3 私有化する

最初は公営住宅の私有化は認められなかった。その後で許可され、隣人の中には私有化をしてしまう者もいた。しかしすぐ後で、ここに図書館が建設されると言われ、再び私有化は禁止された。

例文 3-99 (NRA. 11.08.2011)

- Ir iespējas un vajadzība to juridiski noregulēt?
be-現3 可能性-複 そして 必要性 それ-対 法的に NO-規制する
- Domāju, ka nevajadzētu to regulēt, tādām ierobežojumam nav pamata.
思う-現1 単 従 否-必要がある-願 それ-対 規制する そのような 制限-与 否-be-現3 根拠-属
- それ [大統領から議員への降格] を法的に規制する可能性や必要性はありますか？
- 私が思うに、それを規制する必要はありません。そのような制限には根拠がありません。

本節では no-動詞と基動詞、また単独の no-動詞の使用を分析した。これらの用例では、

借用語の no-動詞はラトヴィア語本来の PFV の動詞と同じく、PFV・IPFV のアスペクト対立を成している。

3.8. “より形式的な” 接頭辞 no-

本節では、基動詞の示す動作と空間的意味が一致することにより形式的意味の接頭辞として機能する空間的意味の接頭辞に立ち返り、同じ事象に対する異なる空間的意味の接頭辞の使用から、空間的意味の任意性を論じる。それを踏まえた上で、空間的意味と、基動詞と接頭辞の語彙的関連性において、他の接頭辞 sa-と iz-と比較した接頭辞 no-の位置づけを明らかにする。

3.8.1. 空間的意味から形式的意味への移行

基動詞の PFV 化には、対立アスペクト以外の語彙的意味を変えずに PFV 化をする形式的意味の接頭辞と、動作の目標点を定めたり、明確化する空間的意味の接頭辞が関わっている。しかし 1.3.4. で述べたように、形式的意味と空間的意味の境界は常に区別できるわけではない。なぜなら形式的意味の接頭辞は空間的意味を元にしており、それが残っていることもあるからである。

例えば基動詞 rakstīt 「書く」には様々な空間的意味の接頭辞が付加されるが、基動詞とアスペクトペアをなすとされるのは接頭辞動詞 uzrakstīt である。接頭辞 uz-は、その空間的意味「上」が文字や文様を何かの表面上に施す「書く」という基動詞が示す動作の方向に一致していることで、基動詞を単に PFV 化する形式的意味の接頭辞とされる。一方で、接頭辞 pie- 「留」が付加された pierakstīt 「書き留める」、接頭辞 ie- 「中」が付加された ierakstīt 「書き込む」、接頭辞 iz- 「外」が付加された izrakstīt 「書き出す」はそれぞれ空間的な意味修正を受けているが、接頭辞と同じ空間的意味を持つ副詞や前置詞を基動詞に添えた対応の IPFV の分析的表現は存在しない。

一連の空間的意味を示す接頭辞が付加される動詞には他にも iet 「行く」、skriet 「走る」、likt 「置く」などがある。それぞれの接頭辞動詞には、対応の IPFV の分析的表現があるが、形態的には IPFV である基動詞のアスペクトの帰属の議論はなされない。空間的意味は接頭辞だけでなく前置詞によっても示され、接頭辞がなくても前置詞句や副詞句で示される空間的意味が動作の目標点となり、基動詞に動作の目標性が与えられる⁵⁹。そのため、iet uz parku 「公園に行く (不定形)」は行く途中のプロセスでもあるが、目標点に到着した時点も含意するため、IPFV と PFV どちらのアスペクトにもなりうる。

ここでの疑問は、借用語の基動詞に複数の空間的意味の接頭辞が付加される場合、どの

⁵⁹ Nešpore はアスペクト論ではなく意味論から、移動を示す動詞の限界 (telic) 性と非限界 (atelic) 性について分析している (Nešpore 2009)。ラトヴィア語学で限界性の概念はこれまでに議論されていないが、形式だけでなく意味に深化した動詞アスペクトの研究には、今後さらなる研究が必要な概念であろう。

接頭辞動詞が基動詞とアスペクトペアをなすか、またその接頭辞動詞は一つに定められているのか、ということである。

複数の接頭辞が一度に基動詞に対して形式的意味の接頭辞として機能していると解釈する立場がある。L'Hermitte はロシア語の借用語の動詞の PFV 化について、基動詞 *redaktirovat'* 「編集する」に対する接頭辞動詞 *otredaktirovat'* と *proredaktirovat'* を例に、一つの動詞に対する複数の“空の接頭辞”の「平行した使用」や「使用の揺れ」を指摘し、PFV 性が一つの形態素だけで表されるわけでは決してないとしている (L'Hermitte 1968, 82)。Čertkova & Čang も、基動詞 *tatuirovat'* 「タトゥーを入れる」に対する *natatuirovat'* と *vytatuirovat'* を挙げ、異なる接頭辞による体のペアのヴァリエントがあることを指摘している (Čertkova & Čang 1998, 20)。

ラトヴィア語ではどうだろうか。空間的意味を持つ接頭辞が 1 つしか付加されない動詞には基動詞 *kapsulēt* 「カプセル化する」に対する *iekapsulēt* 「カプセル化する」(接頭辞 *ie-* 「中」) がある。空間的な意味修正を加える接頭辞が他に付加されない場合は、その接頭辞が基動詞の示す動作に一致する空間的意味を持ち、形式的意味の接頭辞と見なされる。しかし次の 3.8.2. で後述するように、空間的意味の表示自体が任意的であったり、空間的視点の差異によって、複数の空間的意味の接頭辞が形式的意味の接頭辞として機能していると考えられる場合がある。

3.8.2. 空間的意味の任意性

ここで空間的意味の表示自体が任意的である場合や、複数の空間的意味の接頭辞が同じ結果を示し、それが空間的視点の差異に過ぎない場合があることを指摘する。

基動詞 *betonēt* 「コンクリート舗装する」の接頭辞動詞には、空間的意味が「中」の *iebetonēt* (702)⁶⁰ と「一面」の *izbetonēt* (126) がある。米軍によりラトヴィア国内の「砂丘に敷設されたコンクリート道路」についての新聞記事を比較してみると、同じ道に対して基動詞と 2 つの異なる接頭辞動詞が使用されている。

例文 3-100 の新聞記事の見出しや、同記事本文の例文 3-101 では基動詞の *betonēt* が用いられている。どちらの例文にも場所に関する補語がなく、コンクリート道路の敷設の空間的情報はそもそもない。

例文 3-100 (NRA. 12.10. 2010)

Amerikāņu betonēto ceļu lieto vandalismam.
 アメリカ人-複属 舗装する-受過 道-対 使う-現 3 破壊行為-与

[記事見出し] アメリカ [軍] により 舗装された道路、破壊行為に使われる。

⁶⁰ 動詞の後に示す数字は、『新聞図書館』で 2012 年 2 月 13 日までに検索された、問題の動詞を含む新聞記事の件数である。数量データの収集については、本論文 0.6.1. と 0.6.2. を参照されたい。

例文 3-101 (NRA. 12.10.2010)

(..) citi braucēji sējuši laivas džipiem aizmugurē un vizinājuši cits citu
 他の 運転する人-複 蒔く-能過 舟-複対 ジープ-複与 後ろ-位 そして 転がせる-能過 あれ これ
 pa smiltīm, pa betonēto ceļu.
 に 砂-複 に 舗装する-受過 道

車を乗り回す者達 [米軍関係者] は小舟をジープの後ろにつけ、砂浜や舗装された道路にあれこれ転がせていた。

敷設された場所が砂丘であったことを明示すると、空間的意味を示す接頭辞が付加される。しかしここでは、空間的意味を示す接頭辞には差異が見られる。例文 3-102 と例文 3-103 では砂丘の「中」を示す接頭辞 ie-が、例文 3-104 では砂丘の「一面」を示す接頭辞 iz-が基動詞に付加されている。どちらの空間的意味の接頭辞が付加されても、ここで話題となっているのは砂丘に敷設された同一の道路である。

例文 3-102 (NRA. 05.06.2010)

Te pa kāpā iebetonēto ceļu desantēsies ASV karavīri ar 100 dažādām
 ここに 砂丘-位 中に敷設する-受過 道 上陸する-未3 アメリカ合衆国 兵士-複 で 様々な
 militārā transporta vienībām.
 軍事的な 輸送-属 単位-複

この砂丘の中に敷設されたコンクリート道路に、米軍兵士が 100 の様々な軍事輸送手段で上陸する。

例文 3-103 (NRA. 12.10.2010)

Nedienas ar Vārves pagasta kāpā iebetonēto ceļu sākās jau drīz pēc
 騒動-複 巡る Vārve-属 県-属 砂丘-位 中に敷設する-受過 道 始まる-過3 すでに すぐに 後で
 starptautisko mācību noslēguma.
 国際的な 演習-複属 終了

Vārve 県の砂丘の中に敷設されたコンクリート道路を巡る騒動は、国際軍事演習の終了後すぐに始まった。

例文 3-104 (BNS. 10.06.2010)

(..) skaļākās diskusijas (..) izvērtās par (..) Varves pagasta kāpās izbetonēto
 騒がしい-比 議論-複 展開する-過3 ついて Varve-属 県-属 砂丘-複位 一面に敷設する-受過
 ceļu ASV armijas desanta sagaidīšanai.
 道 アメリカ合衆国 軍-属 上陸部隊-属 迎えること-与

米軍上陸部隊を迎え入れるために Varve 県の砂丘の一面に敷設されたコンクリート道路を巡って、激しい議論が展開した。

銃を所持して学校内に「立てこもった」事件の描写では、空間的意味が「遮」の aizbarikadēties と「中」の iebarikadēties がそれぞれ用いられている。ドイツで起こったこの事件の描写に用いられた接頭辞 aiz-では例文 3-105 のほか 15 件、接頭辞 ie-では例文 3-106 の 1 件が確認された。

例文 3-105 (BNS. 26.04.2002)

(..) jaunietis aizbarikadējās klasē, kurā atradās 28 bērni.
 青年 立てこもる-過3 教室-位 関代 いる-過3 子供-複
 青年は28人の子供たちがいる教室に立てこもった。

例文 3-106 (D. 27.04.2002)

(..) izslēgts audzēknis (..) kopā ar ķīlniekiem iebarikadējās kādā telpā (..).
 追い出す-受過 生徒 共にと 人質-複 立てこもる-過3 何らかの 部屋-位
 放校になった生徒は人質と共にどこかの部屋の中に立てこもった。

同じ語を補語に持つ場合でも、異なる空間的意味を持つ接頭辞が用いられることがある。例文 3-107 と例文 3-108 では、基動詞 reģistrēt 「登録する」に付加される接頭辞 ie- 「中」と pie- 「留」がそれぞれ用いられている。

例文 3-107 (D. 17.08.1998)

Nacionālā teātra zeme un ēka jau ir iereģistrētas zemesgrāmatā.
 国立の 劇場-属 土地 そして 建物 すでに be-現3 登録する-受過 土地台帳-位
 国立劇場の土地と建物は土地台帳にすでに登録された。

例文 3-108 (VZŽ. 20.07.2007)

(..) pils tika piereģistrēta zemesgrāmatā kā dzīvojamā ēka.
 城 受-過3 登録する-受過 土地台帳-位 として 住居用の 建物
 城は住居として土地台帳に登録された。

基動詞「インストールする」には接頭辞 ie- 「中」と uz- 「上」が付加される。インストール先の場所を示す名詞は、接頭辞 ie- の場合位格を、uz- の場合は前置詞 uz 「...の上に」+名詞、または位格か与格をとる。補語はどちらの接頭辞動詞も programma 「プログラム」や sistēma 「システム」などの語であり、パソコンにインストールをする点で変わりはない。

例文 3-109 (D. 12.04.2008)

Lai izmantotu kādu programmu, tai vairs nav jābūt ieinstalētai
 ために 利用する-願 何らかの プログラム-対 それ-与 もはや 否-be-現3 be-義 インストールする-受過
jūsu datorā.
 あなた-属 パソコン-位
 なにかプログラムを利用するには、それ（プログラム）があなたのパソコンにインストールされている必要はもうない。

例文 3-110 (DB. 28.10.2009)

(..) to iespējams uzinstalēt arī uz lietotiem datoriem (..).
 それ-対 可能である インストールする も 上に 使う-受過 パソコン-複
 それ [Windows 7] は使用されているパソコンにもインストールできる。

「タトゥーをする」という肌へ文様を施す行為では、肌の“上”（接頭辞 uz-）か“中”（接頭辞 ie-）かによって接頭辞が異なるが、どちらの接頭辞も同じ結果の動作を示している。芸能人のタトゥーを特集した記事内では、接頭辞動詞 *uztetovēt* と *ietetovēt* がどちらも用いられている。タトゥーを施す場所は例文 3-111 では前置詞句 *ap* 「の周りに」、例文 3-112 から例文 3-114 では前置詞句 *uz* 「の上に」で示されるが、どれも「タトゥーを施す」ことに違いはない。

例文 3-111 (AP. 15.10.2004)

Pamelai ap roku ir uztetovēta dzeloņstieple.

Pamela-与 周りに 手 be-現3 彫る-受過 有刺鉄線

パメラの手の周りには、有刺鉄線が彫られている。

例文 3-112 (AP. 15.10.2004)

Uz kreisās rokas plaukstas Kristīnai uztetovēts nenosakāma izskata ķinķēziņš.

上に 左の 手-属 ひら Kristīna-与 彫る-受過 否-特定する-受現 風貌-属 女

クリスティーナの左手の手のひらには何ともいえない風貌の女が彫られている。

例文 3-113 (AP. 15.10.2004)

Savukārt Viktorijai uz rokas ietetovēti vīra Deivida Bekhema iniciāļi.

一方 Viktorija-与 上に 手 彫る-受過 夫-属 Deivids-属 Bekhems-属 イニシャル-複

一方ヴィクトリアの手には、夫デイヴィド・ベッカムのイニシャルが彫られている。

例文 3-114 (AP. 15.10.2004)

Kanādiešu poppancenei uz kreisās rokas ir uztetovēta maza mazītiņa

カナダ人-複属 ポップ・パンク歌手-与 上に 左の 手 be-現3 彫る-受過 小さな ちっちゃな

zvaigznīte.

星-指

カナダのポップ・パンク歌手の左手には、ちっちゃなちっちゃな星が彫られている。

これらの空間的意味の接頭辞動詞は、接頭辞が異なっても動作の結果は同一である。つまり、道路が敷設されるのが砂丘の“中”か“一面”か、男が教室に立てこもるのが“遮”る形なのか、“中”なのか、建物の土地台帳への記載が“中”か“留”か、プログラムのインストールがパソコンの画面“上”か“中”かは、空間的な視点の差異に過ぎず、この空間的意味がどんな意味であれ動作の結果は同一のものである。よってどちらの空間的意味の接頭辞も、基動詞が示す動作から連想される空間的意味に一致し、同等に形式的意味の接頭辞として機能している。

もちろん、空間的意味の接頭辞が複数付加される動詞の場合、動作の結果が異なるものがある。例えば *printēt* 「プリントする」は、プリンターでプリントアウトをする場合には接頭辞 *iz-* 「外」が付加されている（例文 3-115）が、表面になんらかの方法でプリントをする場合には接頭辞 *uz-* 「上」が付加されている（例文 3-116）。

例文 3-115 (ZL. 25.02.2010)

Skolēni izprintē mācību darbus, pieaugušie – aviobiļetes uz ārzemēm (..).
 生徒-複 プリントアウトする-現3 勉強-複属 仕事-複対 大人-複 航空券-複対 へ 海外-複
 生徒達は勉強の課題を、大人達は海外への航空券をプリントアウトする。

例文 3-116 (AP. 02.03.2007)

Datuma un laika uzprintēšana uz biļetes prasa noteiktu laiku.
 日付-属 そして 時間-属 プリントすること 上に チケット 要る-現3 一定の 時間-対
 日付と時間をチケットにプリントするには、それなりの時間を要する。

ここでは接頭辞の空間的な意味の違いが、動作が及ぶ場所やもの、手段に関係している。

3.8.3. 接頭辞 no- と他の接頭辞の比較

本節では、空間的意味における接頭辞 no- と複数の接頭辞を比較し、接頭辞 no- が空間的意味を残さずに基動詞を PFV 化していることを示す。また語彙的関連性において接頭辞 sa- と iz- と比較して、接頭辞 no- が基動詞との語彙的関連性が希薄なまま基動詞を PFV 化していることを示す。

3.8.3.1. 空間的意味における比較

基動詞 integrēt 「統合する」には、一連の空間的意味の接頭辞 at- 「脱」(1)、ie- 「中」(25)、iz- 「外」(2)、pār- 「移」(4)、pie- 「接」(1)、sa- 「共」(8) が付加されている。

接頭辞 at- と iz- は、基動詞が示す動作を打ち消す動作を示す。

atintegrēt 「離脱させる」

at- 「脱」

例文 3-117 (LA. 03.03.2006)

Kad valstī varu iegūs partija, kas latviešus atintegrēs no komunistiskās
 いつ 国位 権力-対 得る-未3 党 関代 ラトヴィア人-複対 離脱させる-未3 から 共産主義の
 „vodkas un voblas” ideoloģijas (..) ?
 ウオッカ-属 そして ヴォブラ-属 イデオロギー

“ウオッカとヴォブラ [酒の肴として食される燻製魚] の共産主義的なイデオロギーからラトヴィア人を
離脱させてくれる政党が国内で権力を握るのはいつになるのか？

izintegrēt 「放免する (統合したものを外に追放する)」

iz- 「外」

例文 3-118 (NRA. 16.08.2003)

(..) premjers nerimās un piedraudēja vispirms izintegrēt ieintegrējušos ministru
 首相 否-落ち着く-過3 そして 脅す-過3 まず 放免させる 統合する-能過 大臣-対

Muižnieku, bet pēc tam pārējos visus.

Muižnieks-対 しかし その後で 残りの 皆-対

首相はそれではおさまらず、まず馴染んでいた Muižnieks 大臣を、そして残りの大臣全員を放免すると脅した。

次の4つの接頭辞 pār-, pie-, sa-, ie-が付加された動詞では、基動詞の示す動作に空間的意味が加わっている。例文 3-119 の接頭辞 pār-は、「A から B に」という前置詞句を伴い、空間的意味「移」を持っている。例文 3-120 の接頭辞 pie-「近」では、近づける対象に与格の代名詞 sev 「自分に」が用いられている。例文 3-121 の接頭辞 sa-は、副詞 kopā 「共に」が示すように空間的意味「共」のほか、客体の多さというアスペクト的意味にも解釈される。例文 3-122 の接頭辞 ie-「中」は他の接頭辞に比べて件数が多いことから、基動詞の動作「統合」から連想される空間的意味に一致し、空間的意味の接頭辞が形式的意味の接頭辞として機能していると考えられる。

pārintegrēt 「(A から B へ) 統合する」

pār- 「A から B へ」

例文 3-119 (D. 25.08.2008)

Cik grūti ir tās pārintegrēt no viena kanāla otrā?

どれだけ 難しい be-現3 彼ら-対 統合する から 一方の 局 もう一方

彼ら [テレビ番組の看板的存在の人たち] をある局からある局へ統合するのはどれだけ難しいのか?

pieintegrēt 「ある集団に近づけて統合する」

pie- 「近」

例文 3-120 (LA. 26.06.2006)

Līgo svētki iemanījušies jau padomju gados sev cieši pieintegrēt

夏至の前夜 祭-複 慣習とする-能過 すでに ソ連の 年-複位 自分-与 密に 結びつけ統合する

cittautiešus.

他民族の人-複対

夏至の前夜祭は、すでにソ連時代から他民族の人々を強く結びつけ、統合していた。

saintegrēt 「共に統合する」

sa- 「共」

例文 3-121 (DZ. 25.07.2009)

Vīzija ir sapludināt, saintegrēt kopā personālijas.

ビジョン be-現3 流れ合わせる 共に統合する 共に スタッフ-複対

ビジョンはスタッフを共に混ぜ、統合することである。

ieintegrēt 「統合する」

ie- 「中」

例文 3-122 (D. 28.04.2007)

Meita vairākus gadus strādāja (..) integrācijas departamentā, integrēja mūs
娘 数 年-複対 働く-過3 統合-属 部門-位 統合する-過3 私達-対

Eiropā, un beigās pati tur ieintegrējās.
ヨーロッパ位 そして 終わり-複位 自分で そこで 自分を統合する-過3

娘は数年統合部門で働き、私たちを欧州に統合していたが、最後には自分が〔他の EU 加盟国の人と結婚して〕そこに統合した。

これら空間的意味を示す接頭辞に並行して *nointegrēt* (3) も存在する。3 件のどの文脈においても接頭辞 *no-*の空間的意味の「下」または「離」の解釈が不可能である。「中」という空間的意味を残す接頭辞を持つ *ieintegrēt* より件数は少ないものの、*no-*動詞は基動詞を PFV 化し、*ieintegrēt* と同様に PFV の動詞として機能している。

nointegrēt 「統合する」

no-「PFV 化」

例文 3-123 (NRA. 03.11.2006)

Vai galu galā nesanāks tā, ka sorosisms ar pamatīgu finansiālo pamatu
か 結局 否-なる-未3 そのように 従 ソロス主義 で 莫大な 財政的 基盤

nointegrēs mūs visus, ka i nepamanīsim?
NO-統合する-未3 私達-属 皆-対 従 助 否-気づく-未3

莫大な財政基盤を持つソロス主義が、気づかぬうちに我々を皆統合してしまうことにはならないか？

複数の空間的意味を持つ接頭辞が基動詞に空間的な意味修正を加える中で、接頭辞 *no-*が空間的意味を加えずに基動詞を PFV 化している例には *dambēt* 「堰きとめる」もある。この基動詞には *aiz-* (734), *ie-* (12), *iz-* (1), *no-* (7), *sa-* (24), *uz-* (7) の 6 つの接頭辞が付加されている。このうち空間的意味「遮」の接頭辞 *aiz-* は件数が多く、基動詞の示す動作から最も連想されやすい空間的意味を持ち、形式的意味の接頭辞として機能している。

aizdambēt 「(遮って) 堰き止める」

接頭辞 *aiz-* 「遮」

例文 3-124 (BD. 30.04.2011)

Visi meliorācijas grāvji ir bebru aizdambēti.
すべて 灌溉-属 溝-複 be-現3 ビーバー-複属 堰きとめる-受過

灌溉要路はすべてビーバーにより堰きとめられている。

例文 3-125 (OZ. 26.07.2003)

(..) HES īpašnieki (..) aizdambēja Ogres upi.
水力発電所 所有者-複 堰きとめる-複 Ogre-属 川-対

水力発電所の所有者は Ogre 川を堰きとめた。

『標準語辞典』では *nodambēt* は「*aizdambēt* と同じ」と記述されており、2 つの接頭辞動詞は類義語とされている (『標準語辞典』)。確かに『新聞図書館』でも、*aiz-*動詞と似た文

脈（ビーバーによる川の堰き止め：例文 3-124 と例文 3-126、水力発電所による川の堰き止め：例文 3-125 と例文 3-127）で用いられている。しかし基動詞 *integrēt* の場合と同様に、最も連想される空間的意味の接頭辞が付加された接頭辞動詞が PFV の動詞として用いられている傍らで、*no*-動詞は、接頭辞に空間的意味が見出せない PFV の動詞として用いられている。ここでも *aiz*-動詞 (734) に比べて *no*-動詞 (7) の件数は少ない。

nodambēt 「堰き止める」

接頭辞 *no*- 「PFV 化」

例文 3-126 (RAA. 23.08.2005)

Nekādas civilizācijas, zāle, mežs un mazā Līčupe, kas nodambēta no
 いかなる 文明-属 草 森 そして 小さな 関代 NO-堰きとめる-受過 から
 visām pusēm pēc bebru plāniem.
 すべての 側-複 応じて ビーバー-複属 計画-複

文明などどこにもなく、草があり、森があり、ビーバー達の思いのままに四方八方から堰きとめられた Līčupe 川がある。

例文 3-127 (D. 03.08.2006)

(..) katrs elektrības patērētājs tiem maksā dubultu tarifu par to, ka hesi
 各 電気-属 消費者 彼ら-与 払う-現3 倍の 料金-対 対して それ 従 水力発電所-複
 ir nodambējuši mūsu upes (..).
 be-現3 NO-堰き止める 私達-属 川-複対

どの電力の消費者も、水力発電所が我々の川を堰きとめたことに対して、彼らに倍の料金を払っている。

基動詞 *presēt* 「プレスする」でも同様のことが言える。『標準語辞典』における接頭辞動詞の辞書記述を見ると、接頭辞の空間的意味やその他の語彙的意味は体系的に反映されているが、*no*-動詞の意味記述では、本論文の 2.3. で扱った PFV の動詞の辞書記述のタイプの一つである *pabeigt*+基動詞の「終える」型で説明されているだけである（『標準語辞典』）。

iepresēt : *presējot iestiprināt* (kur iekšā). プレスをすることで据え付ける（どこか中に）

piepresēt : *presējot piestiprināt* (pie kā, klāt). プレスをすることで取り付ける（接着させて）

uzpresēt : *presējot piestiprināt* (uz kā, kam). プレスをすることで取り付ける（上に）

presējot izveidot, izgatavot (detāļu, priekšmetu).

プレスをすることで（部品やものを）生産する

izpresēt : *presējot izveidot* プレスをすることで生産する

sapresēt : *presējot izmainīt* (kā) formu, ievērojami palielināt (kā) blīvumu, arī saistīt, savienot (ko).
 プレスをすることで（何かの）形を変え、（何か）の密度をかなり高くする、また（何かを）つなぐ、結ぶ。

nopresēt : *presēt un pabeigt presēt* プレスして、プレスし終わる

nopresēt は、空間的意味なしに完了の意味を記す PFV の動詞として記述されている。ここでも他の接頭辞が空間的意味やその他の語彙的意味（例えば uz-は空間的意味「上」と語彙的意味「生産」）を基動詞に与えて PFV 化しているのに対して、接頭辞 no-は基動詞に空間的意味やその他の語彙的意味を与えずに直接基動詞を PFV 化している。また件数も nopresēt が 59 件、sapresēt が 788 件であった。

件数の点で逆に no-動詞が他の接頭辞動詞に勝る例として、基動詞 komplektēt 「組み立てる」とその sa-動詞（502 件）と no-動詞（7340 件）がある。『標準語辞典』では、基動詞と sa-動詞は「接頭辞の有無」によりアスペクト対立が示され、ここでも no-動詞は pabeigt+基動詞の「終える」型で説明されている。空間的意味の「共」を持つ sa-動詞と異なり、no-動詞にはやはり空間的意味が確認できない（『標準語辞典』）。

komplektēt : 1. veidot (kā komplektu).

(一式として) 形成する (IPFV)

2. veidot (kolektīvu) no atsevišķiem cilvēkiem, kuriem ir kopīgs mērķis, uzdevums.

共通の目標や課題を持つ、異なる人々から (集団を) 形成する (IPFV)

sakomplektēt : 1. izveidot (kā komplektu)

(一式として) 形成する (PFV)

2. izveidot (kolektīvu) no atsevišķiem cilvēkiem, kuriem ir kopīgs mērķis, uzdevums.

共通の目標や課題を持つ、異なる人々から (集団を) 形成する (PFV)

nokomplektēt : komplektēt un pabeigt komplektēt.

組み立て、組み立て終える

空間的意味が抽象化されずに残っている接頭辞と、多くの場合空間的意味を介さず基動詞を PFV 化している接頭辞 no-が付加される動詞の例を以下の表 3-7 に挙げる。基動詞は網掛けで示し、最も多い件数の接頭辞は太字で示した。接頭辞 no-は一番右側に、その他の空間的意味の接頭辞は左から件数の多い順に並べた。

接頭辞 no-が空間的意味を残す場合には、基動詞の示す動作と反対の動作を示すもの（例：grupēt 「グループ化する」と nogrupēt 「グループから外す」）と同一の動作を示すもの（例：kopēt 「コピーする」と nokopēt 「コピーする」）があるが、どちらの場合にも空間的意味（「除」や「隠」など）を記した。基動詞の動作を打ち消す他の空間的意味の接頭辞（例：bloķēt 「ブロックする」に対する atbloķēt 「ブロックを解除する」）はこの表では省略する。

表 3-7 : 空間的意味における接頭辞 no-と他の接頭辞の比較

最終確認日 : 2012 年 8 月 2 日

arhivēt 「アーカイブ化する」 (850)				
sa- 「共」 (10)	ie- 「中」 (4)			no- (2)

asfaltēt 「アスファルトで舗装する」 (7475)				
aiz- 「埋」 (8)	ie- 「中」 (3)	ap- 「周」 (1)		no- (2096)
bagarēt 「パワーシャベルで掘る」 (264)				
iz- 「通」 (86)	ie- 「中」 (1)	uz- 「上」 (1)		no- (1)
balansēt 「バランスをとる」 (5093)				
sa- 「共」 (19919)	iz- 「一面」 (83)			no- (258)
balzamēt 「防腐処理する」 (183)				
ie- 「中」 (380)				no- (0)
barikadēt 「バリケードをはる」 (1)				
aiz- 「遮」 (54)	ie- 「中」 (31)			no- (2)
betonēt 「コンクリートを打ち込む」 (2536)				
ie- 「中」 (702)	iz- 「一面」 (126)	aiz- 「埋」 (103)	uz- 「上」 (48)	no- (110)
blendēt 「ブレンドする」 (34)				
sa- 「共」 (244)				no- (0)
blenderēt 「ブレンドする」 (128)				
sa- 「共」 (830)	pie- 「付」 (3)	ie- 「中」 (4)		no- (0)
bloķēt 「ブロックする」 (28807)				
sa- 「固」 (158)	aiz- 「遮」 (22)	pie- 「付」 (12)		no- (5033)
bremzēt 「ブレーキをかける」 (4149?)				
pie- 「留」 (5823)				no- (4748)
cementēt 「セメントをかける」 (738)				
ie- 「中」 (274)	sa- 「固」 (147)	aiz- 「埋」 (46)	pie- 「付」 (19)	no- (18)
centrēt 「中心に集める」 (3490)				
ie- 「中」 (197)	iz- 「散」 (19)	sa- 「集」 (6)	uz- 「上」 (3)	no- (21)
dambēt 「ダムで堰きとめる」 (34)				
aiz- 「遮」 (734)	sa- 「共」 (24)	ie- 「中」 (12)	uz- 「上」 (7)	no- (7)
demisionēt 「辞職させる」 (8277)				
iz- 「外」 (15)	aiz- 「離」 (1)			no- (0)
destilēt 「蒸留する」 (771)				
iz- 「外」 (9)	at- 「離」 (4)			no- (0)
dokumentēt 「文書化する」 (8332)				
ie- 「中」 (17)				no- (1)
drillēt 「ドリルで掘る」 (247)				
iz- 「通」 (3)	ie- 「中」 (2)	ap- 「周」 (1)		no- (149)
ekonomēt 「節約する」 (5284)				

ie-「中」(4423)				no-(3)
faksēt「ファックスを送る」(37)				
aiz-「離」(11)	at-「来」(8)			no-(0)
fasēt「詰める」(6225)				
sa-「集」(1113)	ie-「中」(111)			no-(0)
federēt「スプリング掛けをする」(16)				
uz-「上」(5)	ie-「中」(1)			no-(4)
fiksēt「固定する」(67263)				
pie-「留」(2737)	ie-「中」(13)	sa-「共」(5)	uz-「上」(1)	no-(1414)
filtrēt「フィルターにかける」(2063)				
ie-「中」(2356)	iz-「外・通」(442)	aiz-「遮」(2)		no-(65)
glazēt「上薬・砂糖衣をかける」(921)				
ap-「周」(4)	uz-「上」(2)	iz-「一面」(1)		no-(21)
gofrēt「ひだ・ちぢれをつける」(651)				
sa-「共」(21)	ie-「中」(4)			no-(0)
gravēt「彫る」(1216)				
ie-「中」(2767)	uz-「上」(6)	ap-「周」(3)		no-(1)
greiderēt「グレーダー掛けをする」(1014)				
aiz-「埋」(2)	iz-「通」(4)	uz-「上」(1)		no-(343)
grupēt「グループ化する」(48872)				
sa-「集」(1800)	ie-「中」(4)	pie-「加」(1)		no-「離」(70)
gipsēt「ギプスをはめる」(37)				
ie-「中」(666)	sa-「共」(17)			no-(2)
importēt「輸入する」(26512)				
ie-「中」(4)				no-(0)
instalēt「インストールする」(2067)				
uz-「上」(108)	ie-「中」(51)	pie-「加」(5)		no-(5)
kapsulēt「カプセル化する」(12)				
ie-「中」(428)				no-(0)
kasēt「(税を)徴収する」(29684)				
ie-「中」(43062)				no-「除」(2)
kastrēt「去勢する」(1159)				
iz-「切」(198)				no-(1r ⁶¹)

⁶¹ 本論文の0.6.3で説明したが、『新聞図書館』では確認されず、ラジオ番組でのみ確認された用例には件数の後ろにrを付けた。

katalogizēt 「カタログ化する」 (86)				
ie- 「中」 (2)				no- (0)
klasificēt 「分類する」 (8795)				
sa- 「共」 (27)	ie- 「中」 (9)			no- (1)
kodēt 「コード化する」 (3072)				
ie- 「中」 (1681)	aiz- 「遮」 (8)	uz- 「上」 (4)		no- (83)
kodificēt 「法典化する」 (218)				
ie- 「中」 (1)				no- (0)
kombinēt 「組み合わせる」 (12079)				
sa- 「共」 (693)	iz- 「外」 (244)	ie- 「中」 (156)	pie- 「加」 (91)	no- (2)
kompostrēt 「パンチで穴を空ける」 (394)				
iz- 「通」 (18)	ie- 「中」 (3)			no- (20)
koncentrēt 「集中させる」 (44822)				
sa- 「集」 (1475)	ie- 「中」 (1)	aiz- 「離」 (1)		no- (54)
konservēt 「缶詰にする」 (6661)				
ie- 「中」 (2816)				no- (3)
konturēt 「輪郭を描く」 (82)				
ie- 「中」 (6)				no- (2)
kopēt 「コピーする」 (330627)				
pār- 「越」 (739)	iz- 「外」 (367)	ie- 「中」 (320)		no- 「離」 (2026)
krokot 「飾りひだをつける」 (537)				
sa- (201)	ie- 「中」 (5)	pie- 「付」 (4)		no- (0)
kultivēt 「耕す、養う」 (6451)				
ie- 「中」 (106)	iz- 「一面」 (10)	uz- 「上」 (8)		no- (78)
laminēt 「ラミネート加工する」 (744)				
ie- 「中」 (48)	ap- 「周」 (1)	uz- 「上」 (1)		no- (2)
lavierēt 「切り抜ける」 (1044)				
iz- 「出」 (258)	aiz- 「離」 (4)	ie- 「中」 (1)	pie- 「付」 (1)	no- (0)
magnetizēt 「磁化する」 (180)				
pie- 「近」 (5)				no- (0)
marinēt 「マリネにする」 (5835)				
ie- 「中」 (882)	iz- 「通」 (4)			no- (44)
marķēt 「印をつける」 (14254)				
ie- 「中」 (32)				no- (135)
maskēt 「隠す」 (6017)				

aiz-「遮」(10)	ie-「中」(1)			no-「消」(1974)
miksēt「ミックスする」(1809)				
sa-「混」(465)	ie-「中」(17)	pie-「加」(8)	uz-「上」(2)	no-(0)
pakot「包装する」(2027)				
ie-「中」(23987)	sa-「集」(1006)	iz-「外」(215)		no-(231)
parcelēt「区画化する」(220)				
sa-「割」(29)	ie-「中」(1)			no-(0)
plīvurot「ペールで覆う」(171)				
aiz-「遮」(689)	ap-「周」(1)	ie-「中」(1)		no-(0)
plombēt「詰める」(489)				
aiz-「詰」(270)	sa-「共」(29)	pie-「満」(8)	ie-「中」(2)	no-(358)
plūsēt「プラスする」(15)				
pie-「加」(188)	sa-「共」(13)			no-(0)
plusot「プラスする」(42)				
pie-「加」(687)	sa-「共」(15)	ie-「中」(6)	uz-「上」(2)	no-(1)
polsterēt「(家具に)当て布を取り付ける」(1053)				
uz-「上」(47)	iz-「一面」(25)	pie-「接」(9)	sa-「共」(6)	no-(22)
printēt「プリントする」(255)				
iz-「外」(303)	uz-「上」(5)	ie-「中」(1)		no-(1)
programmēt「プログラミングする」(9222)				
ie-「中」(3277)	sa-「集」(103)	uz-「上」(26)		no-「除」(4)
propagandēt「(思想・主義を)宣伝する」(4056)				
iz-「一面」(5)				no-(0)
protokolēt「議事録にする」(1272)				
ie-「中」(175)				no-(0)
reģistrēt「登録する」(215237)				
pie-「留」(3896)	ie-「中」(1335)	sa-「共」(305)	aiz-「離」(2)	no-(34)
reklamēt「宣伝する」(21080)				
iz-「散」(1065)	ie-「中」(1)			no-(26)
skenēt「スキャンする」(2020)				
ie-「中」(569)	iz-「通」(11)			no-(239)
summēt「合計する」(5373)				
sa-「集」(676)	pie-「加」(90)	ie-「中」(1)		no-(0)
šifrēt「暗号化する」(2082)				
ie-「中」(295)				no-(21)

tapsēt 「壁紙で覆う」 (473)				
iz- 「一面」 (153)	aiz- 「遮」 (1)			no- (11)
translēt 「放送する」 (7855)				
pār- 「移」 (8)				no- (1)
transplantēt 「移植する」 (637)				
pār- 「移」 (1)				no- (0)
transportēt 「輸送する」 (23302)				
aiz- 「遠」 (757)	at- 「来」 (108)	iz- 「外」 (2)		no- (2)
vakuumēt 「真空化する」 (19)				
ie- 「中」 (2)				no- (0)
želēt 「ジェル化する」 (90)				
sa- 「固」 (67)				no- (0)

空間的意味の接頭辞は、動作に加える空間的意味を経由して基動詞を PFV 化する。動作は様々な空間的意味と結びつくことがあるが、基動詞から最も連想される空間性を持つ接頭辞が形式的意味の接頭辞として機能している。

空間的意味の接頭辞 → 空間性の表示 → PFV 化

それに対して、接頭辞 no-は空間的意味を加えずに基動詞を直接 PFV 化することが多い。

接頭辞 no- → 空間性の表示 → PFV 化

他の接頭辞動詞に比べて no-動詞の件数は概して少ない。しかし件数は少ないながらも、動作に空間的意味を加える様々な接頭辞や、基動詞の示す動作の空間的意味と一致して形式的意味の接頭辞として機能する接頭辞を持った動詞に並行して no-動詞が存在すること自体が、接頭辞 no-の付加率を高くしている要因といえる。

3.8.3.2. 基動詞との語彙的関連性における比較

本節では、接頭辞と基動詞の語彙的関連性において、接頭辞 sa-と iz-を接頭辞 no-と比較⁶²して考察する。この2つの接頭辞は基動詞への付加率が高い（本論文 3.2.の表 3-4 またはグラフ 3-1 を参照：接頭辞 sa-は 25.8%、接頭辞 iz-は 23.3%）。接頭辞 ie-も付加率が高く、空間的意味「中」から様々な語彙的意味を派生させているが、どのような基動詞の語彙的意

⁶² 一般に接頭辞の意味研究において、接頭辞同士の比較は有効な手段である（Staltmane 1958d, Janda 1984, Russell 1986）。

味に対して接頭辞 ie-がどのような意味修正を行うのかは、本論文の 3.5.の接頭辞クリップの具体例で検討した通りである。

3.8.3.2.1. 接頭辞 sa-との比較

接頭辞 sa-の aspekto 的意味には形式的意味と量・時間的意味がある。量・時間的意味には増大アспект (augmentative) があり、viss 「すべての」、vesels 「一連の」、visāds 「あらゆる」、daudz 「多くの」などの主体や客体の多さを表す語を伴うことが多い。

例文 3-128 では、借用語の基動詞 marinēt 「マリネにする」と konservēt 「缶詰にする」の sa-動詞が、ラトヴィア語本来の基動詞 vārīt 「煮る」や bērt 「ふりかける」の sa-動詞と共に用いられ、動作量の多さが示されている。

例文 3-128 (DZ. 29.07.2010)

Viss, ko var savārīt, samarinēt, sakonservēt, sabērt, salocīt un
すべて 関代 できる-現3 SA-煮る SA-マリネにする SA-缶詰にする SA-ふりかける SA-折り曲げる そして
iemīcīt burciņās, nodērēs (..).
詰める 瓶-複位-指 役立つ-未3

煮ることができたり、酢漬けにできる、缶詰にできる、ふりかけられる、折り曲げられる、瓶に詰め込めるものはすべて役に立つだろう。

例文 3-129 では、基動詞 konservēt と接頭辞動詞 (接頭辞 iz-+再帰要素「満足のいく十分な動作」) と共に用いられる sa-動詞は、ジャムなどの様々な保存方法を述べている。

例文 3-129 (NRA. 04.08.2001)

Esmu izkonservējusies visu iespējamo, ko vien var konservēt, un
be-現1単 IZ-缶詰にする-能過 すべて 可能なこと-対 関代 だけ できる-現3 缶詰にする そして
visdažādākajos veidos, kā vien var sakonservēt – zāptes, kompoti, konservi
様々な-最 方法-複位 限り だけ できる-現3 SA-缶詰にする ジャム-複 コンポート-複 缶詰-複
– bet tagad vairs neko.
しかし 今 もはや 何も-対

私は缶詰に詰められるものは何でも、そしてジャム、コンポート、缶詰など、缶詰にできる様々な方法で十分缶詰にしてきた。でも今はもう何もしていない。

以降の例文でも、動作量の多さを示す接頭辞 sa-による接頭辞クリップの用例を挙げる。各例文ではいずれか、もしくはすべての sa-動詞は基動詞が借用語である。

例文 3-130 (LA. 26.06.2004)

Es vienmēr teicu, ka nav laika visu safotografēt un saskenēt.
私 いつも 言う-過1単 従 否-be-現3 時間-属 すべて-対 SA-写真に撮る そして SA-スキャンに撮る
すべてのものを写真に撮り、スキャンに撮る時間はない、と私はいつも言っていた。

例文 3-131 (SA. 28.06.2011)

Taču safilmēts un safotografēts viss bija labi.
 しかし SA-フィルムに撮る そして SA-写真に撮る すべて be-過 3 良い
 しかし動画や写真に撮られたものはどれも出来がよかった。

例文 3-132 (VZŽ. 15.10.2010)

Lai visu safilmētu un samontētu, paiet faktiski viena diena (..).
 ために すべて-対 SA-フィルムに撮る-願 そして SA-編集する-願 過ぎる-現 3 実際 1 日
 すべてをフィルムに撮影して編集するためには、結局一日が過ぎてしまう。

例文 3-133 (DB. 18.05.2005)

(..) tiks atskaitītas prasītās summas veikliem darboņiem, kuri (..) ir
 受-未 3 排除する-受過 求める-受過 金額-複 抜かりのない 仕事をする人-複 関代 be-現 3
sapirkuši vai saprivatizējuši īpašumus.
 SA-買う-能過 または SA-私有化する-能過 財産-複対
 財産を購入した、もしくは私有化した抜かりのない官僚へ要求された金額は除外される。

例文 3-134 は sa-動詞を 4 つ含んでいるが、savest 「集積する」と sakomplektēt 「組み立てる」の基動詞 vest 「運ぶ」と komplektēt 「組み立てる」は接頭辞 sa-の空間的意味「集」を顕在化させている。sašķirot 「仕分けする」の接頭辞 sa-は、基動詞 šķirot 「仕分けする」の語彙的意味「分配」と同じであり、接頭辞 sa-は形式的意味の接頭辞と捉えられる。sasvērt 「量り分けする」は基動詞 svērt 「量る」に接頭辞 sa-自体が持つ「分配」の意味が加わったものである。

例文 3-134 (DR. 30.11.2004)

Te saved jau sašķirotu precī, sasver un sakomplektē
 ここで 集積する-現 3 すでに 仕分けする-受過 商品-対 量り分けする-現 3 そして 組み立てる-現 3
pasūtījums.
 注文品-複対

ここではすでに仕分けされた商品が集積され、量り分けがされ、注文品が組み立てられる。

形式的意味の sa-が付加される基動詞の語彙的意味は「結合」、「接近」、「分配」、「粉碎」、「分裂」である (Staltmane 1958d, 66)。以下の表 3-8 で示すように、接頭辞 sa-は基動詞と語彙的関連性があり、基動詞は一定の意味グループにまとめることができる。これらの意味グループの基動詞に付加されると、接頭辞 sa-は形式的意味の接頭辞として機能する。sa-動詞に並行して no-動詞が存在する場合、接頭辞 no-と基動詞の語彙的関連性が希薄で、これらの no-動詞は、文脈を確認した限りにおいて空間的な意味修正を受けず、単に PFV の動詞として機能している。no-動詞の件数は sa-動詞の件数よりも少ないことがほとんどで、『新聞図書館』では確認されない no-動詞もある。表 3-7 と同様に、接頭辞 no-が空間的意味を示す場合にはその意味を記した。この場合 no-動詞は sa-動詞や基動詞とは大幅に語彙的意味が変わる。網掛け部分は接頭辞を形式的意味の接頭辞として機能させる、接頭辞と基動

詞との語彙的関連性を示す意味グループである。

表 3-8 : 語彙的関連性における接頭辞 no-と接頭辞 sa-の比較 (1)

最終確認日 : 2012 年 8 月 2 日

	「共」「一箇所」
noblendēt (0)	sablendēt 「ブレンドする」 (244)
noblenderēt (0)	sablenderēt 「ブレンドする」 (830)
noharmonizēt (1)	saharmonizēt 「調和させる」 (3)
nokombinēt (0)	sakombinēt 「組み合わせる」 (693)
nokompaktēt (0)	sakompaktēt 「コンパクト化する」 (1)
nokoncentrēt (54)	sakoncentrēt 「集中させる」 (1475)
nokonsolidēt (14)	sakonsolidēt 「固める」 (8)
nokooperēt (0)	sakooperēt 「協力する」 (6)
nomiksēt (0)	samiksēt 「ミックスする」 (465)
nosinhronizēt (1)	sasinhronizēt 「シンクロさせる」 (6)
nosintezēt (0)	sasintezēt 「合成する」 (1r)
nopresēt (59)	sapresēt 「プレスする」 (788)
nosummēt (0)	sasummēt 「合計する」 (676)
	「全体性」
nobalansēt (258)	sabalansēt 「バランスをとる」 (19919)
nogrupēt 「グループから外す」 (72)	sagrupēt 「グループ化する」 (1800)
noklasificēt (1)	saklasificēt 「分類する」 (27)
nokolekcionēt (0)	sakolekcionēt 「コレクションする」 (6)
nomontēt (646)	samontēt 「組み立てる」 (2137)
nonumūrēt (1)	sanumūrēt 「番号付けする」 (465)
noranžēt (0)	saranžēt 「整理する」 (17)
nosistemizēt (0)	sasistemizēt 「体系化する」 (31)
nostrukturēt (0)	sastrukturēt 「構造化する」 (102)
	「分割」
nogranulēt (0)	sagranulēt 「粒状にする」 (1)
noparcelēt (0)	saparcelēt 「区画化する」 (29)
	「接触」
nokomunicēt (26)	sakomunicēt 「情報を伝える」 (9)
nokontaktēt (0)	sakontaktēt 「接触させる」 (170)
nokoordinēt (13)	sakoordinēt 「調整する」 (105)

no-動詞と sa-動詞を比較すると、sa-動詞は客体の多さや「共」という空間的意味を前提とするような補語と結びつくのに対し、no-動詞にはそのような文脈が認めにくい。

基動詞の klasificēt「分類する」に対する sa-動詞と no-動詞を比較する。sa-動詞の例文 3-135 は、膨大な数の音楽作品を特徴に応じて様々に分類をする様子が述べられている。それに対して no-動詞の例文 3-136 では、救急救命の電話がただの診察ではなく、本当に救急車の配車が必要かどうかを分類（判断）する様子が述べられており、客体の補語の量の多さは話題になっていない。

例文 3-135 (D. 04.12.2003)

Lai pierādītu, cik dažāds cilvēks ir komponists Filips Glāss, viņš pats
 ために 証明する-願 どれだけ 様々な 人 be-現3 作曲家 彼 自分で
 samestarojis (..) PG Engine, kur katrs var noklausīties pulka viņa skaņdarbu un ...
 作り出す-能過 関代 各人 できる-現3 聞く 多くの 彼-属 作品-複数 そして
 saklasificēt tos pēc parametriem – priecīgs, skumjš, enerģisks, vēl kaut kāds.
 分類する それ-複対 応じて パラメーター-複 喜んだ 悲しい 力強い まだ 何らかの
 作曲家フィリップ・グラスがいかに多様な人だったかを証明するため、彼は自分で PG エンジンを作った。
 そのエンジンでは、どんな人も膨大な数の彼の作品をたくさん聞け、それらの作品を“うれしい”“寂しい”
 “エネルギー”などのパラメーターで分類できる。

例文 3-136 (RB. 14.04.2005)

(..) jau saņemot zvanu, dispečerdienests cenšas to „noklasificēt”, un reizēm
 すでに 受け取る-副 電話-対 配車係 努力する-現3 それ-対 NO-分類する そして 時に
 cilvēkam vajadzīga tikai konsultācija, nevis brigādes izsaukums.
 人-与 必要である だけ 相談 ではなく 救急隊-属 派遣
 (救急救命の) 電話を受けた時点ですでに、配車係はそれを“分類”しようとするが、必要なのは診察であって、救急隊の派遣ではないことが多い。

基動詞 presēt「プレスする」に対する sa-動詞と no-動詞も比較する。例文 3-137 の sa-動詞は複数の板をプレス（し合わせる）ことから空間的意味が認められるが、同じ記事からの例文 3-138 では、順次性のタクシスの中で動作を終えることだけが no-動詞で示されている。

例文 3-137 (PL. 12.02.2011)

Jo biezākas un izturīgākas ir virsmas, jo kvalitatīvāk tās sapresē
 ほど 厚い-比 そして 耐久性がある-比 be-現3 表面-複 ほど 質がよく-比 それ-複 プレスする-現3
 līmējamās plāksnes.
 貼る-受現 板-複対
 表面が厚く、耐久性があるほど、その表面は板同士をよりよい質でプレスする。

例文 3-138 (PL. 12.02.2011)

Ja izveidojas līmes izcilnis vai vilnīši, (..) šo vietu norīvē un nopresē.
 もし 形成される-現3 糊-属 突起 または 波-複-指 この 場所-対 研磨する-現3 そして プレスする-現3
 もし糊の盛り上がりや波ができてしまったら、その場所を研磨し、プレスする。

例文 3-139 から例文 3-141 では、接頭辞 sa-と基動詞に「全体性」という語彙的関連性がある。

例文 3-139 (LV. 27.05.2010)

Policija šobrīd skaidro, kādam mērķim šie dati ir sistematizēti. (..) Ja
警察 現在 説明する-現3 どんな 目的-与 これらの データ-複 be-現3 体系化する-受過 もし
šos datus nebija paredzēts publiskot, tad kāpēc gan tie tika sasistematizēti
これらの データ-複対 否-be-過3 予期する-受過 公表する では なぜ 助 それら 受過 体系化する-受過
un apstrādāti?
そして 加工する-受過

警察は現在どんな目的でこれらのデータが体系化されるのか調査中である。もしこれらのデータの公表が予定されていなかったのなら、どうして体系化され、加工されてしまっていたのか?

例文 3-140 (MV. 30.03.2007)

Es pat devos uz Latviesu folkloras krātuvi, domāju : tur viss būs
私 さえ 向かう-過1単 ヘ ラトヴィア人-複属 フォークロア-属 資料館 思う-過1単 そこで すべて be-未3
sakārtots un saklasificēts, taču nekā.
整理する-受過 そして 分類する-受過 しかし何-属

私はラトヴィア民俗資料館にも行った。そこでは何もかも整理され、分類されているだろうと思ったが、そんなことはなかった。

例文 3-141 (D. 19.11.2010)

(..) Roulinga paziņoja, ka (..) izstrādā Potera sāgas enciklopēdiju, kurā tad nu
知らせる-過3 従 作成する-現3 Poters-属 サガ-属 百科事典-対 関代 では 助
pa plauktiem saklasificēs un sanumurēs visas fantastiskās būtnes,
に 棚-複 分類する-未3 そして 番号付けする-未3 すべての 空想上の 生き物-複対
burvjus, magus un citus cilvēkveidīgos un necilvēcīgos moškus.
魔法使い-複対 魔術師-複対 そして 他の 人の形をした そして 残酷な 妖怪-複対
ハリーポッターのサガの百科事典を作成中で、あらゆる空想上の生き物たち、魔法使いたち、魔術師たち、
その他の人間の姿をした残酷な妖怪を整然と分類し、番号付けをする、とローリングは発表した。

基動詞が「生産」という語彙的グループにまとめられる場合も、接頭辞 sa-が付加されることが多い (表 3-9)。

表 3-9 : 語彙的関連性における接頭辞 no-と接頭辞 sa-の比較 (2)

最終確認日 : 2012 年 8 月 2 日

	「生産」
nofabricēt (1)	safabricēt 「作る」 (3498)
nokomponēt (0)	sakomponēt 「作曲する」 (332)
nokonstruēt (0)	sakonstruēt 「建てる」 (82)
nomaketēt (1)	samaketēt 「(模型を) 作る」 (24)
nomeistarot (0)	sameistarot 「作る」 (950)

noprojektēt (1)	saprojektēt 「企画する」 (19)
noštancēt (6)	saštancēt 「量産する」 (43)

インタビュー記事からの例文 3-142 では、基動詞 štancēt 「量産する」を用いた質問に対して sa-動詞が答えに用いられている。ただしここでの接頭辞 sa-は形式的意味の接頭辞だけでなく、増大アスペクトを示す量・時間的意味の接頭辞とも解釈できる。

例文 3-142 (K. 4.2010)

Vai ir kāda recepte, formula, kas ļautu štancēt hitus kā burgerus?
 か be-現3 何らかの レシピ 定式 関代 可能にする-願 量産する ヒット-複対 のように

ハンバーガー-複対

— Primārais ir melodiskais kodols. (..) Tā ir liela lieta. To tā
 優先的な be-現3 メロディーの 核 それ be-現3 大きな こと それ-対 そのように

saštancēt nevar.

型に入れて作る 否-できる-現

ハンバーガーのようにヒット曲を“量産”できるようなレシピや定式はありますか？

— 優先するのはメロディーの核です。それは大きなことです。それはそう簡単に量産はできませんよ。

『標準語辞典』の記述では、fabricēt と safabricēt は共に「(工業製品)を作る」という同じ説明がなされているが、safabricēt には第2の意味記述として fabricēt にはない「(嘘の情報や事実などを)集める、捏造する」という意味がある(『標準語辞典』)。『新聞図書館』における sa-動詞の件数は3443件、no-動詞はわずか1件であった。その no-動詞の用例を例文 3-143 に示す。

例文 3-143 (BNS. 03.12.2005)

Mēs pieprasām arestētā Benesa Aijo nekavējoties atbrīvošanu un specdienestu
 私達 要求する-現1複 逮捕する-受過 Beness-属 直ちに 解放-対 そして 捜査機関-複属
 nofabricētās krimināllietas izbeigšanu.
 捏造する-受過 刑事事件-属 打ち切り-対

我々は逮捕された Beness Aijo を直ちに釈放し、捜査機関により捏造された刑事事件の打ち切りを要求する。

刑事事件が捏造されたものと訴える mēs 「我々」を主語にした例文 3-143 は、2005年に逮捕された政治活動家 Beness Aijo の釈放を求める市民団体の声明文がそのまま記事に掲載されたものである。この事件に関する全記事30件のうち、no-動詞が用いられているこの記事を除いたすべての記事で、基動詞または sa-動詞が用いられている(例文 3-144 と例文 3-145)。

例文 3-144 (LA. 06.12.2005)

Apvienība „Par cilvēka tiesībām vienotā Latvijā” izplatījusi paziņojumu, kurā
 連合 ために 人-属 権利-複 連合する-受過 ラトヴィア-位 広める-能過 通知-対 関代
 lietu pret B. Aijo sauc par fabricētu.
 件-対 対して 呼ぶ-現3 と 捏造する-受過

連合「統一ラトヴィアにおける人権のために」は声明文を発表し、B. Aijo に向けられた事件を捏造されたものとしている。

例文 3-145 (RB. 06.12.2005)

Aijo lietas izskatīšanas gaitā pauda viedokli, ka kriminālieta pret viņu ir
 件-属 捜査-属 展開-位 表す-過3 意見-対 従 刑事事件 対して彼 be-現3
 safabricēta un to esot izdarījušas varas iestādes.
 捏造する-受過 そして それ-対 be-伝 する-能過 権力-属 機関-複

Aijo は事件捜査の過程で、彼に向けられたこの刑事事件は捏造されたものであり、それは権力機関が行ったという意見を述べた。

本章の 3.5.3.では、言語文化論で批判される PFV 化の接頭辞 no-がテキストの校閲により削除される例を見た。例文 3-144 の no-動詞も慣用的で、本来期待される別の接頭辞動詞 (safabricēt) の代わりに使われたために、他の記事の例文 3-144 と例文 3-145 では基動詞や sa-動詞に置き換えられたと考えられる。

Staltmane は、基動詞の語彙的意味が「損害」という意味の場合、sa-動詞と no-動詞は類義語であると指摘している。ただし、sa-動詞の方が損害の程度が低いという (Staltmane 1958d, 68)。借用語の動詞では以下の表 3-10 に示した動詞が挙げられる。

表 3-10：語彙的関連性における接頭辞 no-と接頭辞 sa-の比較 (3)

最終確認日：2012年8月2日

	「損害」
nobombardēt (56)	sabombardēt 「爆撃する」 (897)
nokompromitēt (0)	sakompromitēt 「名誉を傷つける」 (648)
notraumēt (40)	satraumēt 「怪我をさせる」 (331)

英米軍による第二次世界大戦時のドレスデンの爆撃では、基動詞 bombardēt 「爆撃する」の no-動詞と sa-動詞が共に用いられている。

例文 3-146 (D. 03.11.2004)

(..) Elizabete II gatavojas atvainoties par Drēzdenes nobombardēšanu Otrā pasaules
 準備する-現3 謝罪する 対して ドレスデン-属 爆撃-対 第二の 世界-属
 kara gadus.
 戦争-属 年-複位

エリザベス女王 2 世は、第二次世界大戦時のドレスデンの爆撃を謝罪する準備をしている。

例文 3-147 (D. 10.12.2005)

(..) Ezergailis novērojis, kā amerikāņu un britu lidmašīnas
 観察する-能過 いかにかに アメリカ人-複属 そして イギリス人-複属 飛行機-複

sabombardē Drēzdeni.
爆撃する-現3 ドレスデン-対

Ezergailis は、アメリカとイギリスの飛行機がドレスデンを爆撃するのを見た。

2011年のリビア攻撃に関する no-動詞の用例は見つからず、基動詞が2日間のプロセスという IPFV、sa-動詞が結果達成を示す PFV の動詞として用いられている用例を確認した。

例文 3-148 (NRA. 28.06.2011)

Divas dienas bombardē un nevar sabombardēt Kadāfi mītni!
2 日-複対 爆撃する-現3 そして 否-できる-現 爆撃する 陣営-対

2日間爆撃をしているのに、カダフィの陣営を爆撃できない！

以上、特定の意味グループの基動詞に分けて接頭辞 sa-と接頭辞 no-を比較した。接頭辞 sa-は本来の空間的意味「共」を持ち、形式的意味の接頭辞として機能する際、基動詞は「全体性」や「分割」といった一定の語彙的意味のグループにまとめることができた。基動詞との語彙的関連性がある接頭辞 sa-に対して、接頭辞 no-はそれがない。おそらく語彙的関連性の希薄さゆえに、多くの場合 no-動詞は件数の点で sa-動詞に劣っている。

3.8.3.2.2. 接頭辞 iz-との比較

接頭辞 iz-は空間的意味「外」「通」「散」を持つ。基動詞の示す動作がこれらの空間的意味を前提とする基動詞に形式的意味の接頭辞として付加される。例えば空間的意味「外」が抽象化したと思われる izglābt / glābt「救う」や izārstēt / ārstēt「治療する」、空間的意味「通」が抽象化したと思われる izlasīt / lasīt「読む」のアスペクト対立がある。

接頭辞 iz-のどの空間的意味が抽象化したのかは特定できないが、アスペクト対立をなすラトヴィア語本来の動詞で、izpušķot / pušķot「飾る」、izgreznot / greznot「豪華にする」izdaiļot / daiļot「美しくする」、izrotāt / rotāt「飾る」のように基動詞が「装飾」という語彙的グループにまとめられるものがある。表 3-11 では iz-が形式的意味の接頭辞として機能し、「装飾」という語彙的意味にまとめられる借用語の動詞を挙げる。件数は iz-動詞の方が多。

表 3-11：語彙的関連性における接頭辞 no-と接頭辞 iz-の比較 (1)

最終確認日：2012年8月2日

	「装飾」
nodekorēt (4)	izdekorēt 「装飾する」 (933)
nodrapēt (3)	izdrapēt 「覆う」 (6)
nogarnēt (4)	izgarnēt 「盛り付けをする」 (14)
noornamentēt (0)	izornamentēt 「装飾をする」 (2)

ドイツ出身の女優の葬儀における国旗で覆われた棺の描写では、no-動詞の用例は『新聞図書館』で確認されなかったが、基動詞 *drapēt* 「覆う」とその *iz*-動詞の使用は確認された。

例文 3-149 (NRA. 05.05.2000)

Dītriha zārku drapēja ar ASV karogu un ar lidmašīnu nosūtīja uz Berlīni.
Dītriha-属 棺-対 覆う-過3 で アメリカ合衆国 旗-対 そして で 飛行機 送る-過3 へ ベルリン
Tur to pārklāja ar nesen apvienotās Vācijas karogu.
そこで それ-対 覆い直す-過3 で 最近 統合する-受過 ドイツ-属 旗

ディートリッヒの棺はアメリカ合衆国の旗で覆われ、飛行機でベルリンに運ばれた。そこで統一されたばかりのドイツの旗に覆い直された。

例文 3-150 (VAVZ. 08.01.2005)

Pēc nāves zārks, izdrapēts ar audumu ASV karoga krāsās, tika pārvests
後で 死 棺 覆う-受過 で 布 アメリカ合衆国 旗-属 色-複位 受-過3 移送する-受過
uz Vāciju, kur to pārklāja ar nesen apvienotās Vācijas karogu.
へ ドイツ 関代 それ-対 覆い直す-過3 で 最近 統合する-受過 ドイツ-属 旗

[ディートリッヒの] 死後、棺はアメリカ合衆国の色をした布で覆われドイツに移送され、統一されたばかりのドイツの旗に覆われた。

接頭辞 *iz*-は PFV 性の特徴の一つである「動作の完全性」と同じように「動作実現の大きな程度」を示すことがあり、量・時間的意味と形式的意味の区別が難しい (Staltmane 1958d, 75)。no-動詞も PFV の動詞として動作の徹底性を示すが、接頭辞 *iz*-は「知的活動」という語彙的意味にまとめられる基動詞と結びつき、「綿密性」のニュアンスを示す。このニュアンスは no-動詞にはない、接頭辞自体が特定の意味グループの動詞と結びついて発揮される。ラトヴィア語本来の動詞では、*izpētīt* / *pētīt* 「研究する」、*iztulkot* / *tulkot* 「解釈する」、*izmācīt* / *mācīt* 「教える」、*izmācīties* / *mācīties* 「学ぶ」などがある。表 3-12 で示したように、基動詞との語彙的関連性が強い sa-動詞と同様、*iz*-動詞は全体として件数で no-動詞に勝っている。

表 3-12：語彙的関連性における接頭辞 no-と接頭辞 iz-の比較 (2)

最終確認日：2012年8月2日

	「知的活動」+接頭辞 iz-「綿密性」
noanalizēt (4)	izanalizēt 「分析する」(10625)
nocenzēt (4)	izcenzēt 「検閲する」(27)
nodebatēt (2)	izdebatēt 「討論する」(275)
nodefinēt (940)	izdefinēt 「定義する」(1)
nodiskutēt (0)	izdiskutēt 「議論する」(2476)
nointerpretēt (4)	izinterpretēt 「解釈する」(2)
nokalkulēt (1)	izkalkulēt 「計算する」(730)
nokonspektēt (1)	izkonspektēt 「概略する」(26)

nokontrolēt (90)	izkontrolēt 「操作する」 (2199)
nomanevrēt (2)	izmanevrēt 「扱う」 (56)
nomanipulēt (19)	izmanipulēt 「操る」 (7)
nopalpēt (1)	izpalpēt 「触診する」 (4)
noprognozēt (47)	izprognozēt 「予測する」 (1r)
norevidēt (0)	izrevidēt 「監査する」 (456)
nozondēt (1)	izzondēt 「研究する」 (91)

接頭辞 iz-が形式的意味の接頭辞として機能する場合、基動詞には「装飾」や「知的活動」といった共通する語彙的意味が見られる。基動詞が「知的活動」という語彙的意味では、接頭辞 iz-は「緻密性」のニュアンスを加える。接頭辞 sa-との比較と同様、接頭辞 iz-との比較でも、接頭辞 no-は基動詞との語彙的関連性が希薄なまま基動詞を PFV 化している。件数の点でも、接頭辞と基動詞の語彙的関連性がある iz-動詞の方が全体として多い。no-動詞は接頭辞と基動詞の語彙的関連性が希薄、またはないながらも件数としては少数ながら存在することが、接頭辞 no-の付加率を高めている要因と考えられる。

接頭辞 no-は、sa-や iz-のような他の接頭辞と比較して、基動詞に対する空間的意味やその他の語彙的関連性が希薄なまま基動詞を PFV 化することから、空間的意味をもとに形式的意味の接頭辞として機能している他の接頭辞よりも、“より形式的な”接頭辞であり、多くの基動詞の“PFV 化に特化した”接頭辞である。

言語文化論では、余剰な PFV 化の接頭辞としてもつばら接頭辞 no-が批判されてきた。その根拠は、借用語の基動詞にすでにある PFV の意味であった。しかし、基動詞との語彙的関連性を持った接頭辞が付加された他の PFV の動詞 (sa-動詞や iz-動詞) が批判されてこなかったことを考えると、言語文化論は接頭辞 no-の基動詞との語彙的関連性の希薄さやそれゆえの接頭辞 no-の形式化に対して反対の立場をとっていると言えるかもしれない。

3.9. 第3章のまとめ

借用語の動詞への接頭辞付加は、語形成の言語活動としての側面を反映した言語現象であり、ラトヴィア語本来の接頭辞動詞の使用よりも話者自身の関与が大きい。

辞書に登録されていないことが多い借用語の接頭辞動詞の意味分析には、既存の語形成のモデルや文脈を考慮に入れる必要がある。借用語の動詞への接頭辞付加のメカニズムである類推を裏付け、文脈の中での接頭辞動詞の意味の特定に役立つのが接頭辞クリップである。これは、同一の意味修正を行う同一の接頭辞が異なる基動詞に付加され、近い文脈で用いられる現象である。

1230 の借用語の動詞と 11 の接頭辞を元に、接頭辞付加の数量的な動向を『新聞図書館』

で調査した結果、理論的には派生が可能な 13530 の接頭辞動詞のうち 19.5%の動詞が見つかった。11 の接頭辞のうち 1 つでも接頭辞が付加されるのは、1230 の動詞のうち 63.7%の動詞である。接頭辞 no-は付加率が特に高く、1230 の動詞のうち 40.0%の動詞に付加される。

アスペクト論に基づいたスラヴ諸語の先行研究と比較して、ラトヴィア語の借用語の動詞の PFV 化は、もっぱら言語文化論で好ましくないものとして批判されてきた。実際に新聞記事の校閲では接頭辞 no-が削除されることもある。

接頭辞 no-は本来「下」「離」という空間的意味を持つが、多くの場合は形式的意味の接頭辞として、広い語彙的意味の基動詞を PFV 化している。

本論文の 2.6.で挙げたアスペクト対立の相対性を鑑みた際、基動詞に PFV 性が認めやすいこと自体はアスペクト対立の形成の障害にはならず、基動詞に接頭辞 no-を加えることで相対的に no-動詞が PFV の動詞になり、基動詞が相対的に IPFV の動詞になると解釈できる。この借用語の動詞の PFV 化の再解釈は、アスペクト論に拠らなかった言語文化論に一石を投げ、話者を主体に捉えたより言語の実態に近い解釈と分析を可能にする。

本章では、IPFV の基動詞に対する PFV の no-動詞を例に、意味対立、統語的特徴、モーダル的な特徴などを論じた。特に言語文化論で推奨される文中のアスペクトの統一が、結果的には言語文化論が批判する借用語の動詞の PFV 化を支持することになり、言語文化論内の矛盾も明らかになった。

付加率の高い他の接頭辞 (sa-と iz-) と比較して、接頭辞 no-は基動詞との語彙的関連性が希薄で、空間的意味や何らかのニュアンスを基動詞に加えることなく、基動詞の PFV 化に特化している。基動詞が示す動作から連想される空間的意味を持ち、形式的意味の接頭辞として機能する他の接頭辞に並行して、接頭辞 no-が少数ながらも存在することが、この接頭辞の付加率を高めている要因と考えられる。

借用語の動詞への接頭辞付加は、ラトヴィア語本来の語形成の手段により借用語の動詞を語彙体系に組み込んでいく過程である。接頭辞は国際的な借用語を“その言語らしくする”手段であり、接頭辞付加はそのプロセスである。その点で、本来“ラトヴィア語らしさ”を追求する言語文化論が借用語を“ラトヴィア語らしく”する接頭辞の付加に異論を唱えることは逆説的である。

一方で、アスペクト対立やその他のアスペクト的意味が、話者主体の動作への時間的な視点であることを鑑みると、接頭辞付加には話者の個人性や主観的側面がある可能性がある。特に言語の主観的側面の表示は、言語使用において社会的に制限されることが多い。

次章では対立アスペクトを離れ、「少し」という個別的なアスペクトの意味を持つ接頭辞 pa-を例に、アスペクトと話者による動作への主観的評価の交差点を示す。